五和町史資料編（その２）

下内野城跡

しもうちのじょうあと

熊本県天草郡五和町大字下内野字城山所在の中世城跡

本渡市立歴史民俗資料館

平成７年３月

熊本県天草郡五和町教育委員会

発刊のことば

私たちの五和町には全国的に注目される　「沖の原貝塚」をはじめ、貴重な多数の史蹟・史実が残されています。ことに中世におきましては町内に５ケ所もの中世城跡が存在しておりまして、この様な事は県内でも稀有の事とされております。

町では一昨年から町おこしの一環として町史の編纂事業を進めておりまして、ここに町史資料編(その２)として、「下内野城跡」の調査報告書を刊行する事にいたしました。ことに本調査には、町史編纂委員長の鶴田倉造先生や町史編纂執筆委員の大田幸博先生をはじめとして、町史編纂委員会、町教育委員会、町文化財保護委員会の総力を結集して事に当たって頂きました。必ずや本調査の結果は郷土に対する再理解と愛郷心の振起に発展するものと信じます。

ここに、本事業に御協力頂きました多くの方々に感謝しますとともに、本報告書が郷土の再発見と町発展の原動力となることを祈念しつつ、本書発刊のことばと致します。

平成７年３月３１日

五和町長　伊藤山陽

序　　文

五和町には５ケ所に中世城跡が残っています。今回、発掘調査を行い、調査報告書をまとめましたのは、下内野地区にあります丘城です。文献上では「下内野城」と呼ばれています。

今日でも城山とよばれる丘に土塁や堀切が残っていまして、昔の城としての面影を忍ぶことができますが、残念なことに、城に関連した文献がほとんどなく、時代もまったく不明でした。

この点から、今回、町史編纂を契機に下内野城の本格的な調査ができました事は大きな喜びとなりました。

調査の実施にあたりましては、町史編纂委員長の鶴田倉造先生や執筆委員の大田幸博先生から御援助をいただき、地元の皆様など多くの方々の御協力を賜わりました。

関係の皆様方に対し、厚くお礼申し上げますと共に本書が愛郷心の高揚につながります事を祈念いたします。

平成７年３月31日

五和町教育長　岩崎直志

本 文 目 次

第Ⅰ章　調査の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第1節　調査の組織 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第2節　調査の経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第3節　城跡について（下内野城跡についての概要） ・・・・・・・・・・ 2

第Ⅱ章　遺跡の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
第1節　五和町について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
第2節　五和町の上代遺跡について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
第3節　五和町に所在する中世城跡について ・・・・・・・・・・・・・・ 11
第4節　内野川の川道と沿岸道路 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
第5節　内野川と城跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
第6節　字図と下内野城跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
第7節　下内野城跡の地形と現状 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
第8節　地籍図と下内野城跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16

第Ⅲ章　調査の成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
第1節　Ⅰ　郭 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
第2節　窪　地 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
第3節　Ⅱ　郭 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
第4節　堀　切 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
第5節　Ⅲ　郭 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
第6節　Ⅳ　郭 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
第7節　斜面部 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
第8節　残　壕 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35

第Ⅳ章　出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38

第Ⅴ章　ま と め ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51

《考察1》　五和町に所在する中世城跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56
《考察2》　慶安四年の「差出」について ・・・・・・・・・・・・・・・・ 64
《付　論》　下内野城（小峰城）　　鶴田倉造 ・・・・・・・・・・・・・ 69

写　真　図　版

図版１　下内野城跡遠景　（北東方向より）
図版２　下内野城跡遠景　（西方向より）
図版３　下内野城跡より北方向（海岸）を望む
図版４　航空写真　（手前よりⅢ郭→Ⅰ郭）
図版５　Ⅰ郭　土塁①
図版６　Ⅰ郭　１区画の金比羅神社
図版７　Ⅰ郭　２区画
図版８　斜面部　ｂ郭③　調査風景
図版９　北方向よりⅣ郭を望む
図版10　ｂ郭①　残壕　（左：Ｔ16、右：Ｔ15）
図版11　ｂ郭②　残壕　（Ｔ17）
図版12　Ⅲ郭　建物跡・柱列跡
図版13　建物跡（南東方向より）
図版14　Ⅱ郭　柱穴・土坑
図版15　航空写真（左よりⅢ郭→堀切→Ⅱ郭）
図版16　堀切　（東側より）
図版17　堀切土層断面
図版18　出土遺物①
図版19　出土遺物②
図版20　出土遺物③
図版21　御領城遠景（写真中央右は東禅寺）
図版22　城木場城遠景（写真中央の丘陵）
図版23　三川城遠景（写真中央左の丘陵）
図版24　三川城遠景（写真中央）
図版25　鬼池城遠景（写真中央の丘陵）
図版26　鬼池城　迫地部分
図版27　鬼池城　旧道沿いの石垣
図版28　鬼池城　馬蹄形の丘陵

例　言

1．本書は熊本県天草郡五和町教育委員会が、平成６年度に実施した発掘調査の報告書である。
2．発掘調査を実施した遺跡は、五和町大字下内野字城山に所在する中世城跡「下内野城跡」である。
3．現地調査は鶴田倉造氏（町史編纂委員長）と大田幸博氏（熊本県教育庁文化課・町史執筆委員）がその任にあたった。
4．出土遺物については、五和町教育委員会で保管している。
5．出土遺物の実測は大田氏が行った。
6．本書の執筆は大田氏が行った。さらに鶴田氏より城跡についての原稿をいただいた。第Ⅰ章第１・２節は神田日出紀（町史編纂室）が担当した。
7．遺構及び遺物の製図は石工みゆき氏が行なった。
8．発掘調査過程の写真撮影は大田氏が行い、空中写真・出土遺物写真の撮影は前田一生氏が行った。
9．本書の編集は大田氏が統括し、編集実務は溝口真由美氏が行った。

挿 図 目 次

第１図　下内野城跡と周辺地形図・・・・3
第２図　城跡位置図・・・・・・・・・・・8
第３図　五和町地形図・・・・・・・・・・9
第４図　通詞島周辺地形図・・・・・・・・9
第５図　城跡周辺地形図と字図・・・・・13
第６図　城跡地形図と地籍図・・・・・・17
第７図　下内野城跡地形測量図・・・・・19
第８図　Ⅰ郭地形測量図・・・・・・・・22
第９図　敷石検出状況（Ｔ３）・・・・・23
第10図　窪地地形測量図・・・・・・・・24
第11図　Ⅱ郭・堀切地形測量図・・・・・26
第12図　柱穴・土坑検出状況（Ｔ８）・・27
第13図　Ⅲ郭地形測量図・・・・・・・・30
第14図　建物跡・柱列実測図（Ｔ13）・・31
第15図　Ⅳ郭地形測量図・・・・・・・・33
第16図　Ｔ15断面図・・・・・・・・・・35
第17図　Ｔ16断面図・・・・・・・・・・36
第18図　Ｔ17断面図・・・・・・・・・・37
第19図　Ｔ18断面図・・・・・・・・・・36
第20図　堀切断面図・・・・・・・・・・36
第21図　遺物実測図①・・・・・・・・・40
第22図　遺物実測図②・・・・・・・・・42
第23図　遺物実測図③・・・・・・・・・45
第24図　遺物実測図④・・・・・・・・・48
第25図　遺物実測図⑤・・・・・・・・・49
第26図　御領城跡周辺地形図および字図・57
第27図　三川城跡周辺地形図および字図・59
第28図　城木場城跡周辺地形図および字図60
第29図　鬼池城跡周辺地形図および字図・62
第30図　慶安四年の「差出」に見える中世城跡位置図　・67

表 目 次

第１表　五和町中世城跡調査計画書・・・2
第２表　上代遺跡一覧表・・・・・・・・8
第３表　中世城跡一覧表・・・・・・・・11
第４表　下内野城跡周辺字名一覧・・・・15
第５表　下内野城跡地番表・・・・・・・16
第６表　敷石計測表・・・・・・・・・・23
第７表　Ⅰ郭トレンチ観察表・・・・・・23
第８表　柱穴観察表・・・・・・・・・・27
第９表　建物跡柱穴観察表・・・・・・・31
第10表　柱列観察表・・・・・・・・・・31
第11表　Ｔ15土色観察表・・・・・・・・35
第12表　Ｔ16土色観察表・・・・・・・・36
第13表　Ｔ17土色観察表・・・・・・・・37
第14表　Ｔ18土色観察表・・・・・・・・36
第15表　堀切土色観察表・・・・・・・・37
第16表　遺物観察表①・・・・・・・・・39
第17表　遺物観察表②・・・・・・・・・41
第18表　遺物観察表③・・・・・・・・・43
第19表　遺物観察表④・・・・・・・・・44
第20表　遺物観察表⑤・・・・・・・・・46
第21表　遺物観察表⑥・・・・・・・・・47
第22表　遺物観察表⑦・・・・・・・・・50
第23表　調査面積に対する遺物出土量・・52
第24表　出土遺物年代別分類表・・・・・53
第25表　慶安四年「差出」に見える中世城跡一覧①・・64
第26表　慶安四年「差出」に見える中世城跡一覧②・・65
第27表　慶安四年「差出」に見える中世城跡一覧③・・66
第28表　慶安四年「差出」に見える中世城跡一覧④・・67
第29表　「差出」に欠落の主要城跡一覧・・68

第Ⅰ章　調査の概要

第1節　調査の組織

調査主体　五和町教育委員会

調査責任者　岩崎直志(五和町教育長)

調査担当者　鶴田倉造(町史編纂委員長)・大田幸博(熊本県教育庁文化課・町史執筆委員)

調査員　平田正範(町史編纂委員)・山本　繁(町史編纂委員)

調査機関　五和町史編纂委員会

協力者　〔調　査〕黒田裕司(三加和町教育委員会)

〔地権者〕長島城四郎・城下義行・長島一高・宮本久男・桑原稲雄・桑原米雄

〔教育委員〕佐々木鴻雄・荒木忠夫・山川　亘・田中典明

〔文化財保護委員〕

松野俊明・長野　潮・宮崎照志・山田義光・中井國之・長島　悟・本多　隆

〔教育課長〕池崎　正(前)・宮崎明樹(現)

調査事務局　〔五和町史編纂室〕

金子喜世男(前室長)・井上英二(室長)・神田日出紀(係長)・泉　喜代一

林　弘美

報告書作成　大田幸博

石工みゆき・溝口真由美

整理作業　林　枝三

発掘従事　松原会紀・井上ウメ子・佐々木トシミ・城下ツタエ・桑原ヒサミ・花井智子

梅本千鶴子・福島ミツエ・樋口トミエ

〔教育委員会〕福島永子・池田明子・桑原国行・山本幸伸・木口聖一・酒井孝寛

伐採従事　森田洋介

第2節　調査の経緯

〔1〕五和町では平成5年から町史編纂事業に取り組む事になった。この中で中世分野においては積極的な行動をとる事とし、数カ年計画で文献調査に加えて、フィールド調査や発掘調査の成果を折り込む計画がなされた。その第一段階として、町内所在の中世城跡をくまなく踏査して、第1表のような計画書を作成した。

〔2〕この中で、見た目に最も中世城らしく、しかも大部分が畑地となっている下内野城跡が、最初の取り組みとして最も手頃であるとの結論に達した。

〔3〕これら一連の計画は、中世の文献資料に考古学的な資料を加味して、より一層、五和町

	城跡名	別　称	現　　況	地形測量	発掘調査
1	鬼池城	(宮津城)	・村落が一つの城である。 ・潮音寺も含まれるとされる。	×	△ (部分的に可能)
2	下内野城	(小峰城)	・内野川の東岸山に所在する。 ・明確な縄張りが残っている。 ・畑地と山林からなっている。	◎ (1／200地形図を作成)	◎
3	御領城	――	・中心部は芳証寺の境内になっている。 ・城跡関連地名が数多く残っている。 (馬場・木戸・堀・城内・城代河)	×	○ (境内に墓地分譲地の残りあり。この箇所につき調査可能)
4	三川城	――	・主郭は非常な荒地である。 ・主郭に八坂神社あり。 ・大穴があり、ここから70～80年前に刀が出土している。	◎ (調査前に雑林の伐採が必要)	◎
5	城木場城	――	・主郭は草地で、上面は楯を伏せた様な広い平坦地あり。	○ (調査前に雑林の伐採が必要)	◎

第１表　五和町中世城跡調査計画書

における中世史の内容を高めるという認識に基づくものである。

〔4〕　平成６年３月に簡単な試掘を行ない、本調査は４月下旬から５月上旬のゴールデン・ウィークを利用して、計10日間の調査を行なった。

〔5〕　調査には鶴田倉造氏(町史編纂委員長)と大田幸博氏(熊本県教育庁文化課・町史執筆委員)があたり、後半の実測段階で黒田裕司氏(三加和町教育委員会)の協力を得た。

〔6〕　調査期間中は神田(町史編纂室)が現場に駐在し、調査の補助員を勤めると共に地元との調整にあたった。

〔7〕　同じく調査の期間中、教育委員会から毎日一名の職員が交代で発掘調査に従事し、体験学習をした。

〔8〕　発掘調査を終了した後、休日を利用して大田氏と山本繁氏(町史編纂委員)および神田・林(町史編纂室)で城跡地の測量調査を重ねた。

〔神田日出紀〕

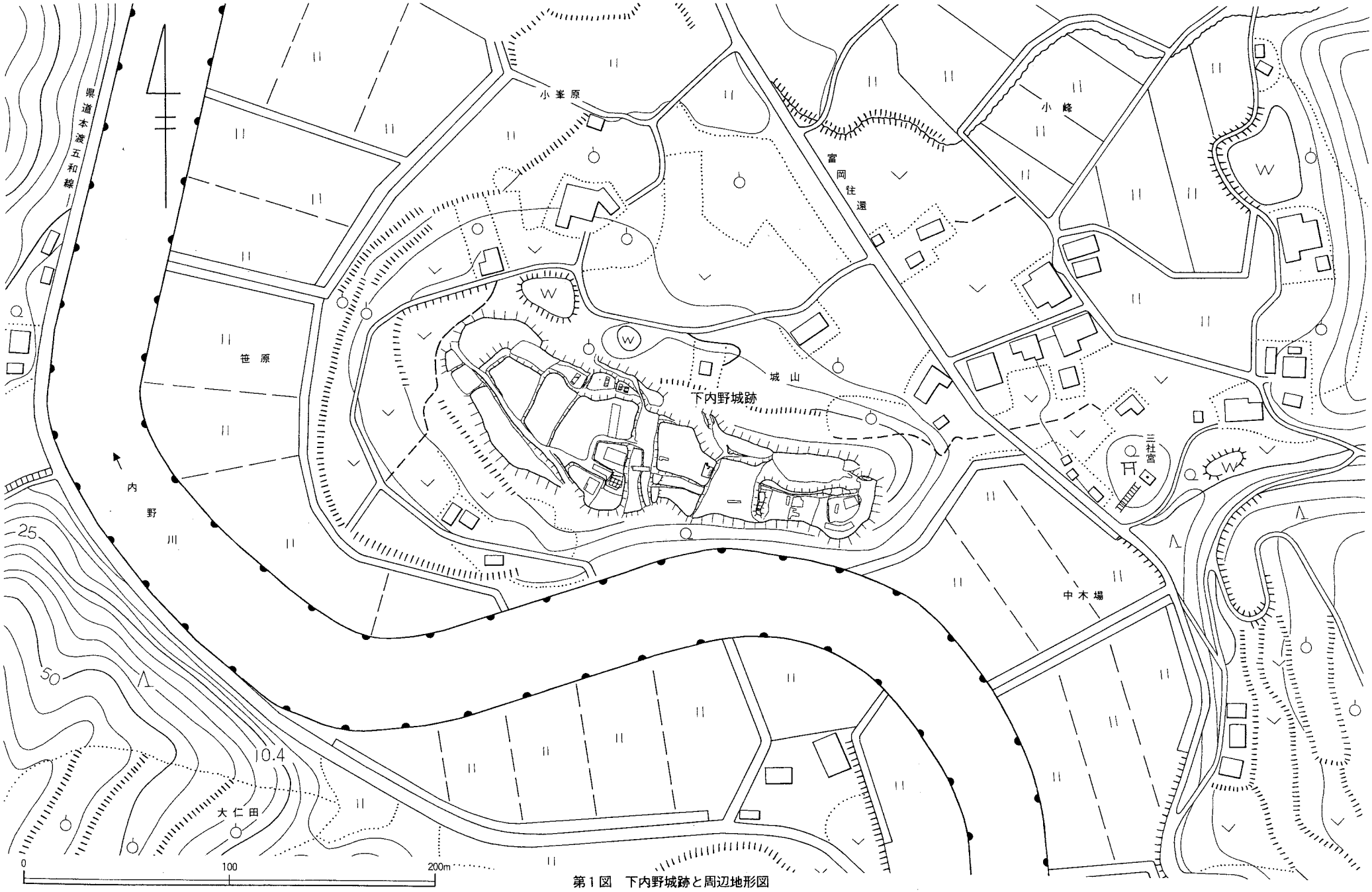
第３節　城跡について（下内野城についての概説）

〔1〕　中世文書には、城名や城の関連記事を見ない。江戸時代になって慶安四年(1651)の幕府への差出(62頁 考察２ 参照)『肥後国 江戸江差上候御帳扣』に「下内野古城　山城曲輪三百六十間」とあるのが、唯一の文献記録である。本文中の城名はこれによる。

〔2〕　今日、城跡は「城山(じょうやま)」と称されており、地元の小峰地区でも「昔の城跡」としての強い認識がある。

〔3〕　差出に山城とあるが、実際のところ、丘城そのものである。城は内野川の湾曲部分にせり出した小丘陵に築かれている。丘陵と内野川流域の低地との比高差は30m足らずである。一部が杉山で、他は畑地(以前は主にミカン畑)に利用されている。

〔4〕　後述するが、小峰・小峯原の両地区と城跡は内野川と丘陵によって、完全に囲い込まれ



第１図　下内野城跡と周辺地形図

た一つの独立区域であることがわかる。そういう意味では、典型的な総構えの城である。

〔5〕 地元で城跡の遺構としての認識があるのは、丘陵を真横に断ち切る堀切と、カギ型に残る土塁である。城跡内からかつて話題となるような遺物は出土していないという。

〔6〕 県内で存在を伺い知ることのできる中世城の数はおよそ600城である。

この数は一つの目安である。熊本県では昭和50年度から52年度にかけて、中世城の悉皆調査を実施した。この調査は全国に先駆てのものであり、試行錯誤の中、多くの困難を伴い、地元関係者の協力を得て、現地調査や文献調査が行われた。結果として、把握された城の数は446城であった。しかし、その後、補充調査が行なわれたところもあり、人吉・球磨地区に見るように36城から78城に倍増したところもあった。したがって、今日では、県内の中世城の数は600城ぐらいではないかと考えられている。

〔7〕 中世城の在り方はおよそ6通りに分かれる。

①中世文書に城名や関連記事の記載(城主名・合戦の記録など)があり、所在地も把握できる。資料的に最も信頼できるケースである。

②中世文書に城名の記載を見るものの、所在地の確認ができない。

③江戸時代の文献(最も古いのは慶安四年の差出、以下、古城考、肥後国誌)に記録(城主名、合戦の記録、城名のみの場合もある)が残り、所在地も把握できる。

④江戸時代の文献に記録があるものの、所在地が確認できない。

⑤それ以前の文献に記録はないが、明治以降の町村誌に城跡として紹介されている。

⑥一切の文献に記録は残っていないが、地名(城山・城などの城跡関連地名)や伝承が残っている。

下内野城は③に該当する。前述の〔1〕に見るように城名と城の規模のみの記載である。

第Ⅱ章　遺跡の概要

第1節　五和町について

〔1〕 天草・下島の北東部に位置しており、北から東方面にかけて有明海に臨む。行政域では、西は苓北(れいほく)町、南東は本渡(ほんど)市に接しており、北は海(早崎海峡)を隔てて長崎県の島原(しまばら)半島に相対する。面積50.04㎢、人口11,924人、世帯数3,557戸(平成7年1月現在)。町域の中央に広がる丘陵の西側には内野川が北流し、二江(ふたえ)港に注いでいる。江戸時代には東部に広がる御領(ごりょう)の港を背景として石本家(御領)に代表されるように、銀主の商業活動が非常に活発であった。

〔2〕 明治の初期には一時、長崎県に属し、その後、八代県(明治6年)、白川県(明治6年)を経て、熊本県の管轄となった。明治22年(1889)の町村制施行により、井手(いで)村と下内野(しもうちの)村が合併して手野(ての)村に、城木場(じょうきば)・荒河内(あらかわち)・上野原(かみのはら)の3村が合併して城河原(じょうがわら)村となり、既存の御領村、鬼(おに)

池村、二江村とともに5村となった。二江村は昭和16年(1941)に町制を施行した。昭和30年(1955)5月1日に1町4村が合併して五和町となった。「和を以って貴しとなす」 が新町建設の理念であった。

《五和町の旧村の様子》

御領

〔 位 置 〕天草下島北東部。
〔関東下文案〕当地は下文案に見える佐伊津沢張と鬼池の中間に位置するところから、中世志岐氏の支配下にあったと思われる。
〔慶長国絵図〕村名あり。
〔正保郷帳〕高1331石6斗余
〔國誌草稿〕859石　竈数230　男女数1577人　「小串ト云小村アリ、船着漁師居ス、塩浜アリ」
〔天草郡村々手鑑〕田72町1畝余　畑50町8反7畝余　牛馬477
〔明治22年〕町村制施行。戸数1172　人口5634人
〔 備 考 〕御領組に属し、庄屋長岡家は御領組の大庄屋を兼帯。
(地名の由来) 建島松命が天草国造に任じられて、大島に上陸したとの伝えによる。
(里謡)「島で徳者は大島様よ、御領じゃ石本勝之丞様」
(文政の頃) 高904石7斗余　家数711　人数5139人　(氏神) 十五社大明神宮

鬼池

〔 位 置 〕天草下島北端部。(対岸の島原半島とは一里余の近距離)
〔関東下文案〕「鬼池」とある。
〔慶長国絵図〕村名あり。
〔正保郷帳〕高611石余
〔國誌草稿〕456石　竈数112　男女数611人　「干潟アリ、潮時ニハ船渡」「此村ノ内鬼ノ池ト云池アり」
〔天草郡村々手鑑〕田38町2反2畝余　畑16町7反3畝余　牛馬198
〔明治22年〕町村制施行。戸数730　人口3549人
〔 備 考 〕御領組に属し、庄屋は池崎家。
(文政の頃) 高465石5斗余　家数306　人数2654　(氏神) 十五社大明神宮　阿蘇大明神宮

二江

〔 位 置 〕天草下島北部。
〔慶長国絵図〕「内野」とある (二江・下内野・井手・上野原・荒河内・城木場の総称)。
〔正保郷帳〕高381石5斗余。
〔國誌草稿〕146石1斗6升　男女数653人　「当村ハ船ツキ漁師居小川船渡モアリ」
〔天草郡村々手鑑〕田10町3反　畑26町3反8畝余　牛馬68
〔明治22年〕町村制施行。戸数861　人口3982
〔 備 考 〕『日本王国記』に「志岐から1レグワのところに、二江というとてもかわいい碇泊地、もしくは小港がある」と記されている。
井手組に属し、庄屋は長島家、のち池田家。
(文政の頃) 高196石2斗余　家数289　人数3346　(氏神) 十五社大明神宮

下内野

〔 位 置 〕二江の南。(内野川へ山浦川が合流する地点)
〔慶長国絵図〕「内野」とある (二江・下内野・井手・上野原・荒河内・城木場の総称)。
〔正保郷帳〕高430石9斗余
〔國誌草稿〕248石9斗8升　竈数40　男女数311人　真宗円教寺の寺名あり。

〔天草郡村々手鑑〕田20町5反3畝余　畑5町8反6畝余　牛馬37
〔明治22年〕町村制施行。手野村(下内野、井手)
〔　備　考　〕井手組に属し、庄屋は高橋家。
(文政の頃) 高254石3斗余　家数110　人数551
(氏神) 十五社大明神宮　松尾大明神社　権現社

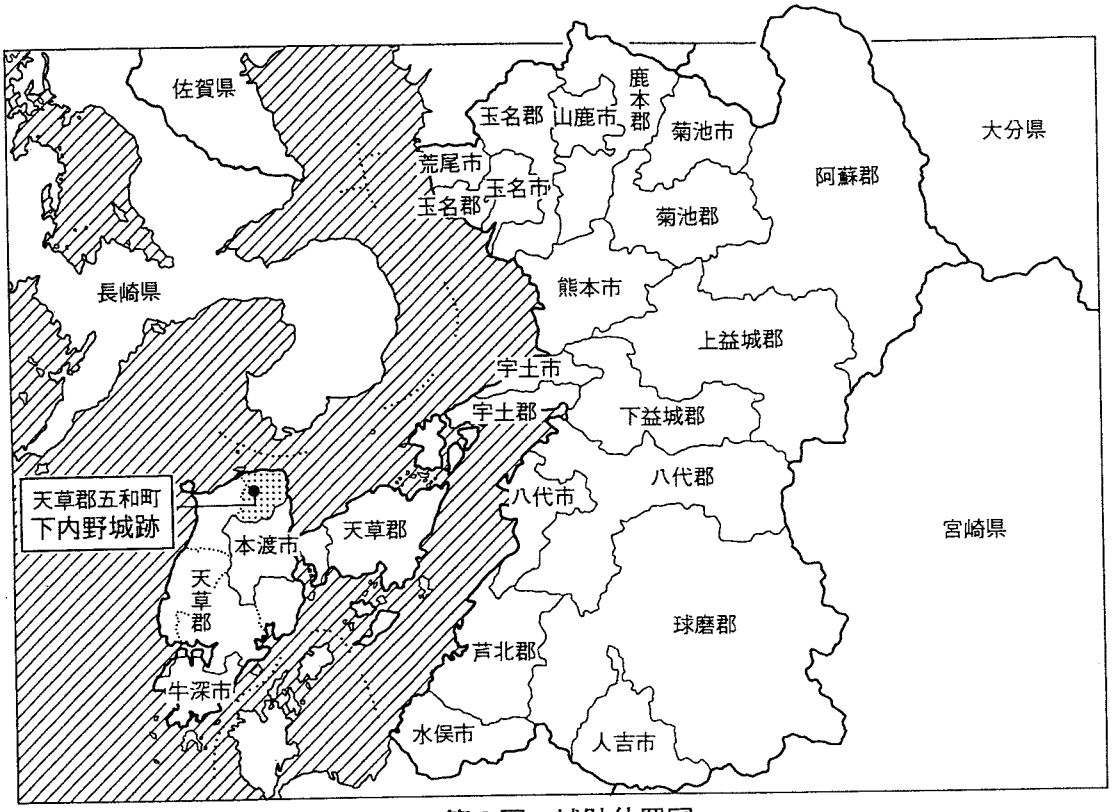
井手(いで)
〔　位　置　〕下内野の南。(交通の要所、志岐道あり)
〔慶長国絵図〕「内野」とある (二江・下内野・井手・上野原・荒河内・城木場の総称)。
〔正保郷帳〕高749石9斗余
〔國誌草稿〕352石7斗8升　竈数73　男女数503人
〔天草郡村々手鑑〕田33町9反4畝余　畑10町4反8畝余　牛馬90
〔明治22年〕町村制施行。手野村(下内野、井手)
〔　備　考　〕井手組に属し、庄屋長島家は井手組大庄屋を兼帯。
(文政の頃) 高254石3斗余　家数110　人数551
(氏神) 十五社大明神宮　松尾大明神社　権現社

上野原(かみのはら)
〔　位　置　〕井手の南。(内野川と打越川に囲まれている)
〔慶長国絵図〕「内野」とある (二江・下内野・井手・上野原・荒河内・城木場の総称)。
〔正保郷帳〕高381石4斗余
〔國誌草稿〕197石9斗8升　竈数37　男女数299人
〔天草郡村々手鑑〕田14町4反9畝余　畑6町7反8畝余　牛馬42
〔明治22年〕町村制施行。城河原村(上野原、荒河内、城木場)
〔　備　考　〕井手組に属し、庄屋は鶴田家。
(文政の頃) 高199石3斗余　家数89　人数359　(氏神) 十五社大明神宮　八幡宮　淀姫宮

荒河内(あらかわち)
〔　位　置　〕上野原の南。(荒川が内野川に合流する流域)
〔慶長国絵図〕「内野」とある (二江・下内野・井手・上野原・荒河内・城木場の総称)。
〔正保郷帳〕「荒川内村」とある。高321石5斗余
〔國誌草稿〕155石　竈数25　男女数243人
〔天草郡村々手鑑〕田18町8反5畝余　畑4町7反3畝余　牛馬40
〔明治22年〕町村制施行。城河原村(上野原、荒河内、城木場)
〔　備　考　〕井手組に属し、庄屋は本多家。
(文政の頃) 高160石8斗余　家数91　人数536　(氏神) 十五社大明神宮　権現社

城木場(じょうきば)
〔　位　置　〕荒河内の南。(内野川の上流域の村)
〔慶長国絵図〕「内野」とある (二江・下内野・井手・上野原・荒河内・城木場の総称)。
〔正保郷帳〕村名あり。高330石余
〔國誌草稿〕176石　竈数37　男女数282人
〔天草郡村々手鑑〕田19町2畝余　畑3町9反　牛馬91
〔明治22年〕町村制施行。城河原村(上野原、荒河内、城木場)
〔　備　考　〕井手組に属し、庄屋は金子家。
(文政の頃) 高184石5斗余　家数144　人数742　(氏神) 十五社大明神宮

(注) 関東下文案：志岐文書　建暦2年(1212) 8月22日付
天草郡村々手鑑：慶応4年



第２図　城跡位置図

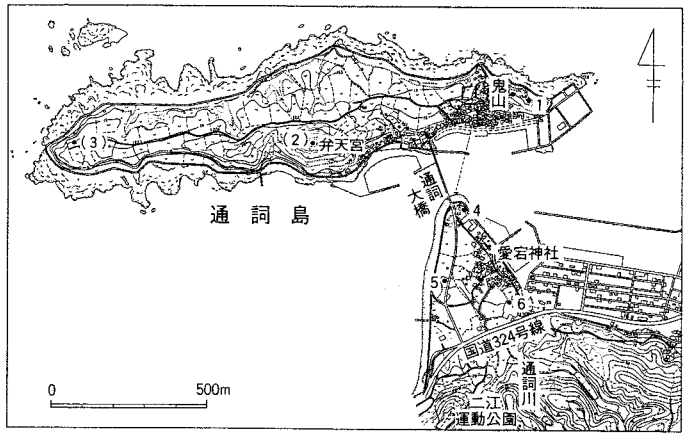
第２節　五和町の上代遺跡について

地図番号	概　　要
1	鬼山(おんのやま)古墳。通詞島の東端にある。鬼山の北西側と南東側に並ぶ。
(2)	古墳(?)。弁天宮神社の裏山が古墳ではないかとする説がある一方、のろし跡とする説もある。
(3)	古墳。通詞島の西端の一部を古墳とする説がある。
4	著名な沖の原貝塚。今日、老人ホームをはじめ、家屋が建ち並ぶ。発掘調査が行なわれ、出土遺物は通詞島の資料館で展示。
5	製塩土器出土。熊本県文化財調査報告『製産遺跡』に収載。
6	古墳(?)。敷石のようなものが散在していた事による。故坂本経堯先生の示唆によると伝える。(『天草の古代』昭和46年　坂本経堯・坂本経昌 著)
7	石器散布地。
8	散布地。内野川の河口、右岸域の町中にある。
9	散布地。中ノ尾・池ノ尾・松崎にまたがる。
10	一尾(ふとう)貝塚。国道324号沿いの民家の庭先に貝層が露呈。
11	須恵器散布地。
12	鼓田(つづみだ)貝塚。今は畑地で押しならされている。

(地図番号は９～10頁 第３図・第４図に記されている番号)

第２表　上代遺跡一覧表

第３図　五和町地形図



第４図　通詞島周辺地形図

中世城跡

城跡参考地

上代遺跡

第３節　五和町に所在する中世城跡について

城　名	定　　義	種　類	立　地　条　件	備　　考
下内野城	・慶安四年　「差出」 ・中心部に「城山」の字名	丘　城	・内野川の中流域。 ・右岸の丘陵。	・麓集落の小峰と小峯原の両地区は地形的に独立区域である。
三 川 城	・文献未記載 ・地元での俗称 ・中心部に「城山」の小名	丘　城 (山城的な色彩が濃い)	・内野川の上流域。 ・右岸の丘陵。 ・打越川との合流点内にある。左岸では平川が合流する。 ・俗称はここからきている。	・町所在の城跡では最大規模である。 ・連郭式の丘城。
城木場城	・慶安四年　「差出」 ・円覚寺(本渡市)の由緒書 ・中心部に「城の尾」の小名	丘　城 (山城的な色彩がある)	・内野川の最上流域。 ・左岸の丘陵	・丘陵の上面域では、３つの郭を有するものの、城としての地割りが、今ひとつ不確かである。 ・西側の鞍部に堀切。
御 領 城	・文献未記載 ・城名は地名による ・中心部に「城内」の小名	丘　城 (平城的な色彩が濃い)	・海岸沿い。 ・現在の御領港に隣接する。 ・馬場川の下流域。 ・右岸の丘陵。	・舌状形をした城跡地に芳証寺がある。 ・城跡関連地名や伝承がよく残っている。
鬼 池 城	・文献未記載 ・中心部に「城」の字名	丘　城 (平城的な色彩が濃い)	・海岸線に接する。東に鬼池港。 ・西に宮津漁港。	・城としての地割りが、今ひとつ不確かである。
小　浦 (参考地)	・小浦荘の推定地	――	・標高25ｍの丘陵地。 ・北東に大島漁港。	・館跡の存在には一考の余地がある。
梅　城 (参考地)	・字名に「梅城」とある	――	・西へ約１㎞に下内野城。	・「梅城」地内の丘陵は城跡地らしい遺構は残っていない。

第３表　中世城跡一覧表

第４節　内野川の川道と沿岸道路

〔1〕　内野川は、町内で最大の河川である。五和町の西域寄りを流れ、丘陵地帯を南北に貫いて二江港へ注いでいる。本渡市側の分水嶺・山中に水源を持ち、五和町では城木場地区を最上流域とする。

〔2〕　城河原より川幅を増し、流域面積も増大する。これより川道は寺中まで2.5㎞ほど、ほぼ直流するが、志賀神社付近で蛇行が始まり、中井手や小峰で西と東へ大きく振れる。この間の距離は3.6㎞(地図上の直線距離)で、内野川の中流域となる。

(川道については、昭和47年８月作成の五和町地形図を参考にした。したがって、ここでいう川道は圃場整備以前のものである。ちなみに内野川は近年の圃場整備によって川道が部分的に付け替えられたところがある。)

〔3〕　川道は、小峰橋と町立五和西中学校付近で再び直線的な流れをとりもどし、田向橋まで

3㎞の下りとなる。内野川の下流域である。

〔4〕 これより内野川の最下流域となり3回の蛇行を繰り返して河口の二江港へ注いでいる。この間の距離は2㎞(地図上の直線距離)である。

〔5〕 内野川の西岸を県道本渡五和線（富岡往還ともいう）が走行しているが、これは明治時代になって造られた新道である。それ以前からの道は東岸を走っており、実際の所、こちらが真の「富岡往還(とみおかおうかん)」である。下内野城の東側鞍部を横切る道はこの往還に外ならない。

第5節　内野川と城跡

〔1〕 前節で触れた内野川の中流域での大蛇行箇所に下内野城跡がある。小峰の三社宮から西へ100ｍのところから川道は弧を描くように大きく西へ蛇行しているが、その湾曲内にすっぽり納まる形で城跡地がある。

〔2〕 川道の蛇行は、三社宮付近から町立五和西中学校までで、その間の直線的な南北の長さは500ｍ、東から西への突き出しは川の右岸まで280ｍ幅にもなる。この湾曲内の南側寄りに小丘陵が横たわる。

〔3〕 小丘陵は内野川の右岸域を形成する丘陵の西縁部分の一つである。地図上で見る俯瞰的な形状は楕円形をしており、東西の長さ270ｍ、南北幅は東寄りで最大80ｍ、西寄りで60ｍである。比高差は30ｍで、南側裾部の東側区域は内野川の右岸に接する。

〔4〕 川道は川床の堆積状況によって時代とともに変化していくが、内野川の場合、丘陵間の低地を貫く性質のものであるため、平野部のそれと違い、変動は少ないとみる。中世においても、小峰における川道の蛇行は、基本的に今日と大差ないと見てよい。

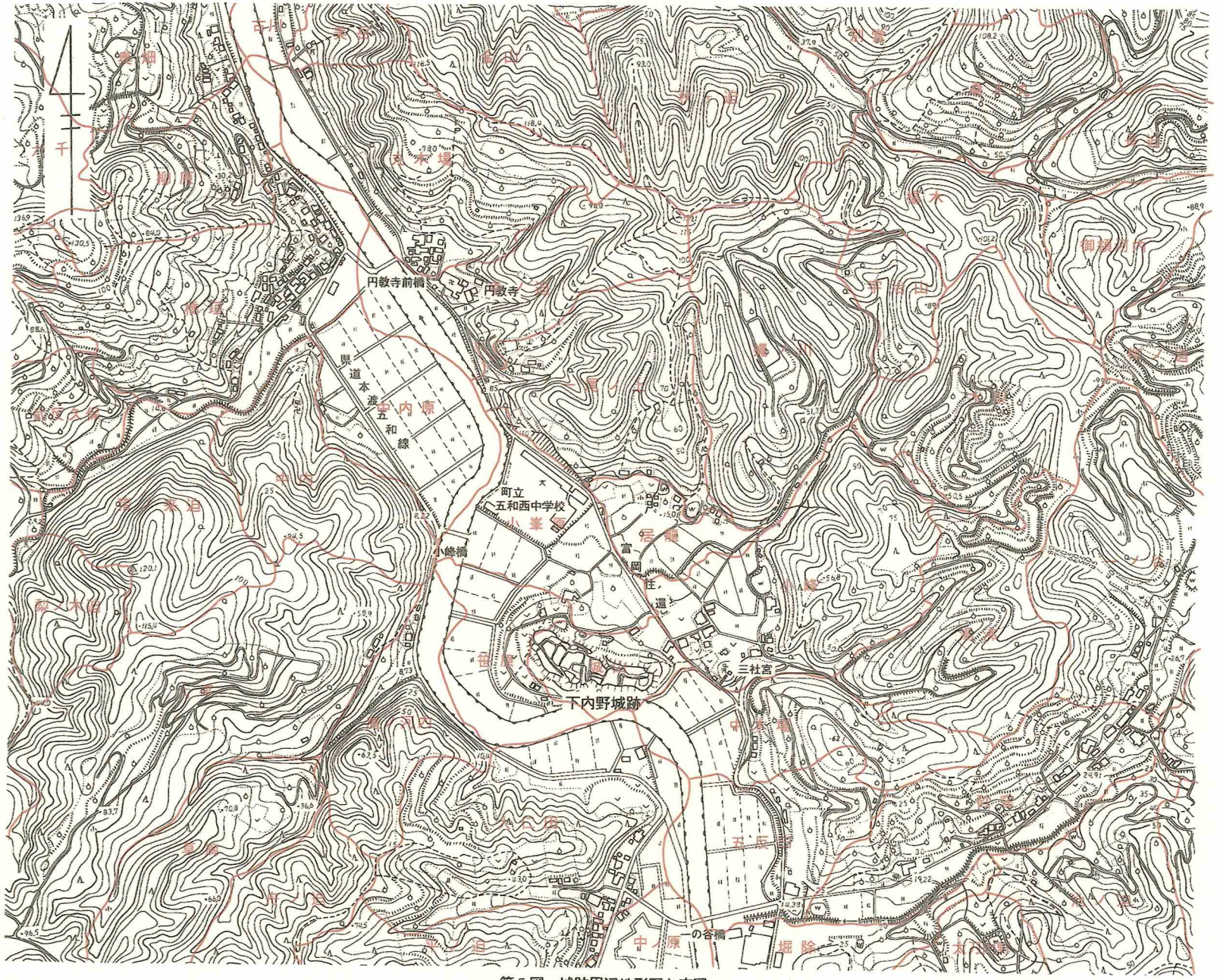
〔5〕 下内野城は内野川を水濠代わりにしていたものと思われる。前述のように、川に面する丘陵の南東側斜面は絶壁である。城跡の周辺域を巨視的に見れば、城自体と小峰地区と小峯原地区は内野川と丘陵の縁によって完全に囲繞される事になる。開口部の北は町立五和西中学校の北端部で、南は三社宮付近であるが、いずれも極端にすぼまっている。その間の南北間の直線距離は400ｍである。ちなみに東西幅は500ｍで、ここに完全な囲繞地形が存在している事を知る。

以上の点からも、下内野城は非常に地の利に恵まれた城である事がわかる。逆にそれだけの地形的な要因があったゆえに、城が築かれたものと思われる。

第6節　字図と下内野城跡

〔1〕 地元では、城跡地を城山(じょうやま)と呼んでいる事は、第Ⅰ章第3節で取り上げた。

〔2〕 第5図の字図のなかに城山の字名を見る。城山や周辺の字名をまとめると第4表の通りとなる。



第５図　城跡周辺地形図と字図

0　500m

字　名	呼び名	字　界　と　現　況
城　山	じょうやま	〔北〕丘陵の裾部を走る小道。内側に２箇所の溜池を取り込む。 〔東〕富岡往還。内側に２軒の民家を取り込む。 〔南〕内野川と丘陵直下の小道。一軒の民家を取り込む。 〔西〕丘陵直下の小道。
小峯原	こみねばら	城山の北側にあたる。下内野城の城域に含まれる。 北東側の丘陵裾部に小集落がある。その内、一軒の家が「屋敷」と称されている。 水田地帯で、北側域は町立五和西中学校。 〔北西から南東〕　富岡往還。 〔南西〕小道。 〔北西〕内野川。
居　龍	いりゅう	城山の北東側にあたる。小峯原の東側。 水田地帯で、北東域に小集落。 〔北〕標高70mクラスの丘陵裾部を走る小道。 〔北東から南西〕小道。 〔南東から北西〕富岡往還。
小　峰	こみね	城山の東側にあたる。下内野城の城域に含まれる。 中世の城下町に該当する。 〔東〕山頂が標高75mの丘陵地。 西側よりに三社宮を含む小集落を取り込む。 〔西〕富岡往還。 広い意味では、この丘陵の西端域に城山がある。
中木場	なかこば	城山の南東側にあたる。 富岡往還を境に標高60mクラスの丘陵地。 西に内野川右岸の水田地帯。
大仁田	おおにた	城山の南側にあたる。 標高50mクラスの丘陵。北側裾部の小集落を取り込む。
笹　原	ささはら	城山の西側にあたる。 蛇行する内野川右岸の水田地帯。 〔北〕小道。

第４表　下内野城跡周辺字名一覧

第７節　下内野城跡の地形と現状

〔1〕　地形的に一つのまとまりを持った独立丘陵である。東西の長さ270m、南北の幅は東寄りで80m、西寄りで60mの大きさである。俯瞰的な形状は楕円形をしており、長軸の向きは東西方向にある。ここも、内野川の右岸を形成する丘陵地帯の一部である。

〔2〕　東側の鞍部箇所を道が横切っている。内野川の右岸を丘陵沿いに走る「富岡往還」である。ちなみに、鞍部はやや広くあいているため、道路自体が、即、堀切の転用とは受け取れない。

〔3〕　丘頂ラインの長軸の長さは217mで、同ラインの東側から西側へ120mのところに、はっきりとした堀切が残っている。地形も土地利用もこの堀切が一つの境となる。

〔4〕　丘頂ラインは東側から堀切にかけて小山・窪地・高台の３区画に分かれる。本文中では、これらを城跡の地割りから見て、Ⅰ郭・窪地・Ⅱ郭とした。これらは杉山と栗山である。一方、堀切から西側は切り開かれて畑地となっている。丘頂ラインに沿って４区画に分かれているが、地形的に西側への緩傾斜地であるため、各区画の境には大きな段差がつく。地形的に東側区域と大きく異なっている。従って、最上段の最も面積が広い東側を城跡関連の地割りと見なして

Ⅲ郭とした。一方、傾斜地を削平した残りの区画については、地割り参考地として一括Ⅳ郭にまとめた。

〔5〕 丘陵の斜面部は下記のとおりである。

①南側　Ⅰ～Ⅲ郭間は絶壁で、垂直に近い崖面が内野川の川原へ下る。斜面部に階段状地形は一つもない。Ⅳ郭間も傾斜は急であるが、段々畑が4～5段重なっている。この内、最上段部は、Ⅳ郭に沿う形で帯状形に延びている。南縁の崖面も切り立っており、2段目以下とは明らかに地形が異なる。この区間では、最上段部のみを城跡の地割りと考えてａ郭とする。

②西側　Ⅳ郭の南側と同様にここも4～5段の段々畑がある(Ⅳ郭より規模は小さい)。

③北側　堀切を境に西と東に分かれている。西側は帯状形の段々畑が一枚あり、その下部は岩肌の露呈する崖となっている。この畑は明らかに城跡の地割りである。この畑をｂ郭とした。

④東側　Ⅰ郭と窪地の直下に削平地がある。今は荒れ地となっているが、二段に分かれ、西側の方が一段高い。地形的に堀切から東側の斜面部は、やや緩傾斜地であるため、削平地の縁はａ・ｂ郭のような崖線を形成しない。参考までに、ここも城跡の地割りと見なしてｃ郭とした。

第8節　地籍図と下内野城跡

〔1〕 第7節で城跡地の上面域を6区画に分け、さらに南北の斜面部の削平地についても同様に3区画に細分した。

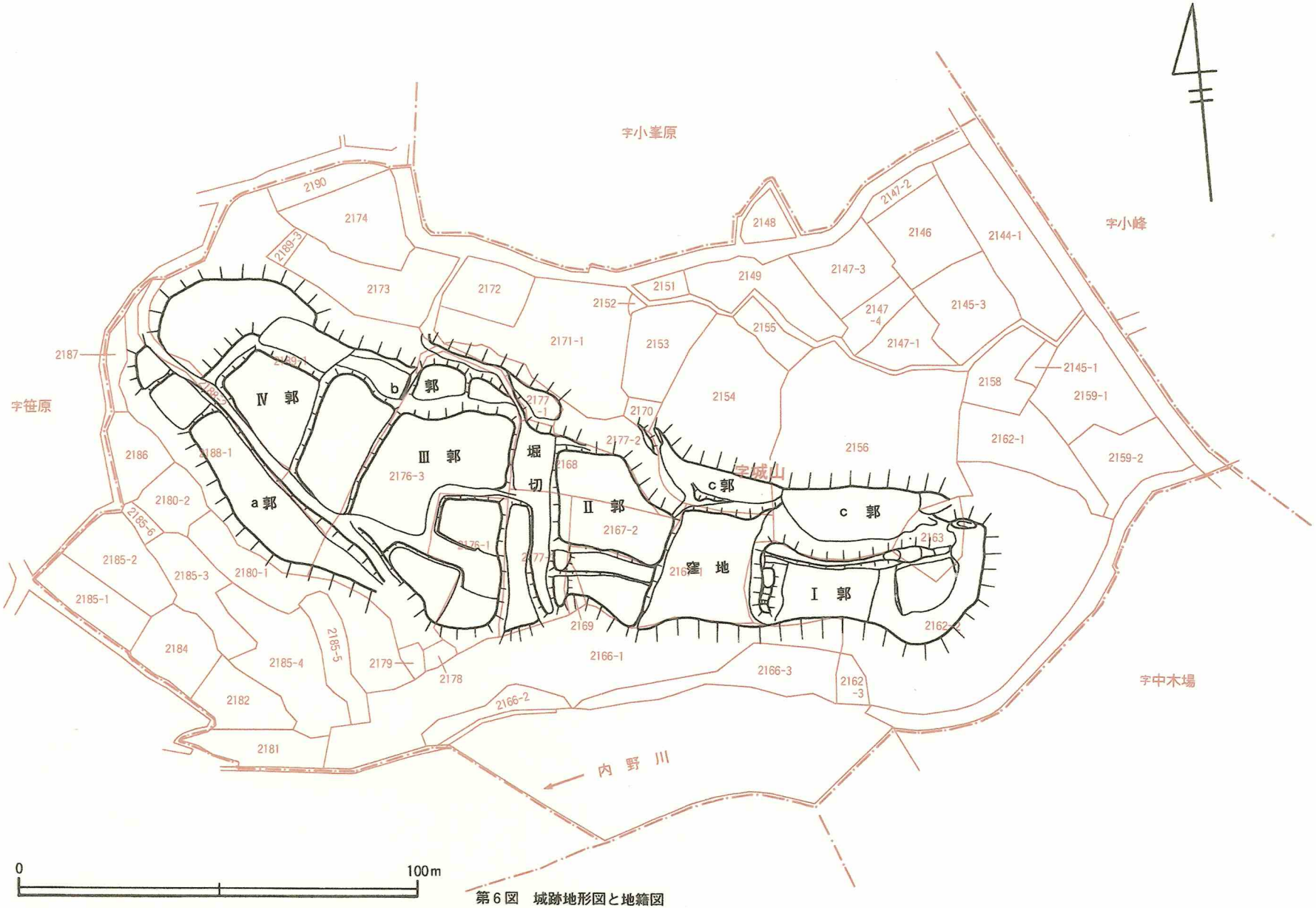
〔2〕 これは城跡地の地割りを説明するための手段である。上面域ではⅠ郭～Ⅳ郭および窪地・堀切、斜面部についてはａ郭～ｃ郭とした。さらに郭内で細分したところもある。

〔3〕 これらの地割りと地籍図(字城山)の地番を重ね合わせたものが第5表である。

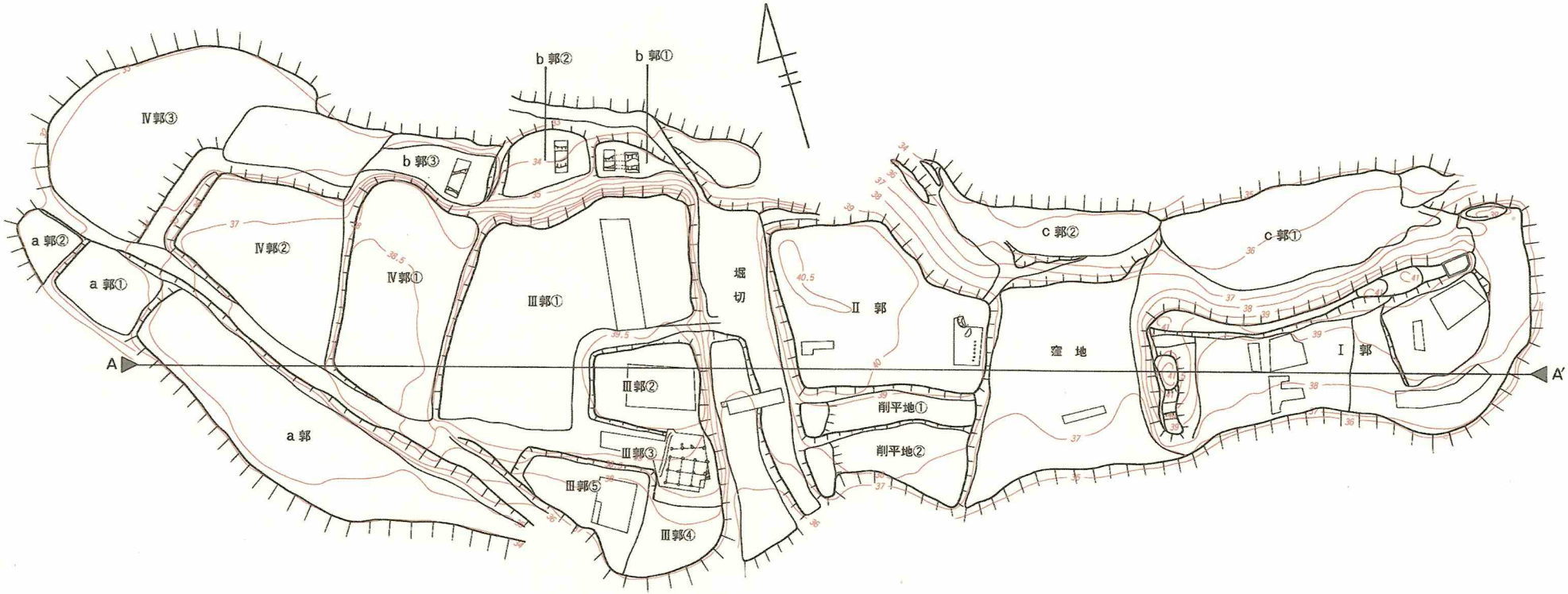
〔4〕 筆ごとの地番が普通である。ちなみに、近年の地籍調査の際、同一の地権者の場合は合筆して一つの地番としたケースが多かった。したがって、この城山の場合も地割りと地番の区割りが必ずしも一致しない。

区　画		地　番	備　　考
Ⅰ　郭		2162－2	地番表示の西側張り出し部分。
窪　地		2167－1	地番表示の東側部分。
Ⅱ　郭		2167－1	地番表示の西側部分。
		2167－2	
		2168	地番表示の東側部分。
堀　切		2168	地番表示の西側部分。
		2177－3	
Ⅲ　郭		2176－1	Ⅲ郭内の南東における微高地とその南側。傾斜地。
		2176－3	
Ⅳ　郭		2189－1	実際は3筆(Ⅳ郭①～Ⅳ郭③)に分かれている。
斜面部	ａ郭	2188－1	西端部は2筆(ａ郭①・ａ郭②)に分かれている。
	ｂ郭	2176－3	地番表示の北端部。ｂ郭①とｂ郭②
		2189－1	地番表示の東側北端部。ｂ郭③
	ｃ郭	2154	地番表示の南端部。ｃ郭②
		2156	地番表示の南端部。ｃ郭①
農　道		2188－2	

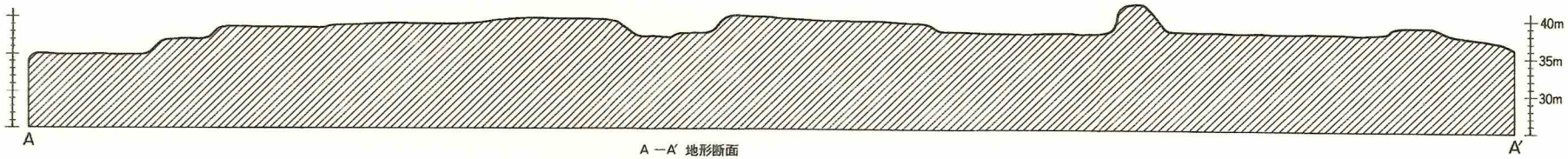
第5表　下内野城跡地番表



第6図　城跡地形図と地籍図



第７図　下内野城跡地形測量図



A ―A′ 地形断面

第Ⅲ章　調査の成果

第1節　Ⅰ　郭

東西の長さ56m、南北幅は東側で最大25m、中央部分は西側寄りで括れて最小14.6m、西側は22.4mを測る。

1区画　金比羅神社の境内部分である。平地で東西の長さ15.4m、南北幅は西側寄りで最大12.4m、東側はすぼまっている。終戦後の一時期まで、ここで奉納相撲が行われた。西側部分は5.6m幅の傾斜地となっている。

2区画　全体的に窪地で(1区画とは東側で1.2mの比高差)、北側から南側への緩傾斜地でもある(両端部の比高差は1.2m)。東西の長さは17.4m、南北幅は西側寄りで最大11m、中央部分でやや括れる。

3区画　1区画と2区画を東側から南側へ取り囲む平地である。幅は東側で最大5.6m、東南隅で6m、西側で最大3.6m。南縁の下は絶壁である。

土塁①　1区画と2区画の北縁部にあり、土壁の様な形状を呈する土塁である。長さ37.7m、高さはaで1.5m、bで1.66m。上場幅はbで狭く0.9m、aで最大3.7m、東端部に金比羅神社の石祠が祀られている。bの裾部は後世に削り込まれて、壁面は直に近い状態となっている。なお、c郭に面する北側裾部はミカン畑の開墾時に重機によって削り取られている。

土塁②　2区画の西縁部にある小山のような土塁で、うず高く積まれている。長さ12.4mで、中央部が最も高く、3.2mにも及ぶ。土塁は中央部を境に北側と南側へ下っている。

＊中央部・・・・上面は平地に近い状況にある。長方形状を呈し、南北の長さ5m、東西の幅は最大で3mを測る。

＊南　側・・・・中央部より1.17m下に平地状の段がある。方形状を呈し、南北の長さは1.5m、東西の幅は1.8m。

＊北　側・・・・中央部より1.28m下で一旦切れている。この箇所は溝状を呈し、東西の長さは6m、下場の南北幅は最大1.8m。対岸にあたる土塁の北端部とは0.86mの比高差がある。土塁間の溝状箇所は明らかにⅠ郭への出入口である。

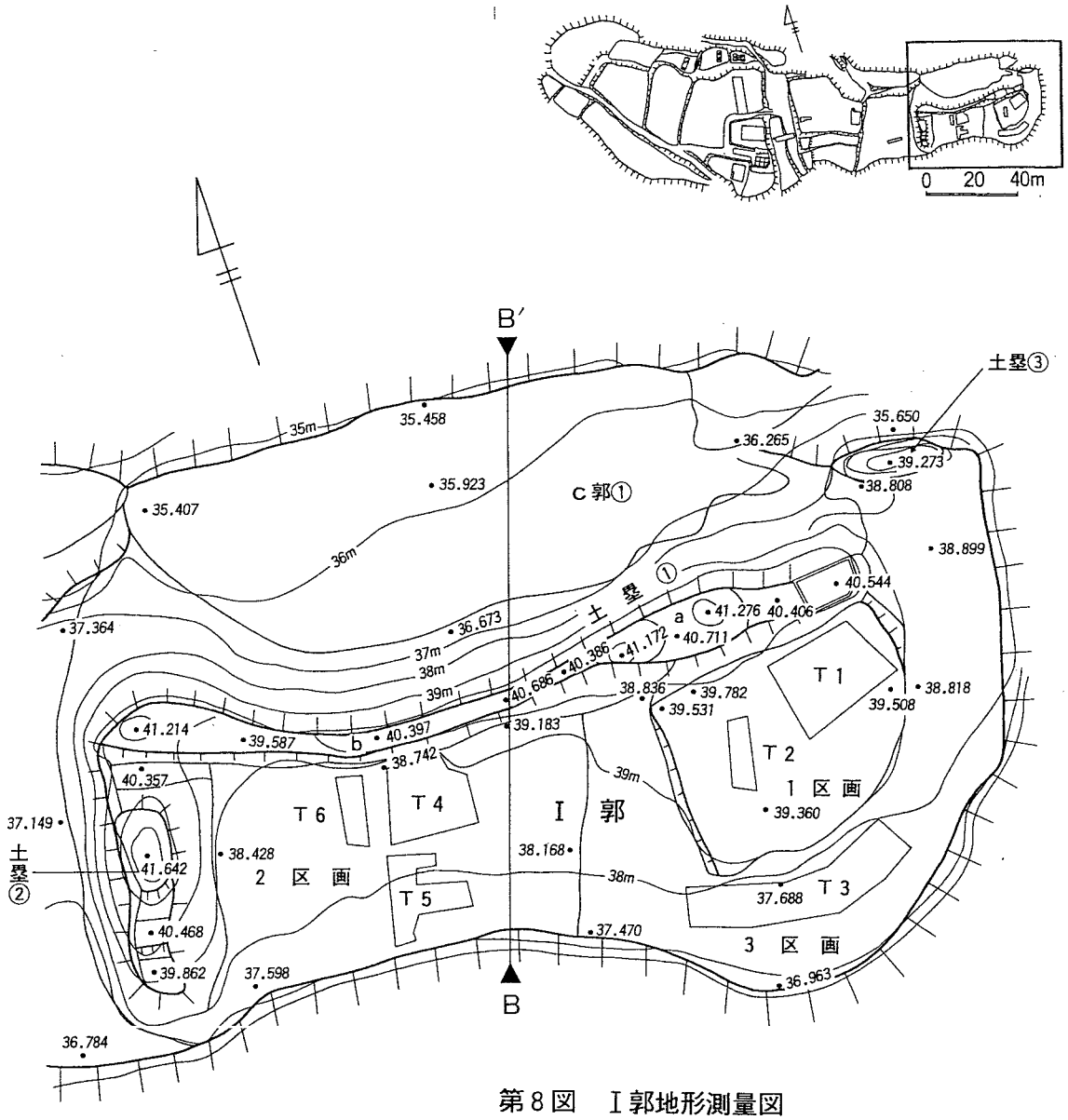
土塁③　3区画の北東に積まれた土塁である。高さ0.47m、東西の長さ6.6m、上場の南北幅は1.4m。土塁箇所は小峰地区からの進入口にあたる。その位置は、土塁①の東端部から北へ4.4mずれており、これらの事から桝型の祖形をなす土塁とも考えられる。

〔トレンチ調査結果〕

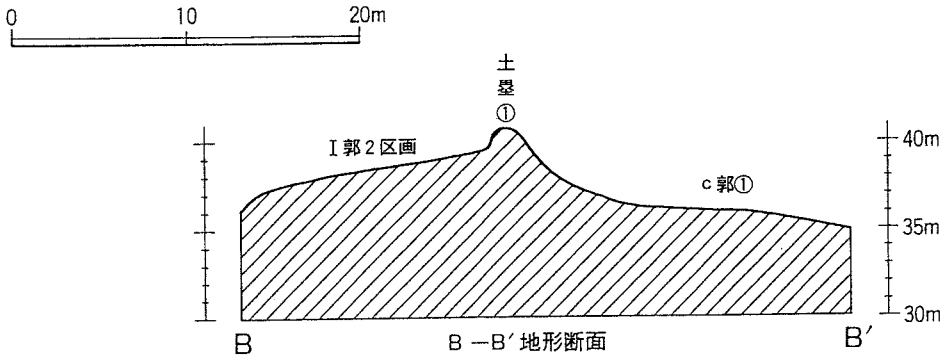
6ケ所にトレンチ(T)を設定した。その中でT3から遺構が検出されている。T3は3区画内のトレンチで、西側寄りから直線上に並ぶ山石が検出された。はっきりとしたまとまりを持っており5個が同一レベルで、長さ1.9mの範囲に並んでいた。

上面はいずれも扁平な状態にあり、このような石を意図的に選んだものと思われる。石は地面にしっかりと食い込んでいた。明らかに人為的に並べたもので、通路の敷き石のような感じであった。

この他に、長さ５ｍの範囲から持ち込みによると考えられる８個の小石が、地山から検出さ



第８図　Ⅰ郭地形測量図



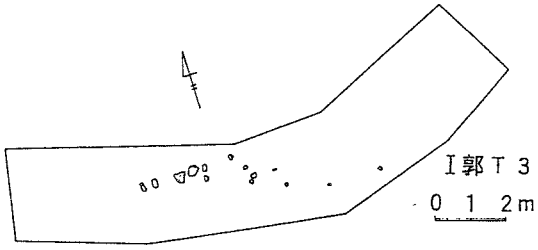
れている。今は散在の状況にあるが、これらも前述の遺構に関連するものであろう。

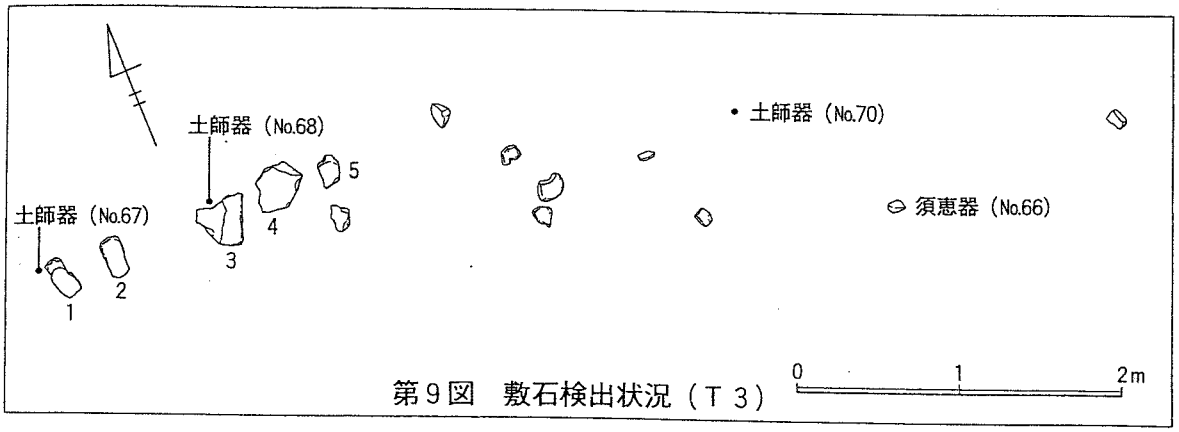
遺構検出面から糸切りの土師器片が出土している。

3区画が1・2区画の南縁を巡る帯状の地形である事を考え合わせれば、やはり通路に関連した遺構との見方ができよう。

割り石No.	平面形状	大きさ (cm)
1	長方形	10～12×25
2	長方形	12～18×24
3	三角形	31×35
4	方形	24×32
5	方形	12×16

第6表　敷石計測表





第9図　敷石検出状況（T3）

〔小結〕

全体的に窪地をなす2区画からは、何らの遺構も検出されなかった。出土遺物もごくわずかであった。金比羅神社の境内となっている1区画はともかくとして、2区画の状況は城の地割りを考える上で大きな疑問である。

窪地に加えて、北から南への傾斜地でもある。遺構は存在しなかった。しかし一方で北面に土塁を、南面に絶壁を荷負う城として最高の地割り箇所でもある。何らかの意味を持っているはずである。

考え様によって、極端すぎるが、落城寸前の大非常時に際し、Ⅰ郭の掻き上げ土塁を大幅に補強するために、2区画の土が大量に使用されたとの見方もできる。結果として窪地と傾斜地の出現であるが、一考の余地はあろう。今のところ、これ以外の推論は考え付かない。

トレンチNo.	設定箇所	遺構の有無	備考
T1	1区画	×	金比羅神社の境内として整地されている。
T2	1区画内の西側	×	同上
T3	3区画	○	敷石状の割り石を検出。
T4	2区画内の中央北側	×	表土(薄層)の下は地山。地山は傾斜する。
T5	2区画内の中央南側	×	同上
T6	2区画内の西側寄り	×	同上

第7表　Ⅰ郭トレンチ観察表

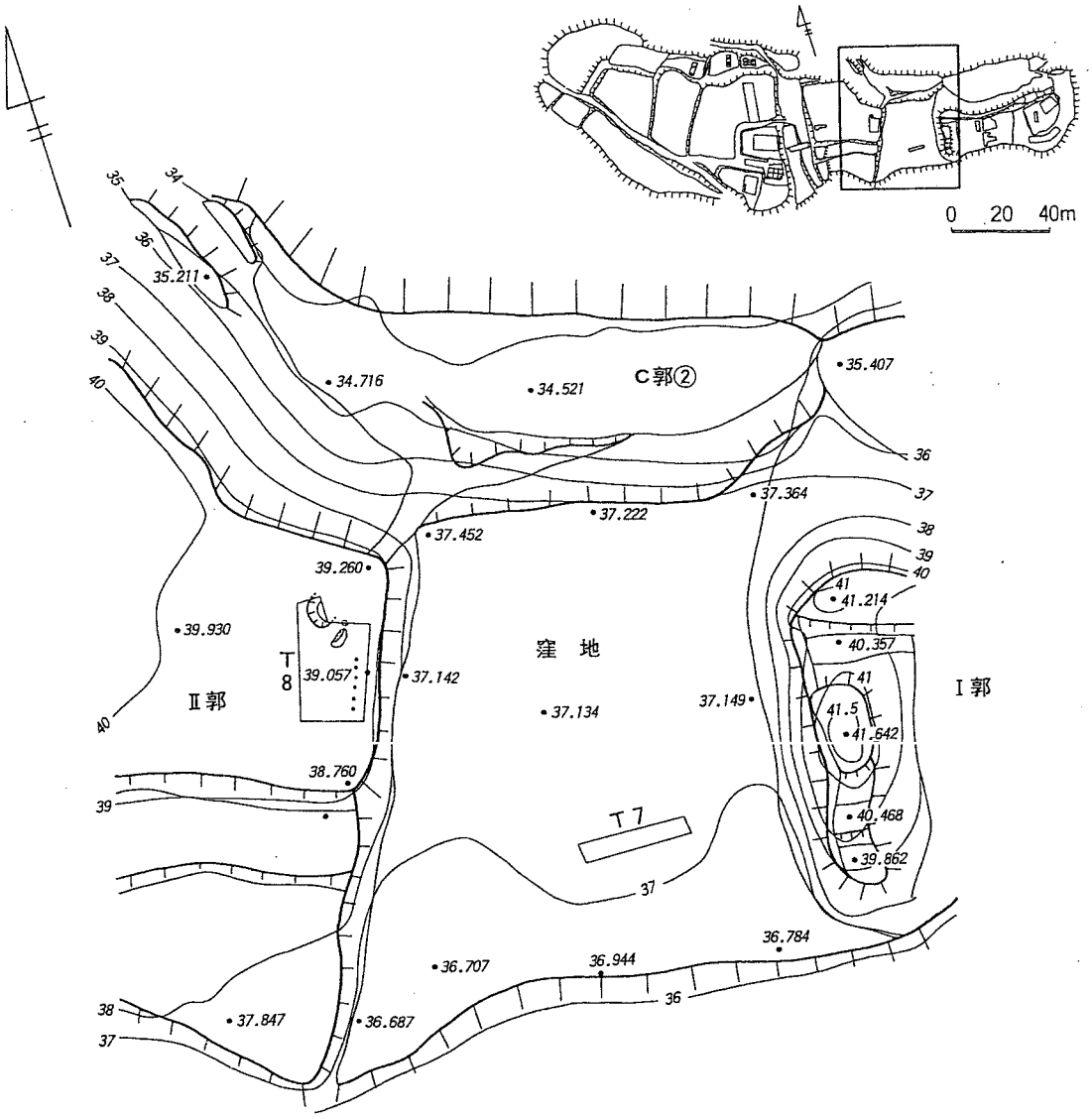
第2節　窪　地

Ⅰ郭とⅡ郭の間の窪地で、地表面は平坦。東西の長さは北側で19m、南側で26m、南北幅は中央部で27.2m。Ⅰ郭との比高差(土塁②の最上面を起点とする)は、窪地の東縁で4.5m、Ⅱ郭とは(東縁の北側寄りを起点とする)1.9m。

Ⅰ郭とⅡ郭間の堀切に該当するが、全体的に掘り込みも浅く、さらには東西の幅がありすぎて疑問が残る。城跡内の特異な地形である。

〔トレンチ調査結果〕

窪地の南側寄りにトレンチ(T7)を入れた、さらに、その他、5ケ所で部分的に坪掘りを行なった。結果として、すべての箇所において、表土の下は地山で、何の遺構も検出されなかった。当初、この区画では堀切の埋没も考えられただけに全く予想外の調査結果であった。



第10図　窪地地形測量図

〔小 結〕

この事により、窪地の役割は次の２通りが考えられる。

①当初から城の地割りとして造られたとする説。この場合、窪地の積極的な活用方法として、近世城でいう武者溜り的な区画である。窪地が最も防禦の固いⅠ郭の西隣という事も裏付け資料の一つとなろう。当時は北縁に土塁が築かれていたと思われる。

②当初、Ⅰ郭とⅡ郭間の堀切であったが、東側か西側に大きく押し広げられて、今の窪地になったとする説。しかし、一般的な造成の際、堀切を埋め込む様な事はあっても、逆の場合は少ないように思える。さらに検出面の地山が一様に平坦地である事から、そうであるとするならば、造成時に堀底の最も深いところまで掘り窪めた事になる。ちなみにⅢ郭と地山の比高差は２ｍ足らずにすぎず、これからすれば極めて浅い不自然な堀切となってしまう。これはありえないと考える。

したがって、窪地は基本的に当初からの城の地割りであって、武者溜り的な区画であったと推論する。

第３節　Ⅱ　郭

窪地(東側)と堀切(西側)に挟まれた高台で南側に２段の削平地が付く。

高台　俯瞰的な形状は長方形であるが、東側部分ですぼまる。東西の長さは最大30ｍ、南北の幅は西側で23.2ｍ、東側で最小14ｍ。地表面は平坦であるが、西側から東側への傾斜地で両端の比高差は1.3ｍに及ぶ。

今は主に栗畑であるが、以前はミカン畑であった。昔は高台の西縁に大きな土塁があったが、ミカン導入時にブルドーザーで押しならされ、原形をとどめない。

削平地①　Ⅱ郭の南縁との比高差は1.5ｍ。俯瞰的な形状は帯状形で、東西の長さ25.5ｍ、南北の幅は最小3.6ｍ、最大4.8ｍ。

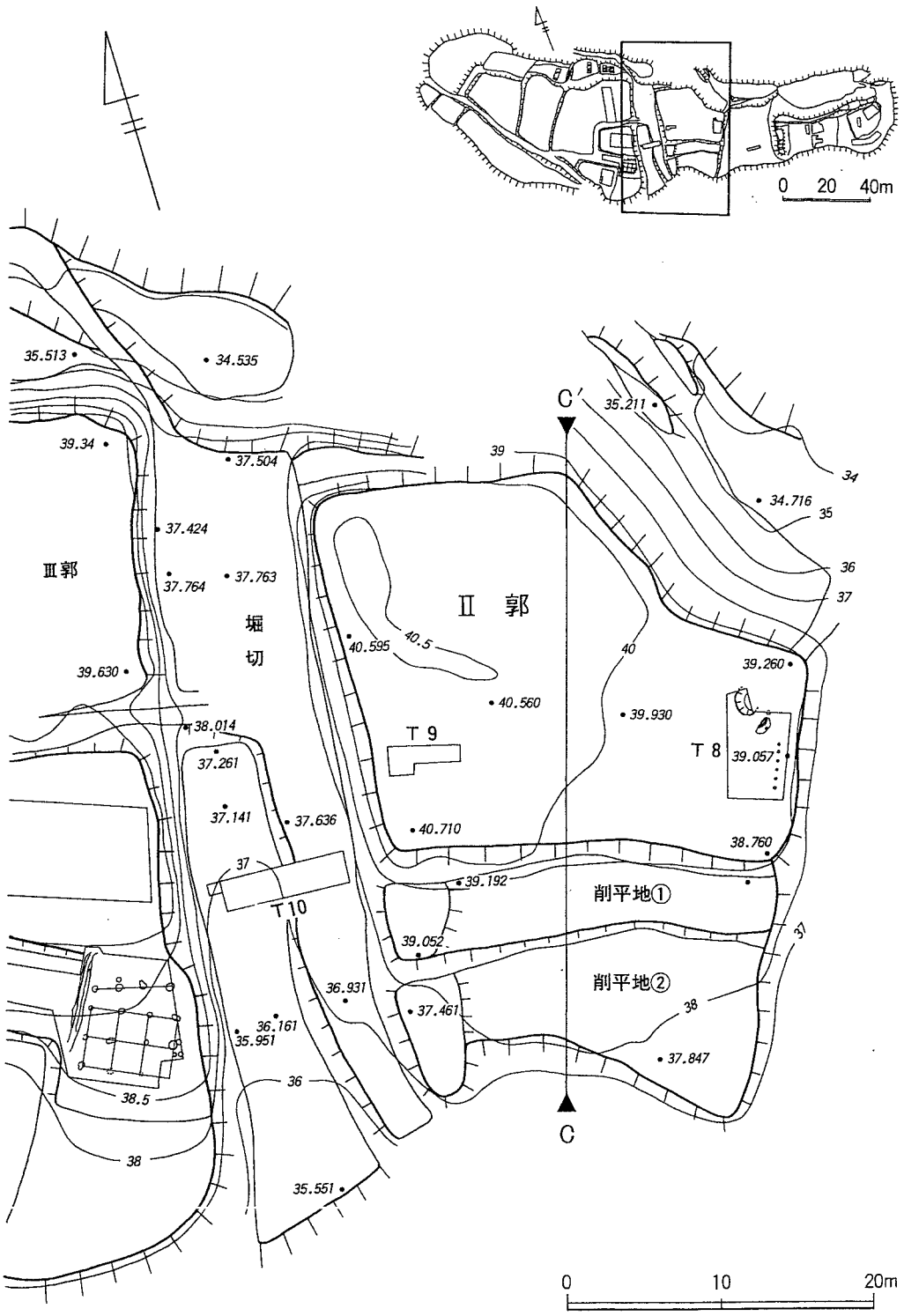
削平地②　上段との比高差は1.6ｍ。俯瞰的な形状は、西側がすぼまった帯状形で、東西の長さ23.5ｍ、南北の幅は東側で最大11.4ｍ、西側で最小5.0ｍ。

〔トレンチ調査結果〕

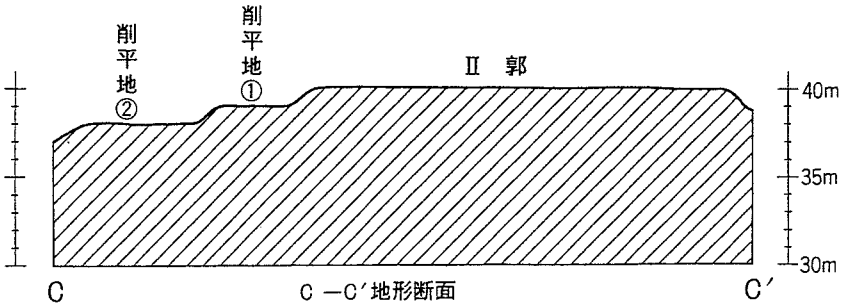
Ⅱ郭の東側にトレンチ(Ｔ８)を設定した。表土の下は硬い褐色ローム層土混じりの褐色土(層厚30㎝)であった。これはミカン畑の開墾時に重機で押しならされた土である。この土の下に地山の褐色ローム層土があり、この面から６個の柱穴と１基の土坑が検出された。

〔柱 穴〕

６個は直線上(N27°Ｅ)にあり、人為的な並びである。柱間は均一の0.55ｍで、検出分の長さは2.75ｍ。柱穴がいずれも小型で、Ⅱ郭の東縁から検出された事を考えると杭列の可能性が大きい。

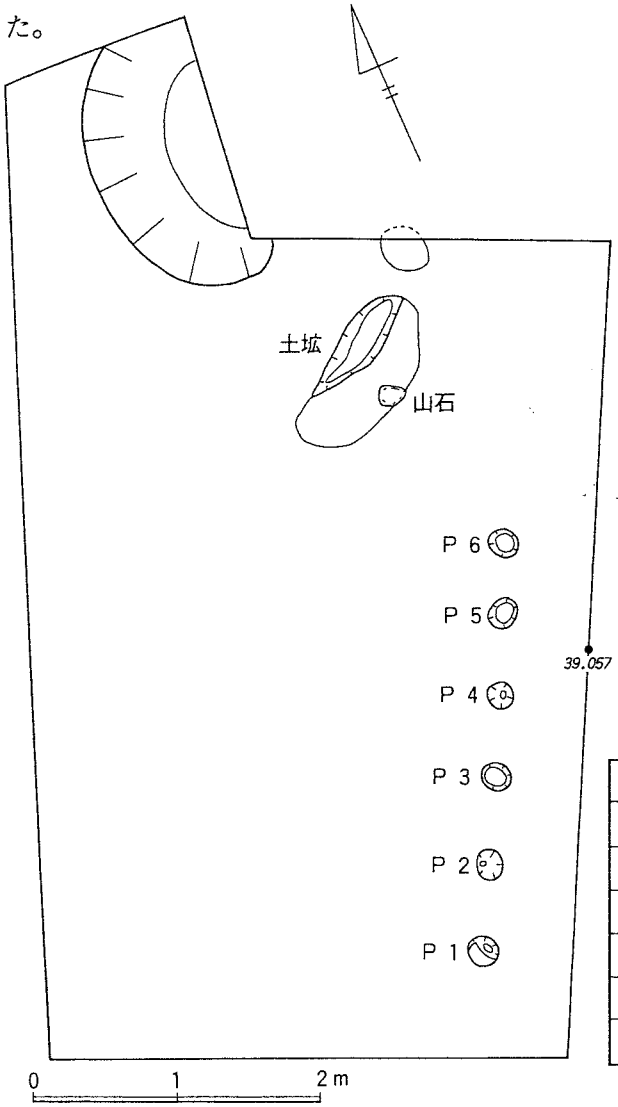


第11図　Ⅱ郭・堀切地形測量図



C－C′地形断面

今回は検出できなかったが、柱穴の並びはさらに北側へ延びる事も考えられる。柱穴は上位～中位部分が後世にカットされていた。したがって柱穴の深さは、いずれも10cm未満にとどまった。



第12図　柱穴・土坑検出状況（Ｔ８）

〔土坑〕

平面形は基本的に長円形である。長径120cm、短径は最大57cmで、長軸の方位はN61°Eにある。底部は変則状態にあり、西側部分に大きく片寄る、埋土は灰色土混じりの褐色ローム層土で、粘着性がある。これについては下位で地山との区別が極めて困難となる。山石が混入しており、用途不明の遺構である。大型の土師器杯も出土したが、破損が激しく、実測不可能であった。

(単位：cm)

柱穴No.	長径	短径	備　　考
Ｐ１	22	19	底部は東側に片寄る。
Ｐ２	20	18	底部は西側に片寄る。
Ｐ３	21	18	――――
Ｐ４	20	17	底部はやや西側に片寄る。
Ｐ５	21	18	――――
Ｐ６	22	19	――――

第８表　柱穴観察表

Ⅱ郭の西側にトレンチ(Ｔ９)を設定した。かつて、土塁が積まれていた箇所である。その結果、ミカン開墾時の造成作業により、土塁は跡形も無く消滅している事が判明した。表土の下は、すぐにローム土の地山であった。

〔小結〕

Ⅱ郭は西側から東側へのかなり大きな傾斜地である。この事は開墾時の造成作業の際に、平坦地へ修正できない程の傾斜地であった事を意味する。造成時に傾斜地にするような逆の事は考えられない。城内の傾斜地はこのⅡ郭の外、Ⅰ郭の２区画にも見られる現象である。

先に述べたⅠ郭とⅡ郭間の窪地と同様に、下内野城の地割りには他の城に無い特異さがある。一方で、Ⅱ郭の西側にあった土塁の存在も一考の余地がある。この土塁はⅡ郭とⅢ郭間の堀切

を造った際の排土を利用している事は言うまでもない。ちなみにⅡ郭とⅢ郭の標高を比較すると明らかにⅡ郭の方が高い。こういう場合、堀切の排土は低い方のⅢ郭に積まれる事が多い。物理的にもこの方が楽であるし、防禦の面でも低い方の高さを補うという利点がある。このようなセオリーから、Ⅱ郭の土塁は逸脱している。

第4節　堀　切

Ⅱ郭とⅢ郭間の堀切。南北の長さ51m。東西幅は北側で上場11m、下場9m、南側で上場14m、下場12m。堀底は南北両端が急斜面に接するため、竪堀への変化は見られない。

堀底は、北側から南側へ19mの所から段掘りの状態となる。上段(東側)の幅は北側で4m、南側で2.8m、下段(西側)は北側で4.6m、南側で9m。両段の比高差は北側で0.5m、南側寄りで0.77m。

Ⅱ郭と堀底の比高差は、北側寄りで2.83m、Ⅲ郭とは北側で1.83m。堀底は北側から南側へ傾斜しており、両端では1.95mの比高差がある。

〔トレンチ調査結果〕

堀切の南端より北側へ19～20mのところにトレンチ(T10)を入れた。結果として、地表面で見るように東側から西側への段掘りであった。断面形状は上下段とも典型的な箱掘りで、しっかりとした掘り方がなされてた。(断面図は36頁 第20図)

東側部分(上段)　堀底の長さは約5.4m、検出面の深さは東側寄りの部分で地表から1.1m。したがってⅡ郭から堀底までの比高差は4.2m。元来は、これに消滅した土塁の高さが加わる事になる。

西側部分(下段)　堀底の長さは約3.7m。上段の堀底とは0.3mの比高差で、さ程、差異はない。検出面の深さは中央部で0.75m。Ⅲ郭から堀底までの比高差は3.4mとなる。

〔小結〕

①埋土は大きく4層に分層できる。地山のローム層土が主体となったもので、短時間のうちに埋没している事が明らかである。人為的に埋め戻された感がある。出土遺物も極めて少なかった。廃却時の意図的な埋め戻しと考える。

②上段部分の堀底は、本来なら付属的な犬走りである。しかし、ここの場合は下段よりも幅が広く、むしろ堀底の主体部分である。

段掘りの理由が不可解である。この事について一つだけ考えられる事は地形的な要因からである。ちなみに、地形はⅡ郭からⅢ郭側への傾斜地である。必然的に地山も傾斜する事になる。そのために土木工事に際し、堀底の深さを一様に均一化する事ができず、上下に2分したという考えである。一理はあるものの、前述の様に上下段の比高差は0.3mにすぎず、解決には至らない。

③堀底は北側から南側への緩傾斜である。比高差は２ｍで、この事から堀底の水はけは良好であった事がわかる。現に上下段の堀底に水みちは刻まれていなかった。

第５節　Ⅲ　郭

俯瞰的な形状は台形で、地表面の高低差により５ブロックの地割りに分けられる。

全体規模　東西の長さは北側で28ｍ、中央部で最大38ｍ、南側で最小18ｍ。南北の幅は西側で最小29ｍ、中央部で最大55ｍ、東側で51ｍ。

Ⅲ郭①・②　元来は一つの区画である。東西の長さは北側で28ｍ、南側で38ｍ。南北の幅は西側で30ｍ、東側で33ｍ。①と②では地権者が異なり、この事が原因で地形に差異が生じたものと思われる。

①は高さ25～30cmの微高地。俯瞰的な形状は長方形で、東西の長さ15.4ｍ、南北の幅は東側で12.6ｍ、西側で9.2ｍ。

②は残りの部分で平地。ミカン畑に開墾された際に重機によって押しならされている。

Ⅲ郭③　Ⅲ郭①との比高差は0.45ｍ、東西の長さ19ｍ、南北の幅は東側寄りで11ｍ、西側寄りで5.5ｍ。東側寄りの部分は南側への緩傾斜地で、両端の比高差は１ｍ。

Ⅲ郭④　Ⅲ郭③との比高差は0.3～0.4ｍ。東西の長さは北側で11ｍ、東側と南側は曲線を描く。南北の幅は西側で11.4ｍ。この地も南側への緩傾斜地で、両端の比高差は1.3ｍ。

Ⅲ郭④　Ⅲ郭②との比高差は1.4ｍ。東西の長さは北側で18.6ｍ、南側は曲線を描く。南北の幅は東側で15ｍ、西側で5.0ｍ。元来④と⑤は一つの区画と思われる。

〔トレンチ調査結果〕

Ⅲ郭①～③・⑤にトレンチ(Ｔ)を入れた。この中でⅢ郭③のＴ13から遺構(建物跡・柱列)が検出された。他のトレンチ(Ｔ11・Ｔ12・Ｔ14)は、いずれも大きく削平を受けており、地表下は無遺構のローム層土であった。

〔建物跡〕

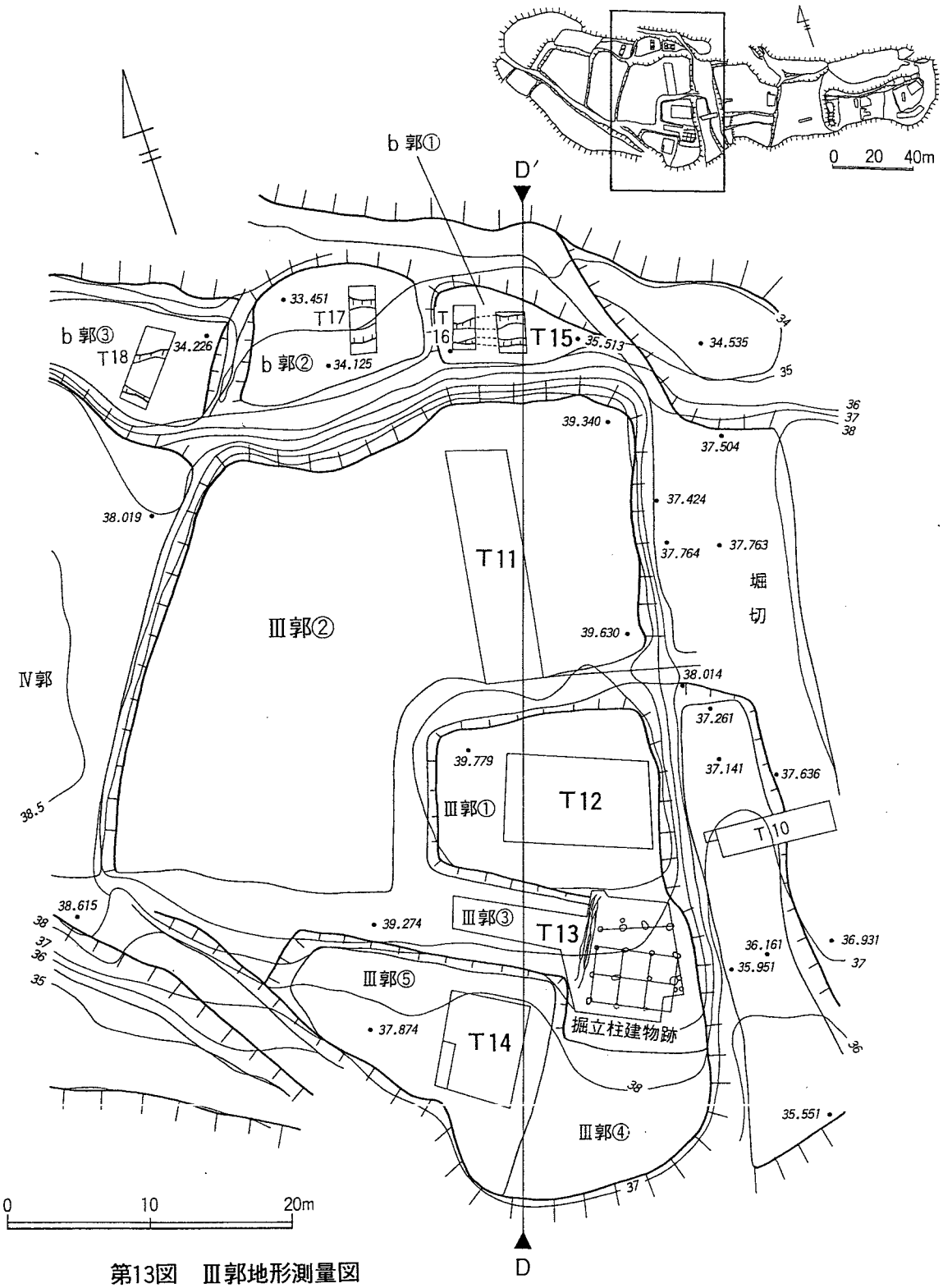
梁行２間、桁行３間の掘立柱建物跡で、主軸の向きはＥ24°Ｎ。梁行の長さは3.8ｍで、柱間は1.9ｍ。桁行の長さは5.7ｍで、柱間は梁行と同じ1.9ｍ。

ただし、南東側の隅柱を検出できなかった。これについては、削平によって消滅したと考える。ちなみに隣合わせのＰ９も柱穴の先端のみの検出である。

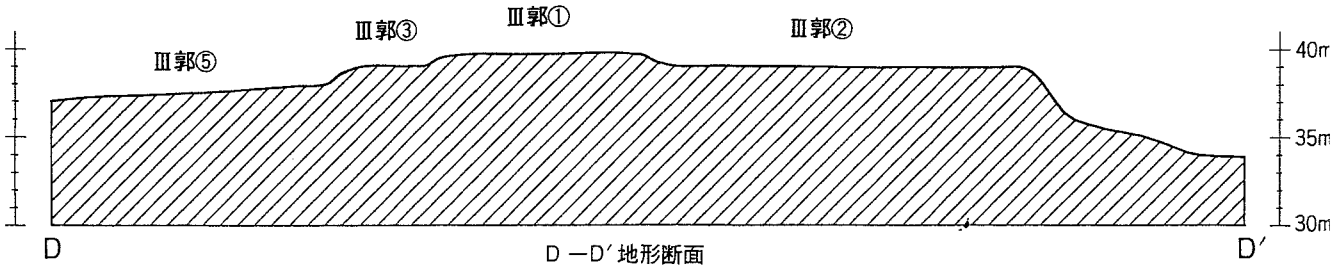
柱痕はＰ１・Ｐ４・Ｐ７で確認された。Ｐ３とＰ５からは柱抜き取りの穴が検出されたが、柱穴との切り合い関係の線引きはできなかった。

全体的にＰ９と欠落の(Ｐ12)に見る様に、柱穴に対する削平度合いは極めて大きく、ほとんど下部のみの残存であった。

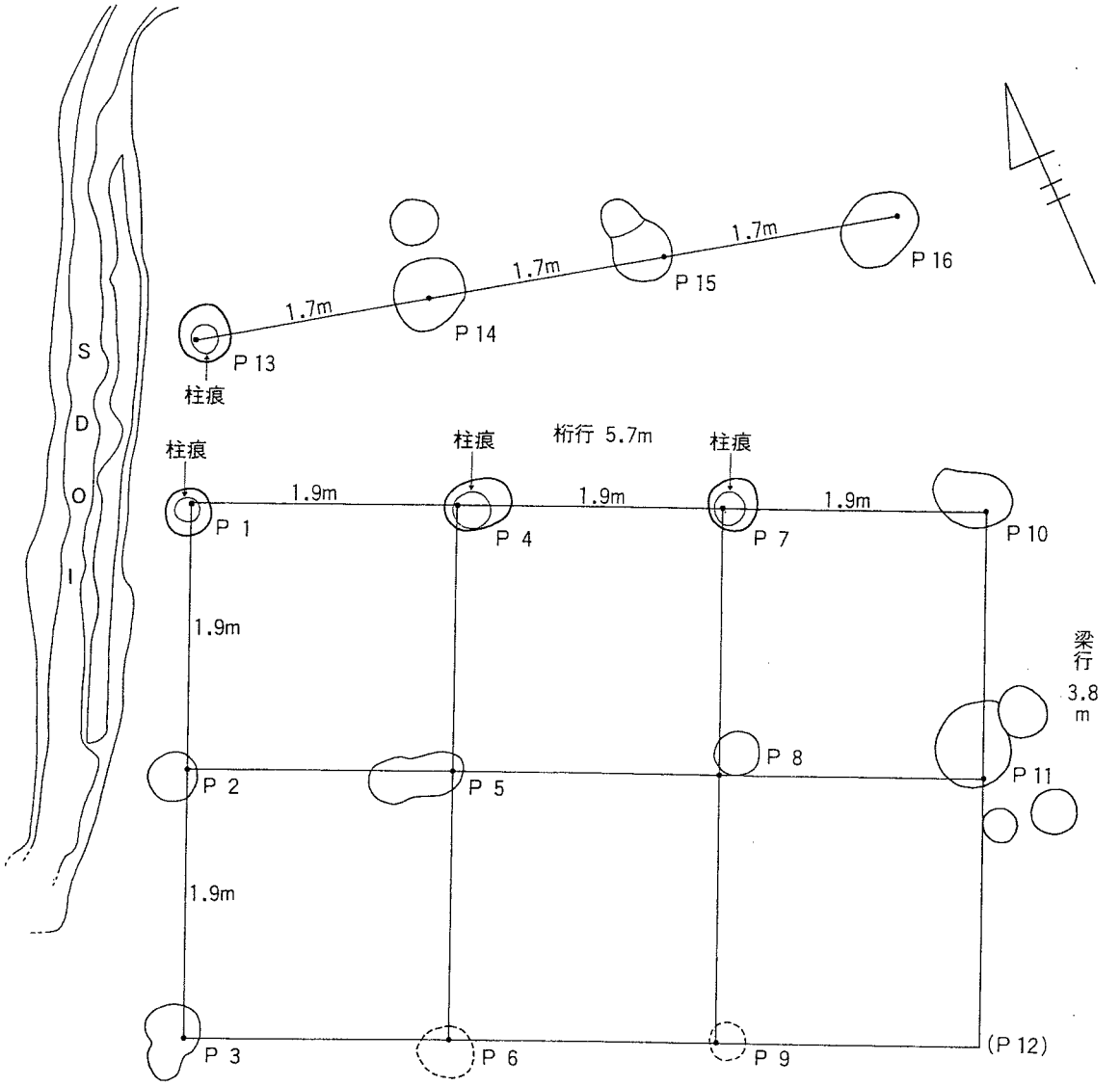
したがって柱穴はローム層土面ではっきりと線引きできるものの、埋土への掘り込みはほと



第13図　Ⅲ郭地形測量図



D－D′地形断面



第14図　建物跡・柱列実測図（T13）

0　1　2m

（単位：cm）

柱穴No.	長径	短径	備考
P 1	40	38	柱穴は円形に近い。柱痕あり（長径21cm、短径19cm）。
P 2	35	35	柱穴は、やや歪な円形。柱痕は確認できず。
P 3	40	—	南側からの柱抜き取り穴あり。柱穴との線引きはできなかった。
P 4	48	35	柱穴は楕円形。柱痕あり（長径27cm、短径26cm）。
P 5	32	—	西側からの柱抜き取り穴あり。
P 6	41	35	柱穴は、やや歪な楕円形。柱痕は確認できず。
P 7	37	36	柱穴は円形に近い。柱痕あり（長径23cm、短径21cm）。
P 8	34	31	柱穴は円形に近い。柱痕は確認できず。
P 9	27	25	柱穴は円形に近い。柱の先端部のみの残存と思われる。
P 10	58	最大40	掘り方は歪な楕円形。全体が柱抜き取り穴の可能性あり。
P 11	65	最大54	10と同じ形状。柱穴状の穴に切られる。
P 12	—	—	柱穴を検出できず。

第９表　建物跡柱穴観察表

（単位：cm）

柱穴No.	長径	短径	備考
P 13	40	39	柱穴は円形に近い。柱痕あり（長径21cm、短径19cm）。
P 14	53	51	掘り方は歪な円形。全体が柱抜き取り穴の可能性あり。
P 15	—	43	北側からの柱抜き取り穴あり。柱穴との線引きはできなかった。
P 16	58	47	掘り方は、やや歪な楕円形。全体が柱抜き取り穴の可能性あり。

第10表　柱列観察表

んどできなかった。

建物自体は小型で、いかにも急ごしらえの感があり、すべての埋土に焼土が混入しているところから、火災によって焼け落ちた事を伝えている。調査者はこれを戦による落城時と見る。

〔柱列〕

前述の建物の北側に4個の柱列を検出した。柱間は1.7mで、別の建物の一部と見られるが、今回の検出では、そこまでの解明に至らなかった。

第6節　Ⅳ　郭

広い意味での階段状地形で、3ブロックの地割りに分けられる。

Ⅳ郭①　Ⅲ郭との比高差は1m。俯瞰的な形状は長方形。南北の長さは東側で30m、西側では27m、東西の幅15.6m。南側から北側への緩傾斜地で、両端の比高差は0.73m。

Ⅳ郭②　Ⅳ郭①との比高差は1.5m。俯瞰的な形状は台形。東西の長さは北側で19m、南側で29m、南北の幅は東側で23m、西側で11m。

Ⅳ郭③　Ⅳ郭②との比高差は2.9m。東側を除く三方は曲線を描く。地権者の話しによれば、ミカン畑の開墾時に段差のある二枚の畑を一枚に造成したという。東側寄りの地表にその名残りがある。南北の長さは東側で32m、東西の幅は22.5m。

第7節　斜面部

〔a郭〕

Ⅳ郭の南側下にある削平地。Ⅳ郭①との比高差は3.7m。東西の長さは44.4m、南北の幅は西側で7.4m、南側寄りで最大13m。地表面は中央部が最も高く、比高差は東側で0.6m、西側で0.35m。a郭の西側に2段の階段状地形が付く。上段をa郭①、下段をa郭②とする。

a郭①　a郭との比高差は1.28m。東西の長さは13m、南北幅は10m。

a郭②　a郭①との比高差は1m。東西の長さは8.6m、南北幅は東側で8.6m、西側で5m。

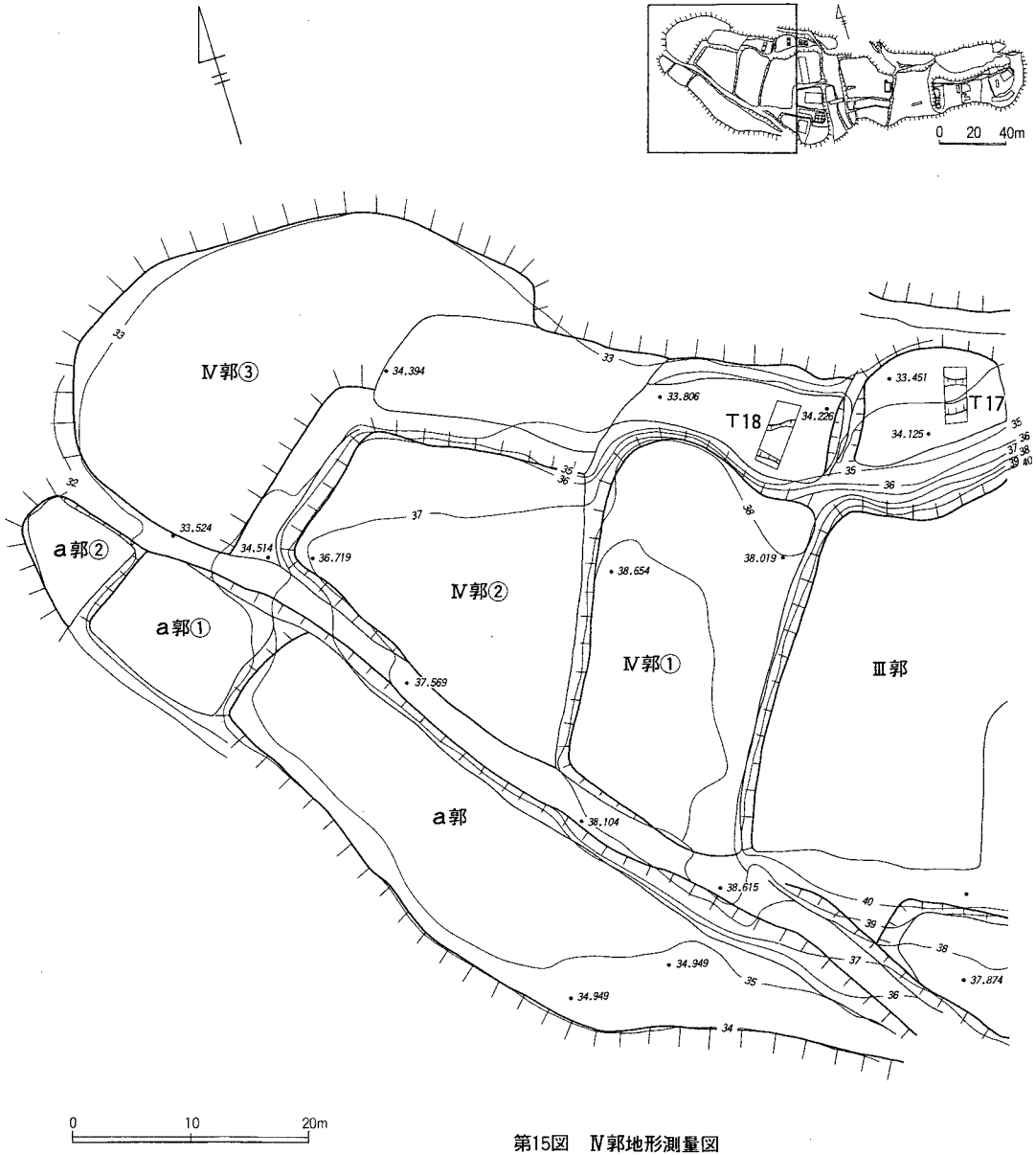
〔b郭〕

Ⅲ郭とⅣ郭①～Ⅳ郭②の北側下にある削平地。段差によって3ブロックに分かれる。東側から西側へb郭①～b郭③とする。ちなみに各段は番号順に高くなる。

b郭①　Ⅲ郭とは3.5m、b郭②とは1.1mの比高差がある。東西の長さ9.7m、南北幅は西側で最大5.2m。東側ですぼまる。

b郭②　b郭③との比高差は0.73m。東西の長さ14m、南北幅は中央部で最大9.3m。

b郭③　Ⅳ郭①とは3.85m、Ⅳ郭②とは3.6mの比高差がある。東西の長さは38m、南北の幅は東側で最大8.2m、中央部で最小3.8m、西側で最大9.4m。



第15図　Ⅳ郭地形測量図

〔 c 郭 〕

Ⅰ郭と窪地の北側下にある削平地。ミカン畑が破棄されて今は荒地となっている。段差によって2ブロックに分かれる。東側をc郭①、西側をc郭②とする。段差面は東側の方が高い。

c郭①　c郭②との比高差は0.9m。東西の長さ43m、南北幅は中央部で最大13m。西側ですぼまる。

c郭②　東西の長さ32m、南北の幅はやや西側寄りで最大9m。東西両側ですぼまる。

第8節　残　壕

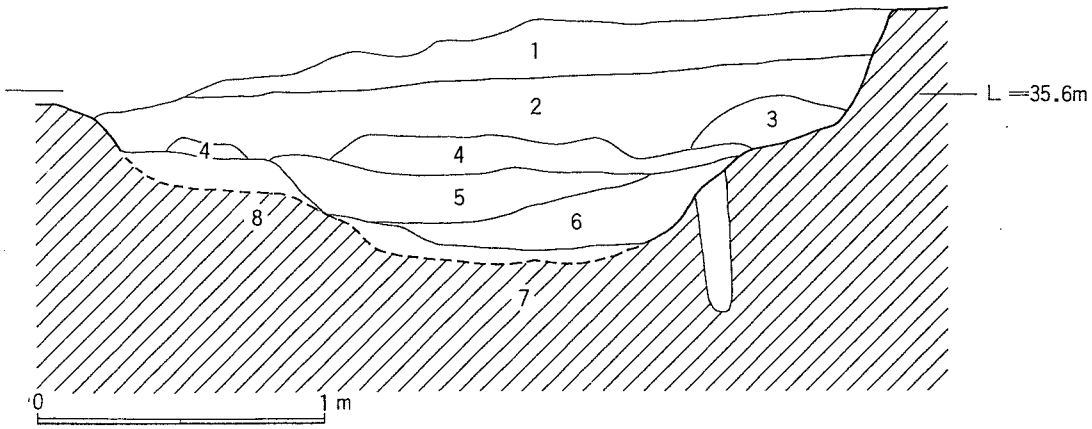
斜面部b郭に4箇所のトレンチを入れた。内訳はb郭①に2箇所(T15・T16)、b郭②に1箇所(T17)、b郭③に1箇所(T18)である。結果として、b郭を東西に走行する残壕を検出した。

＊T15・・・・上場幅2.8m、底部はすぼまりながら丸味を帯びる。地表からの深さは最大で0.85m。全体的に小さく、皿状の掘形となっている。残壕の東端部にあたる。

＊T16・・・・上場幅3.15m、底部はすぼまりながら丸味を帯びる。地表からの深さは最大で1.15m。

＊T17・・・・残壕自体の上場幅4.5m、底部はすぼまりながら丸味を帯びる。但し、北壁の肩部は、やや直立気味となる。地表からの深さは1.45m。

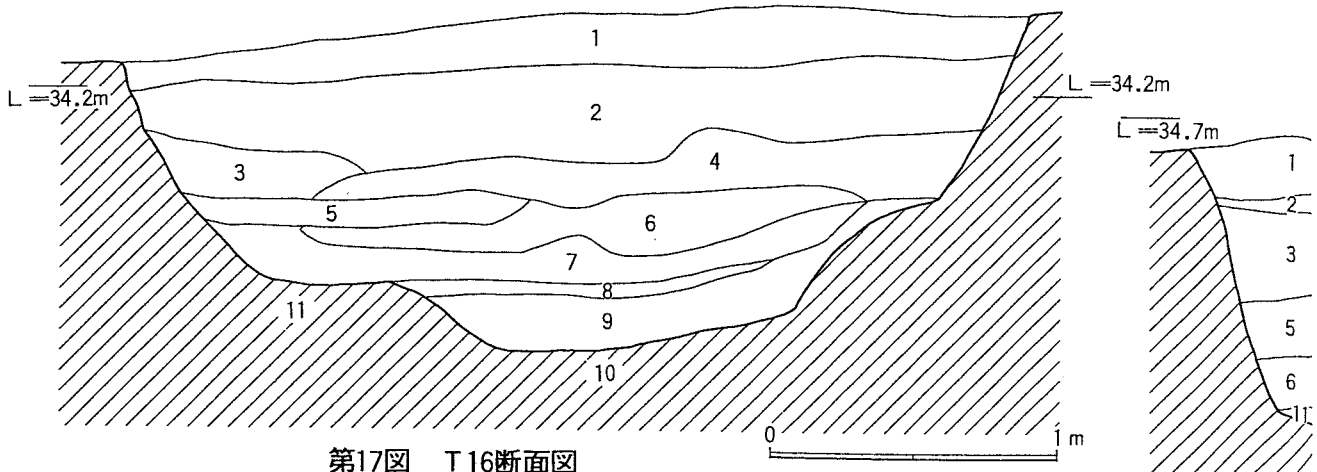
＊T18・・・・皿状の掘形が残る。上場幅5.6m、底部は北側が高く段掘りの形状となる。下段との比高差は25cm。肩部は直立気味となり底部幅1m。



第16図　T15断面図

No.	土　　色	No.	土　　色
1	黒褐色土（耕作土）	5	灰褐色粘質土＋黄褐色土粒
2	黒褐色土＋明褐色粘質土（炭化物を多量に含む）	6	明褐色土（ザラザラしている）
3	明褐色粘質土	7	淡青白色粘質土
4	灰褐色粘質土＋黄褐色粘質土(少量)	8	明褐色粘質土（土塁）

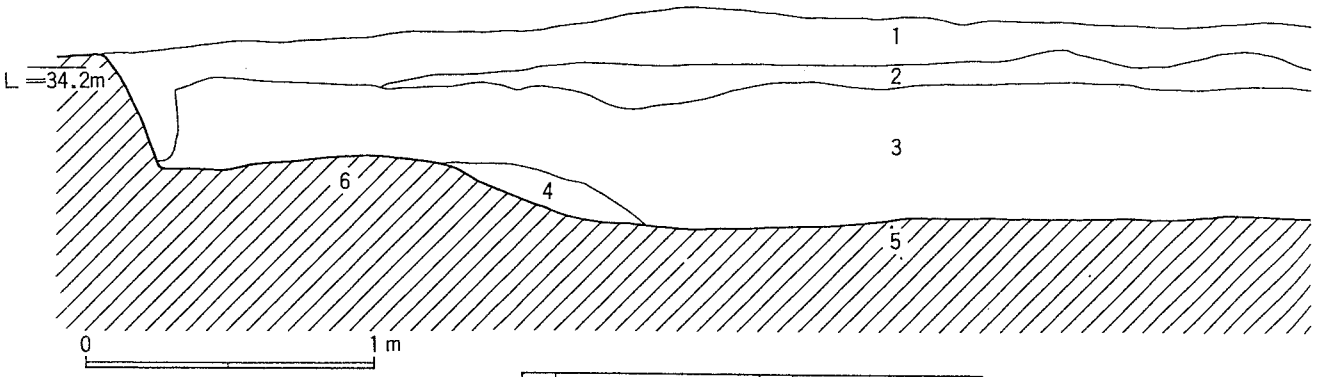
第11表　T15土色観察表



第17図　T16断面図

No.	土　　色	No.	土　　色
1	黒褐色土	7	暗褐色粘質土＋灰褐色粘質土
2	黒褐色土＋明褐色粘質土（炭化物を多量に含む）	8	濁った明褐色粘質土（粘性が非常に強い）
3	明褐色粘質土＋暗褐色粘質土（炭化物を少量含む）	9	明褐色土（やや粘質）土壁を壊した土か？
4	明褐色粘質土	10	淡青白粘質土
5	濁った明褐色土（やや粘質）	11	明褐色粘質土（土壁を壊した土と思われる）
6	黄白色粘質土（地山の土）＋濁った明褐色粘質土		

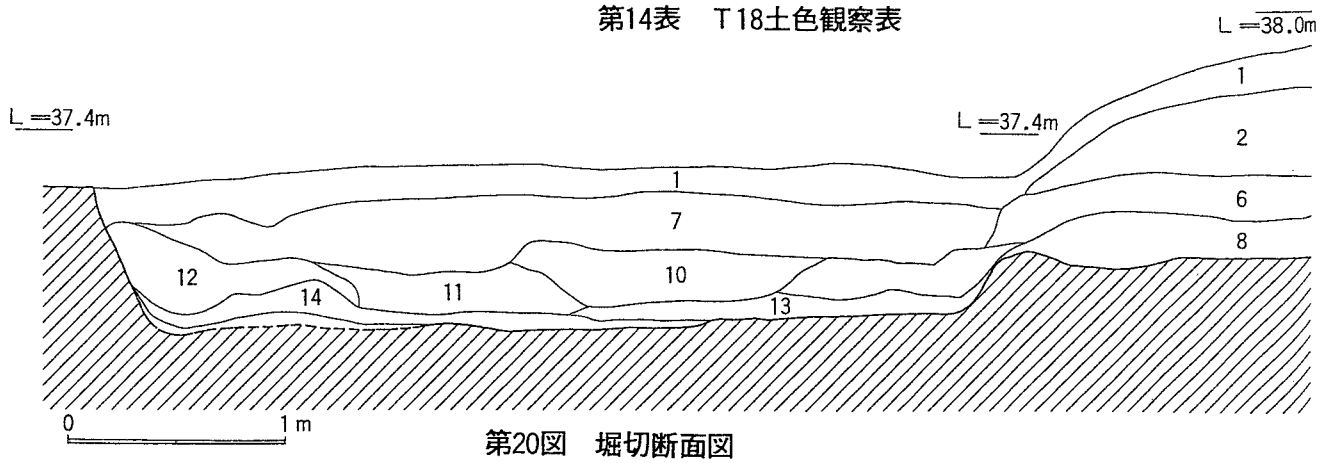
第12表　T16土色観察表



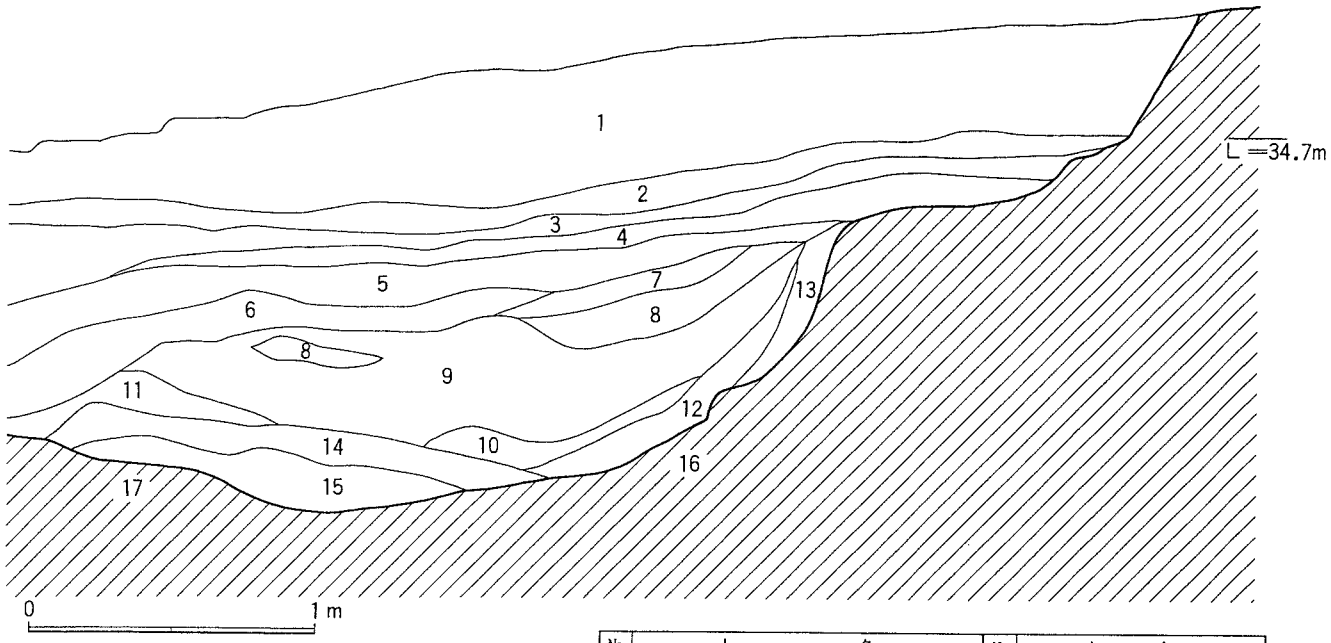
第19図　T18断面図

No.	土　　色	No.	土　　色
1	黒褐色土＋明褐色土	4	黒色粘質土
2	明褐色粘質土＋暗褐色土	5	淡褐色粘質土
3	褐色粘質土	6	明褐色粘質土（土壁）

第14表　T18土色観察表



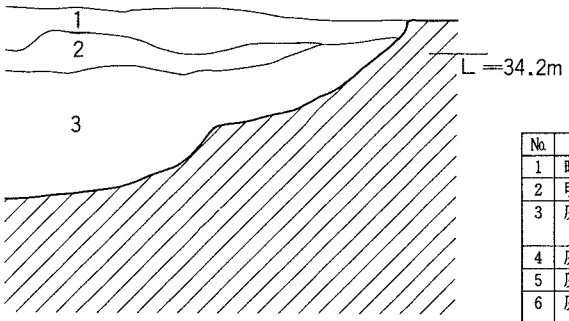
第20図　堀切断面図



第18図　T17断面図

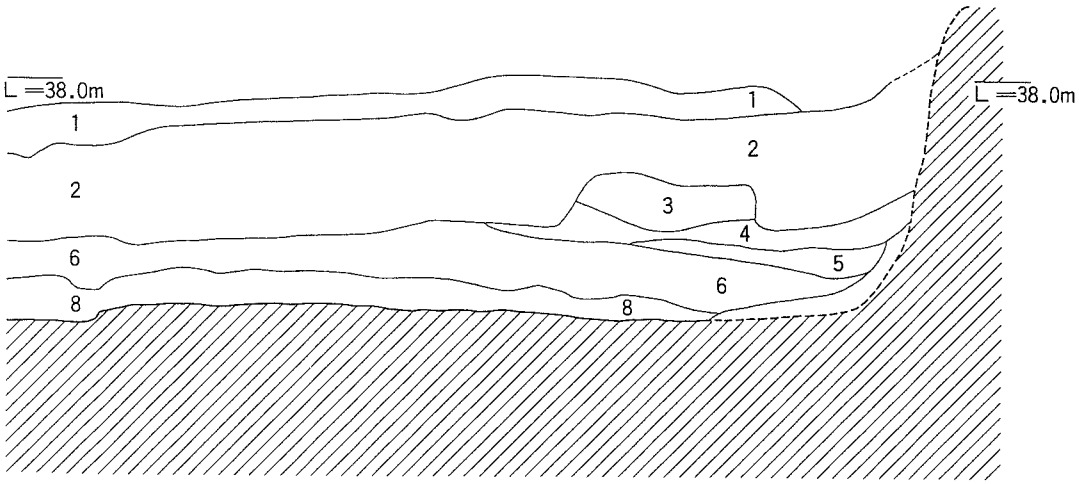
No.	土　　色	No.	土　　色
1	黒褐色土＋明褐色土	10	明褐色粘質土
2	褐色粘質土＋濁った黄褐色土	11	灰褐色粘質土
3	黄褐色土（やや粘質）＋褐色粘質土(極少量)	12	褐色粘質土＋淡青白色粘質土
4	褐色粘質土	13	灰褐色粘質土＋淡青白色粘質土
5	濁った黄褐色土	14	褐色粘質土
6	暗褐色土＋褐色土（固く締まっている）	15	暗褐色土（9よりも明るい）
7	褐色土（固く締まっている）	16	淡青白色粘質土
8	褐色土（やや粘質）	17	明褐色粘質土（土塁）
9	暗褐色土＋褐色粘質土（極少量）		

第13表　T17土色観察表



No.	土　　色	No.	土　　色
1	暗褐色土	8	灰褐色粘質土（6よりも明るく、粘性が強い）
2	明褐色粘質土	9	暗褐色土＋黄褐色粘質土
3	灰褐色土(サラサラして締まりがない)（焼土を若干含む）	10	黄褐色粘質土＋暗褐色粘質土（少量）
4	灰褐色粘質土＋明褐色粘質土	11	淡灰白色土（サクサクしている）＋淡明褐色粘質土
5	灰褐色粘質土（粘性が非常に強い）	12	淡黄褐色粘質土＋暗褐色粘質土
6	灰褐色粘質土（5よりも粘性が強い）（焼土と炭化物を含む）	13	11と本質的には同じだが、淡明褐色粘質土の混入度合いが多い。比較して粘性も強い。
7	暗褐色土＋黄褐色粘質土＋明褐色粘質土	14	淡黄褐色粘質土

第15表　堀切土色観察表



第Ⅳ章　出土遺物

1．中世から近世初頭

1～3は、中国産の青磁である。時期的には堀切から出土した1が最も古く、12世紀から13世紀に位置付けられる。内底面に華花文の先端部が残っている。2と3は14世紀後半から15世紀中葉のもので、釉色は2が白青色、3が灰オリーブ色を呈する。3はⅢ郭のＳＤ０１からの出土である。

7は中国産の白磁で、12世紀から13世紀のものである。壷の破片と思われる。

16は中国産の染付で、16世紀のものである。薄青黒色の呉須による文様が描かれている。

40は陶器である。13世紀から15世紀のもので、内器面にアメ釉を施す。

72～74は常滑で、時期的には12世紀から14世紀のものである。いずれもⅢ郭北下の残壕（b郭②、T17）から出土している。3片とも同一個体の可能性がある。外器面は小豆色を呈する。

62～66は須恵器である。62は擂鉢で5本の条線が確認できる。63～65は波条文様の叩きが残る。66のみナデ調整が行なわれている。

2．近世

〔青磁〕4は青磁の染付碗で、内底面にコンニャク判の文様がある。18世紀後半のものである。

〔白磁〕8～15は白磁で、窯と時代が判るものは8～12である。いずれも肥前窯で、18世紀～19世紀後半に位置づけられる。

〔染付陶器〕17～39は肥前で焼かれた染付の陶器である。時期的には6つに細分できる。

①17世紀後半～18世紀前半(17)　たすき掛け文様。

②18世紀代(18～19・21・23)　23の外器面にコンニャク判の文様。

③18世紀後半(24～26・28)　24の外器面に笹文様。24と25の内器面に菱形文様。26は内器面に菱形文様、外底面には格子目文様が描かれ、釉剥ぎが残る。

④18世紀後半～19世紀前半(20・22・27・29～32・34・39)　27の外器面に丸物文様。29・30の外器面に雪持ち笹文様。22・32は皿、29・30・39は湯呑、31は碗の蓋、34は碗である。

⑤19世紀中葉～19世紀後半(38)　外器面に樹木文様。

⑥19世紀(33・35・36)　33は皿。36は型打ち成形の六角形か八角形の鉢。

⑦明治・大正(37)　外器面に型刷りの小花弁文様。

〔陶器〕41～61は陶器である。大方の物は肥前窯産で、時期的には8つに細分できる。

①17世紀前半(41)　内器面に鉄釉がかかる。

②17世紀(42・44)　42は鉢、44は皿で、肥前もしくは肥後の窯である。

③17世紀中葉～17世紀末(46)　内器面に7本の浅い条線。

④17世紀後半～18世紀前半(45)　内野山窯の産である。

⑤17世紀～18世紀(47・48)　47・48は皿の取手で、48の内器面に縦位の沈線。いずれも八代の産である。

⑥18世紀(49～52)　49は薩摩の産。50・52は外器面にハケによる白色釉の施釉。

⑦18世紀～19世紀(53・54・57)　いずれも擂鉢で、54・57は肥前の産。

⑧19世紀(55・59)　急須の蓋で、関西地方の産。

3．その他

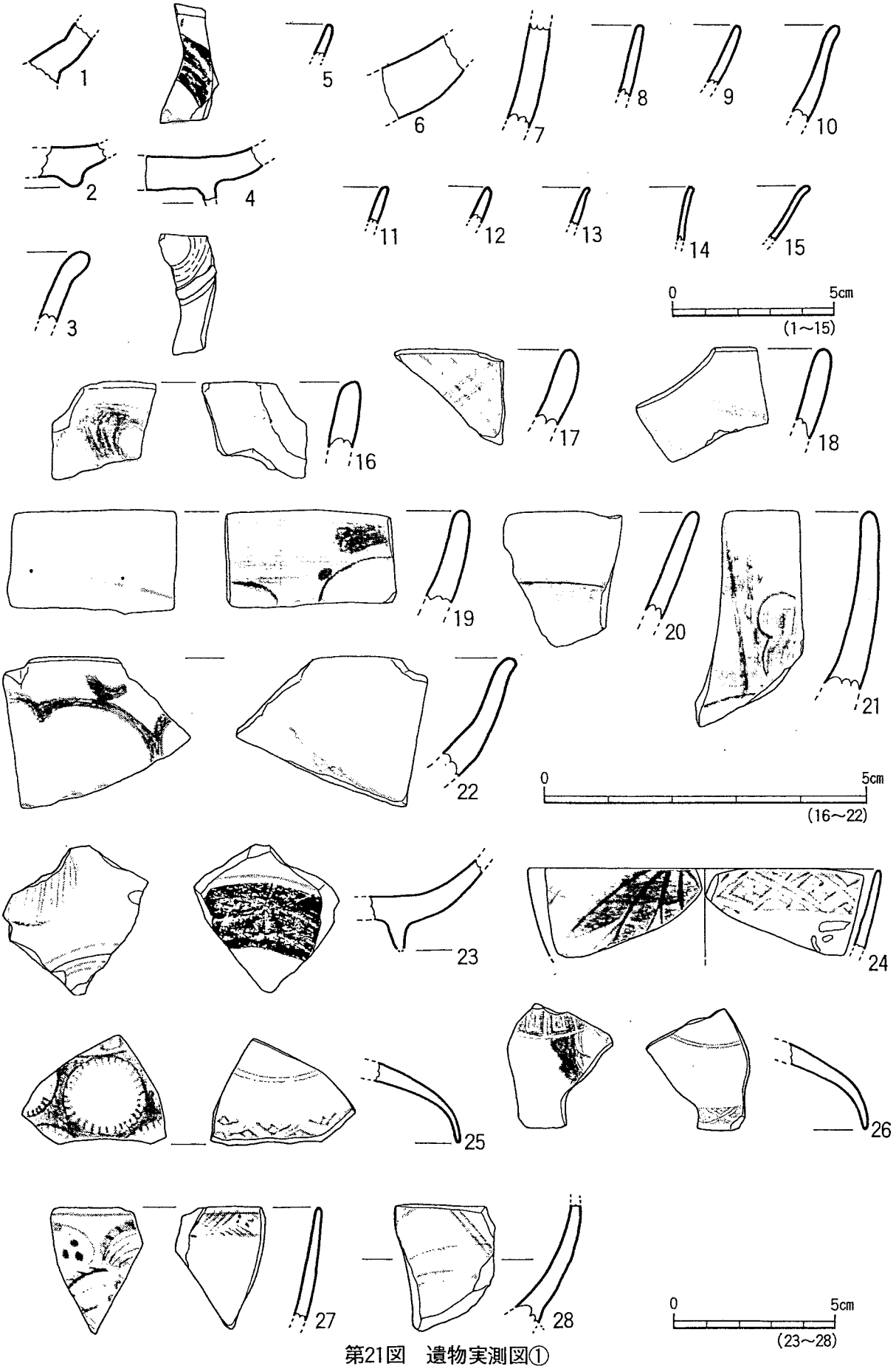
71は耐火性の強い雑器である。

75～77は、大方の中世城から出土するおはじき形の小石で、いずれも長さ幅とも2cm未満。

79は石鏃、80はスクレーパーで、これらは縄文時代の遺物である。

No.	器　種	形態の特徴	文様・手法・調整	備　　考	出土地点
1	青　磁 中国 12C～13C	体部厚 7mm	〔内器面〕 立上がりに白色の界線。 〔内底面〕 華花文の先端部。	〔釉色〕オリーブ灰色。 〔内外器面〕 大きな貫入。光沢あり 〔胎土〕白褐色。精良。	堀　切
2	青　磁 中国 14C後半～ 15C中葉	底部厚 9mm 体部厚 5mm 高台はズン胴で低い。	――	〔釉色〕白青色。 〔外底面〕無釉。	Ⅰ　郭
3	青　磁 中国 14C後半～ 15C中葉	口縁部は外弯し、上位で丸味を帯びて肥厚。 口縁部厚 上位 6.5mm 下位 5.5mm	――	〔釉色〕 くすんだ感じの灰オリーブ色。 〔胎土〕褐色。	Ⅲ　郭 SD01
4	青　磁 染付碗 18C後半	底部は肥厚。 底部厚 11mm 体部厚 7mm 高台高 4.5mm	〔内底面〕 コンニャク判の文様。	〔外器面〕白緑色釉。 〔外底面〕白灰色。 〔内底面〕白灰色。 重ね焼きのあとが残る。 〔胎土〕褐色。精良。 〔焼成〕堅緻。	Ⅲ　郭
5	磁器？	口縁厚部 上位 2.5mm 下位 3.5mm	〔口唇部〕内側に稜線。	〔器面〕貫入。 〔釉色〕白灰オリーブ色。	堀　切
6	白　磁	体部厚 上位 12mm 下位 16mm	――	〔器面〕貫入。 〔釉色〕白灰オリーブ色。	Ⅰ　郭
7	白　磁 壷 中国 12C～13C	体部厚 上位 6mm 中位 7mm 下位 7.5mm	――	〔器面〕貫入。 〔釉色〕灰オリーブ色。 〔胎土〕灰白色	Ⅲ　郭
8	白　磁 肥前 18C～ 19C後半	体部は直線的に伸びる。 体部厚 上位 2.5mm 中位 3mm 下位 3mm	――	〔釉色〕白褐色。 〔胎土〕褐白色。	堀　切
9	白　磁 肥前 18C～ 19C後半	体部はやや内弯する。 体部厚 上位 2.5mm 中位 3mm 下位 3.5mm	――	〔釉色〕白色。 〔胎土〕褐白色。	Ⅲ　郭

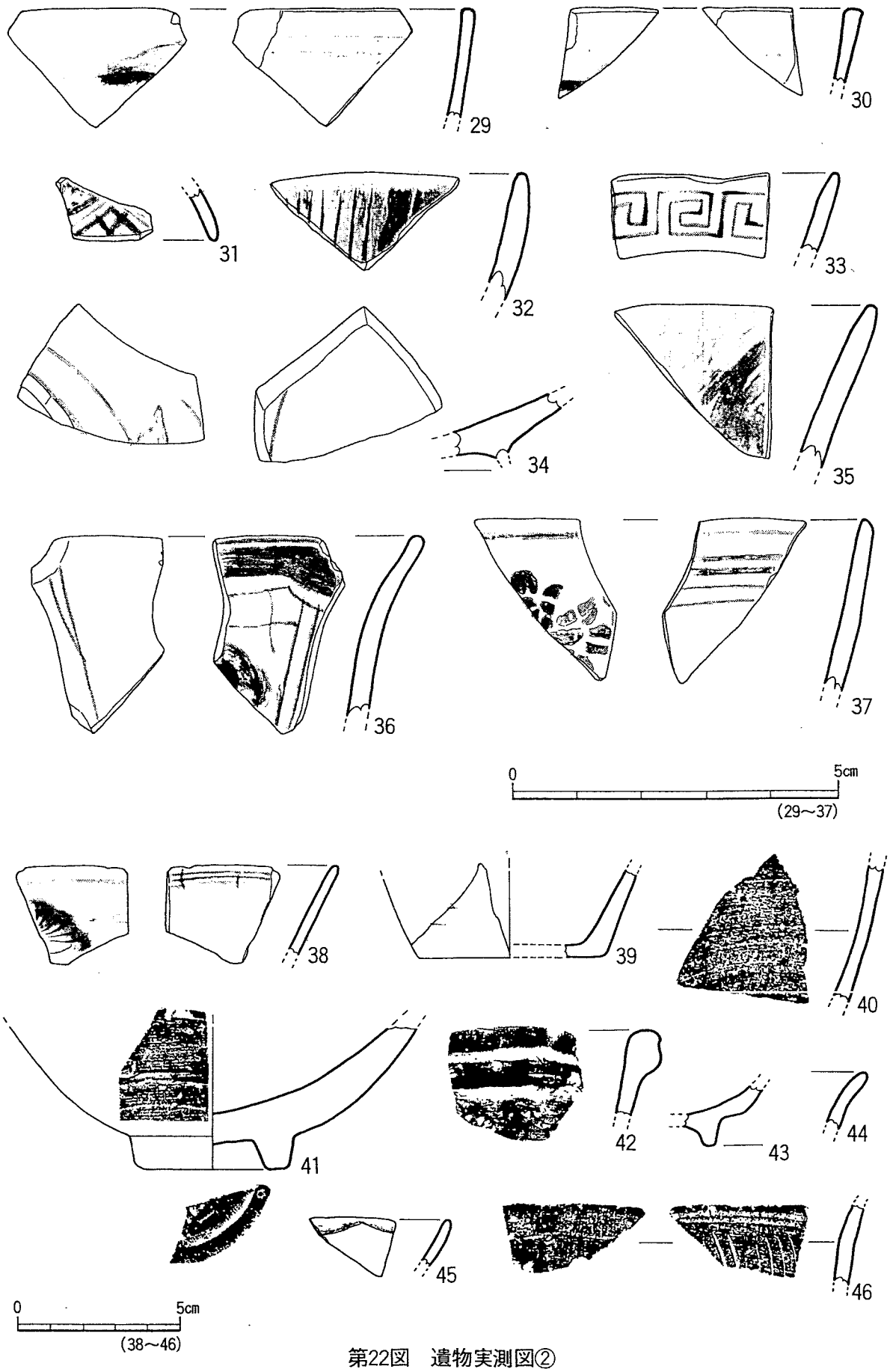
第16表　遺物観察表①


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
0
5cm
(1～15)
16
17
18
19
20
21
22
0
5cm
(16～22)
23
24
25
26
27
28
0
5cm
(23～28)

第21図　遺物実測図①

No.	器　種	形態の特徴	文様・手法・調整	備　　考	出土地点
10	白　磁 肥前 18C～ 19C後半	体部はやや外弯気味に漸次、先細りとなり、上位に至る。 口唇部は若干、口禿げの状態で丸味を帯びる。	――――	――――	Ⅰ　郭
11	白　磁 肥前 18C～19C後半	口縁部厚　上位　2.5mm 下位　3mm	――――	〔釉色〕白色。	堀　切
12	白　磁 肥前 18C～19C後半	口縁部厚　上位　2.5mm	――――	〔釉色〕灰白色。 〔焼成〕焼ききっている。	b郭②
13	白　磁	体部は漸次、先細りとなり外弯する。 体部　上位　1.5mm 中位　2.5mm 下位　3mm	――――	〔器面〕貫入。 〔釉色〕白灰色。 〔焼成〕焼ききっている。	Ⅲ　郭
14	白　磁	体部は薄壁で、やや外弯する。 体部厚　上位　1.5mm 中位　2mm 下位　2mm	――――	――――	Ⅰ　郭
15	白磁？	体部は直線的に伸びて、上位で外弯。	――――	〔釉色〕白色。	Ⅰ　郭
16	染　付 中国 16C	口縁部厚　4mm	〔外器面〕ぼやけた文様。 〔内器面〕界線。	〔呉須〕薄青黒色。 〔焼成〕甘い。	Ⅲ　郭
17	染　付 杯 肥前 17C前半～ 18C前半	口唇部に指頭圧痕。 口縁部　上位　3mm 下位　4mm	〔内器面〕たすき掛け文様。	〔器面〕白色。 〔呉須〕薄青黒色。 〔胎土〕褐白色。	Ⅰ　郭
18	染　付 肥前 18C	口縁部厚　上位　3mm 下位　3.5mm	〔外器面〕斜線文様。	〔器面〕灰白色。 〔呉須〕極薄の青灰色。	Ⅲ　郭
19	染　付 肥前 18C	口縁部はやや内弯。 口縁部厚　上位　2.5mm 下位　4mm	〔内器面〕 ベットリとした呉須に、点描き文様を重ねる。 〔外器面〕横線文様。	〔呉須〕薄青黒色。 〔胎土〕褐色。	堀　切
20	染　付 蓋 肥前 18C後半～ 19C前半	口縁部は均一の厚さで上位に至る。 口縁部厚　上位　2.5mm 下位　2.5mm	〔外器面〕太目の横線。	〔器面〕 白色。細かな貫入。 〔呉須〕薄青色。 〔胎土〕褐色。	Ⅲ　郭
21	染　付 肥前 18C	体部は内弯する。 体部厚　上位　3mm 中位　4mm 下位　5mm	〔外器面〕文様。	〔器面〕 灰白色。全体的にくすんだ感じ。 〔呉須〕灰白青色。	Ⅲ　郭
22	染　付 Ⅲ 肥前 18C後半～ 19C前半	体部は内弯するが、上位で、やや外弯気味となる。 体部厚　上位　2mm 中位　3mm 下位　4mm	〔内外器面〕曲線文様。	〔器面〕 白(褐)色。細かな貫入。 〔呉須〕青黒色。 〔胎土〕褐白色。	Ⅲ　郭

第17表　遺物観察表②


29
30
31
32
33
34
35
36
37
0
5cm
(29～37)
38
39
40
41
42
43
44
45
46
0
5cm
(38～46)

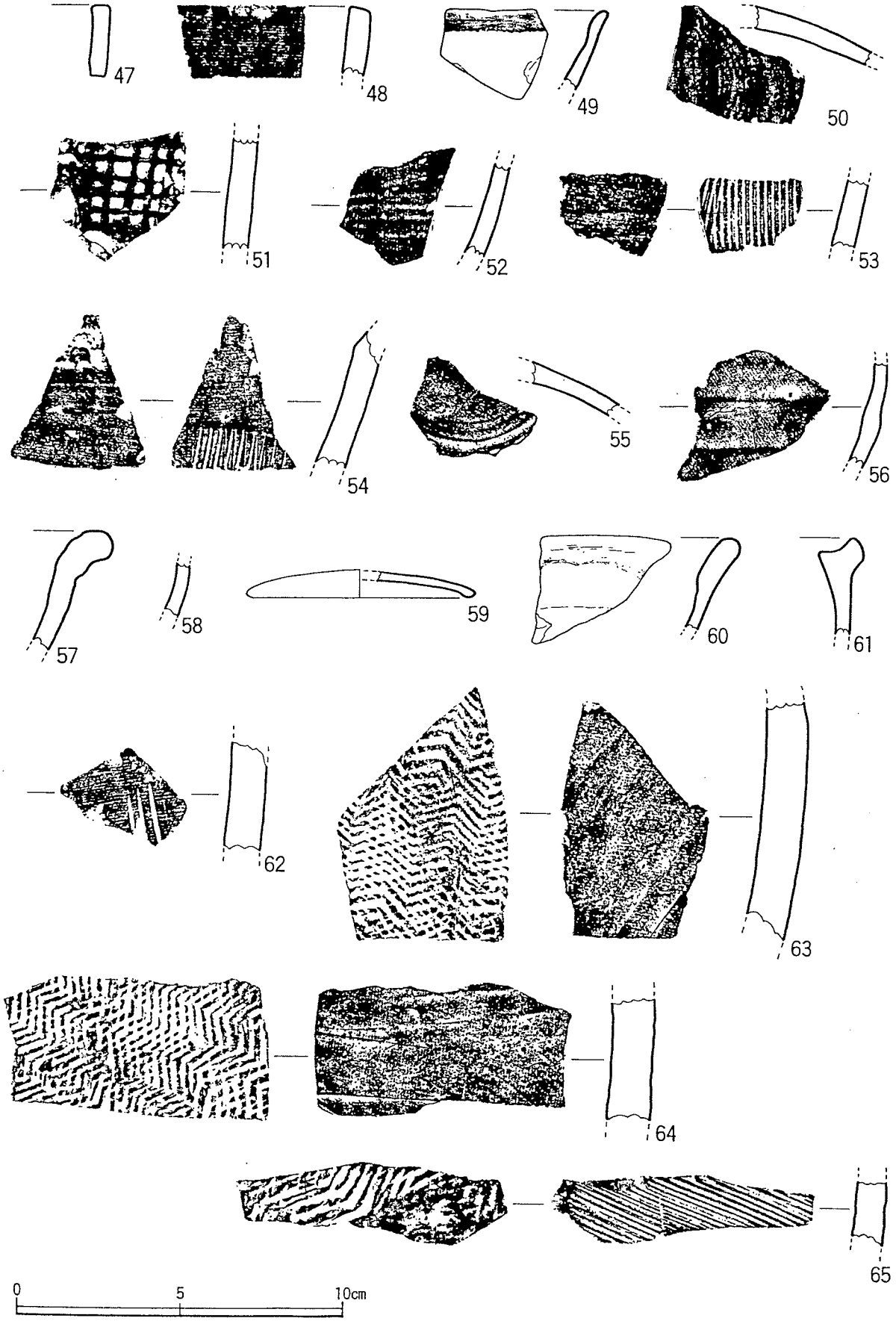
第22図　遺物実測図②

No.	器　種	形態の特徴	文様・手法・調整	備　　考	出土地点
23	染　付 肥前 18C	底部厚 7mm 体部厚 上位 4mm 下位 8mm	〔外器面〕 コンニャク判の文様。 下位に1条の界線。 〔高台の側面〕2条の界線。	〔内器面〕 重ね焼きの痕。 〔器面〕灰白色。	b郭②
24	染　付 肥前 18C後半	体部は直線的に伸びる。 復元口径 11cm 体部厚 上位 2mm 中位 3mm 下位 3.5mm	〔外器面〕笹文様。 〔内器面〕菱形文様。	〔器面〕 白色。焼成時に付着物。	Ⅲ　郭
25	染　付 碗蓋 肥前 18C後半	体部は漸次、先細りとなり内弯する。 体部厚 上位 1.5mm 中位 3mm 下位 6mm	〔外器面〕円文。 〔内器面〕 2条の界線。菱形文様。	〔器面〕白色。 〔呉須〕濃青黒色。	Ⅰ　郭
26	染　付 碗蓋 肥前 18C後半	体部は漸次、先細りとなり内弯する。 体部厚 上位 2mm 中位 3mm 下位 6mm	〔外器面〕文様。 〔内器面〕 2条の界線。菱形文様。	〔器面〕白色。 〔呉須〕濃青黒色。	Ⅲ　郭
27	染　付 肥前 18C後半～ 19C前半	体部は漸次、先細りとなり、直線的に上位へ至る。 体部厚 上位 2mm 中位 3.5mm 下位 4mm	〔外器面〕丸物文様。 〔内器面〕 2条の界線間に交差する四方襷文様。	〔器面〕白色。 〔呉須〕濃青黒色。 蕎麦ちょくの様な物。	表　採
28	染　付 Ⅲ 肥前 18C後半	体部厚 上位 3mm 中位 5mm 下位 8mm	〔内器面〕 格子目文様。釉剥ぎが残る。	〔器面〕 白褐色。細かい貫入。 〔胎土〕褐白色。 〔呉須〕薄青黒色。	Ⅰ　郭
29	染　付 湯呑 肥前 18C後半～ 19C前半	薄壁の口縁部は均一の厚さで上位に至る。 体部厚 上位 2mm 下位 2mm 口唇部は扁平。	〔外器面〕雪持ち笹文様。 〔内器面〕2条の界線。	〔呉須〕薄青黒色。	Ⅲ　郭
30	染　付 湯呑 肥前 18C後半～ 19C前半	薄壁の口縁部は、やや肥厚しながら上位に至る。 口唇部は扁平。 口縁部厚 上位 3mm 下位 1.5mm	〔外器面〕雪持ち笹文様。 〔内器面〕2条の界線。	〔呉須〕極薄の青白色	Ⅲ　郭
31	染　付 碗蓋 肥前 18C後半～ 19C前半	口縁部は内弯する。 口縁部厚 上位 1.5mm 下位 2.5mm	〔内器面〕菱形文様。	〔呉須〕青黒色。	Ⅲ　郭
32	染　付 Ⅲ 肥前 18C後半～ 19C前半	口縁部は外器面が丸味を帯びる。 口縁部厚 上位 2.5mm 中位 4mm 下位 3.5mm	〔外器面〕縦線の文様。	〔器面〕白色。 〔呉須〕黒青色。	b郭③
33	染　付 Ⅲ 肥前 19C	口縁部厚 上位 2mm 下位 2.5mm	型打ち成形。 〔内器面〕雷文。	〔器面〕白黄色。	Ⅲ　郭

第18表　遺物観察表③

No.	器　種	形態の特徴	文様・手法・調整	備　　考	出土地点
34	染　付 碗 肥前 18C後半～ 19C前半	底部厚 4mm 体部厚 3mm	〔外器面〕 1条の界線。 〔内器面〕 2条の界線。	〔器面〕 貫入。 〔呉須〕 青黒色。	Ⅰ　郭
35	染　付 (鉢?皿?) 肥前 19C	体部厚 上位 3mm 中位 3.5mm 下位 4mm 口唇部にひずみ有り。	――――	〔器面〕 白灰色。 〔呉須〕 薄青黒色。	Ⅲ　郭
36	染　付 鉢 肥前 19C	体部は薄壁で、大きく外弯する。 体部厚 上位 2.5mm 中位 3mm 下位 3mm	六角形か八角形の鉢。 型打ち成形。 〔内外器面〕 文様。	〔呉須〕 濃青黒色。	Ⅲ　郭 SB01
37	染　付 肥前 明治～大正	体部は直線的に伸びる。 体部厚 上位 2.5mm 中位 2mm 下位 2.5mm	〔外器面〕 薄色の界線。 小花弁文様(型刷り)。 〔内器面〕 5条の界線。	〔器面〕 白色。 〔呉須〕 青黒色。	堀　切
38	染　付 肥前 19C中葉～ 19C後半	体部は均一の厚さで、直線的に伸びる。 体部厚 上位 3mm 下位 3mm	〔外器面〕 樹木文様。 〔内器面〕 上位に4条の界線。	〔器面〕 灰白色。 〔呉須〕 薄青黒色。	堀　切
39	染　付 湯呑 肥前 18C後半～ 19C前半	外底端は丸味を帯びる。 復元底径 5.8cm 底部厚 4mm 体部厚 上位 4mm 中位 5.5mm 下位 8mm	筒型。	〔器面〕 白褐色。 〔焼成〕 不良。	表　採
40	陶　器 (壺?) 13C～15C	体部厚 上位 4.5mm 中位 4mm 下位 4.5mm	〔外器面〕 横ナデ。	〔色調〕 褐色。 〔内器面〕 アメ釉を施釉。	Ⅲ　郭
41	陶　器 碗 肥前 17C前半	復元底径 4.8cm 底部厚 9mm 体部厚 上位 8mm 中位 11mm 下位 13mm	〔外器面〕 丁寧な横ナデ。 〔高台側面〕 ナデ。 〔内器面〕 ロクロ底。	〔色調〕 褐白色。 〔焼成〕 非常に堅緻 〔内器面〕 鉄釉がかかる。	表　採
42	陶　器 鉢 肥前 17C	口縁部は玉縁状に大きく肥厚する。 体部は薄壁。 体部厚 5mm 口縁部厚 11mm	〔口縁部の外器面〕 強い横ナデにより、沈線が生じている。 〔内器面〕 横ナデ。	〔色調〕 口縁部上面： くすんだ小豆色。 外器面：レンガ色。 〔胎土〕 鉱物の混入が目立つ。	Ⅰ　郭
43	陶　器 碗	底部厚 4mm 体部厚 4.5mm 高台厚 5mm 高台高 5mm	――――	〔外器面〕 素地。乳褐色。 〔内器面〕 褐色釉がかかる。剥落している。	Ⅰ　郭
44	陶　器 皿 (肥前もしくは肥後) 17C	口縁部は大きく外弯する。 口縁部厚 上位 3.5mm 中位 4mm 下位 4.5mm	〔内器面〕 稜線。	〔釉色〕 灰オリーブ色。 〔胎土〕 褐灰色。	Ⅲ　郭

第19表　遺物観察表④



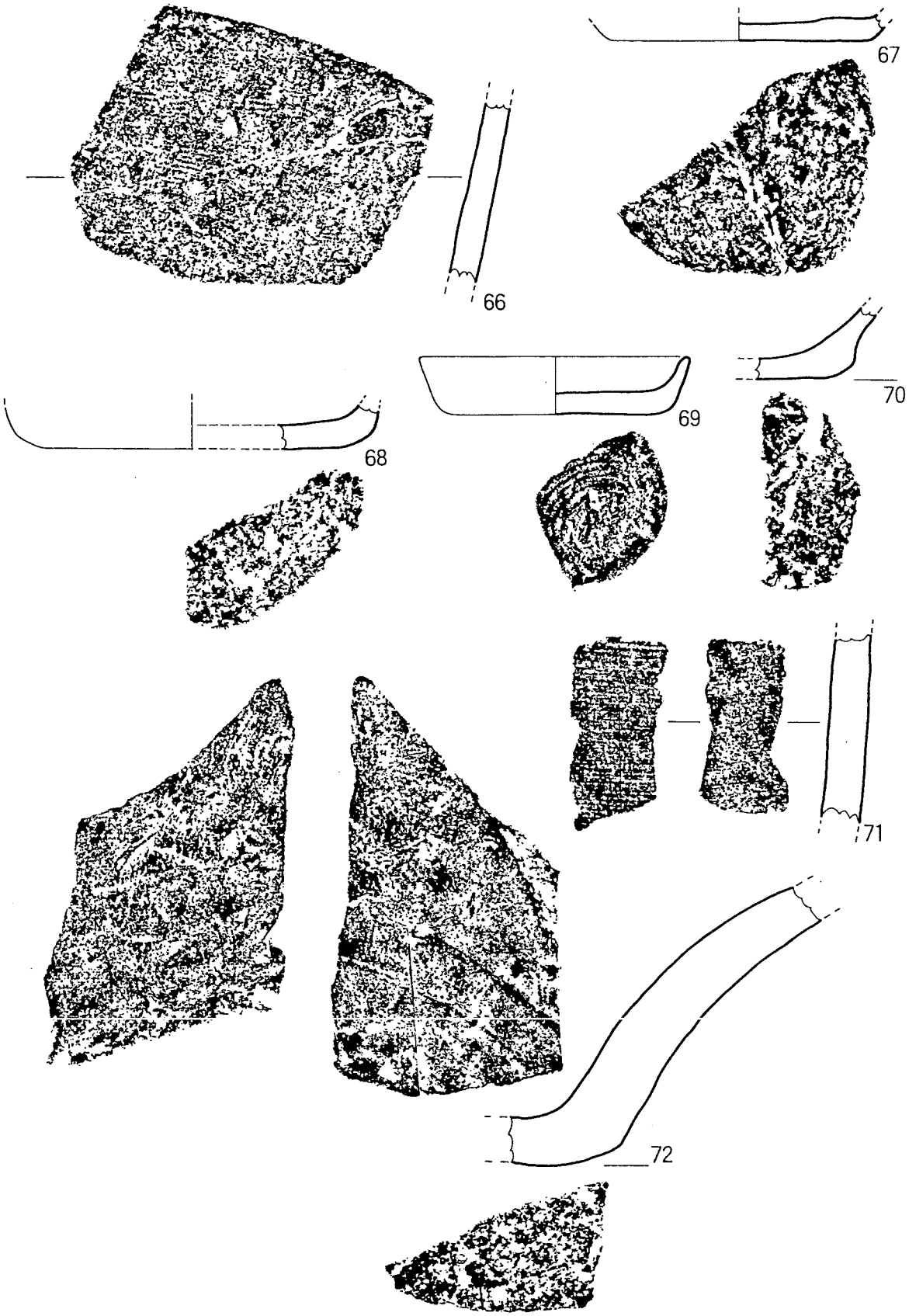
第23図　遺物実測図③

No.	器　種	形態の特徴	文様・手法・調整	備　　考	出土地点
45	陶　器 内野山窯 (佐賀) 17C後半～ 18C前半	口縁部はやや内弯する。 口縁部厚　上位 3mm 下位 3mm	――――	〔釉色〕青緑色。 〔胎土〕褐白色。 全体的に若干の疑問あり。	Ⅲ　郭
46	陶　器 肥前 17C中葉～ 17C末	体部は腰折れして外弯する。 体部厚　上位 4mm 中位 5mm 下位 4.5mm	〔外器面〕横ナデ。 〔内器面〕 浅い条線(7本)。 上位は横ナデ。	〔色調〕褐灰色	Ⅲ　郭
47	陶　器 皿の取手 八代 17C～18C	体部厚　上位 5.5mm 中位 5mm 下位 4mm	〔内器面〕下位に強いナデ。	〔色調〕茶褐色。	Ⅰ　郭
48	陶　器 皿の取手 八代 17C～18C	口唇部は扁平。 口縁部厚　上位 7mm 下位 6.5mm	〔内器面〕縦位の沈線。	〔色調〕 外部：茶灰色。光沢。 内部：桃灰色。	Ⅰ　郭
49	陶　器 碗 薩摩 18C	外器面は直線的に伸びる。 内器面は中途で一旦窄み上位で丸味を帯びて治まる。 体部厚　上位 4mm 中位 3mm 下位 5mm	――――	〔釉色〕 外器面：鉄釉。 内器面：透明釉。 〔胎土〕白褐色。	Ⅲ　郭
50	陶　器 瓶の蓋 肥前 18C	体部厚　上位 4mm 中位 5.5mm 下位 6mm	〔外器面〕 ハケによる施釉(白色釉)。	〔胎土〕茶白色。	Ⅲ　郭
51	陶　器 (カメ？) 18C	体部厚　上位 7.5mm 中位 8mm 下位 8mm	〔内器面〕 叩き。 凹は2.5×3mm～6×4.5mm。 凸は2～3mm。	〔色調〕茶灰色。光沢。 〔焼成〕堅緻。	Ⅰ　郭
52	陶　器 鉢 肥前 18C	体部厚　上位 5mm 中位 5mm 下位 6mm	〔外器面〕 ハケによる施釉(白色釉)。 〔内器面〕薄く施釉。	〔色調〕明茶色。	Ⅲ　郭
53	陶　器 擂鉢 九州産 18C～ 19C前	体部厚　上位 7mm 下位 7mm	〔外器面〕横ナデ。沈線。	〔釉色〕茶灰色。 〔胎土〕褐白色。	Ⅲ　郭
54	陶　器 擂鉢 肥前 18C～19C	体部厚　上位 7mm 中位 8mm 下位 9mm	〔外器面〕横ナデ。 〔内器面〕 条線は9本。内、3本は三角形を形造る。	〔器面〕茶褐色。 〔胎土〕桃褐色。	Ⅰ　郭
55	陶　器 土瓶の蓋 関西 19C	体部厚　上位 4.5mm 中位 5mm 下位 6mm	〔内器面〕ロクロ痕。	〔外器面〕 コバルトブルーの釉を施釉。 〔内器面〕素地。褐色。	Ⅰ　郭
56	陶　器 (壺？) 中国	体部厚　上位 4mm 中位 6mm 下位 5mm	〔外器面〕凹線。 〔内器面〕稜線。	〔釉色〕茶褐色。 〔胎土〕灰褐色。	b郭②

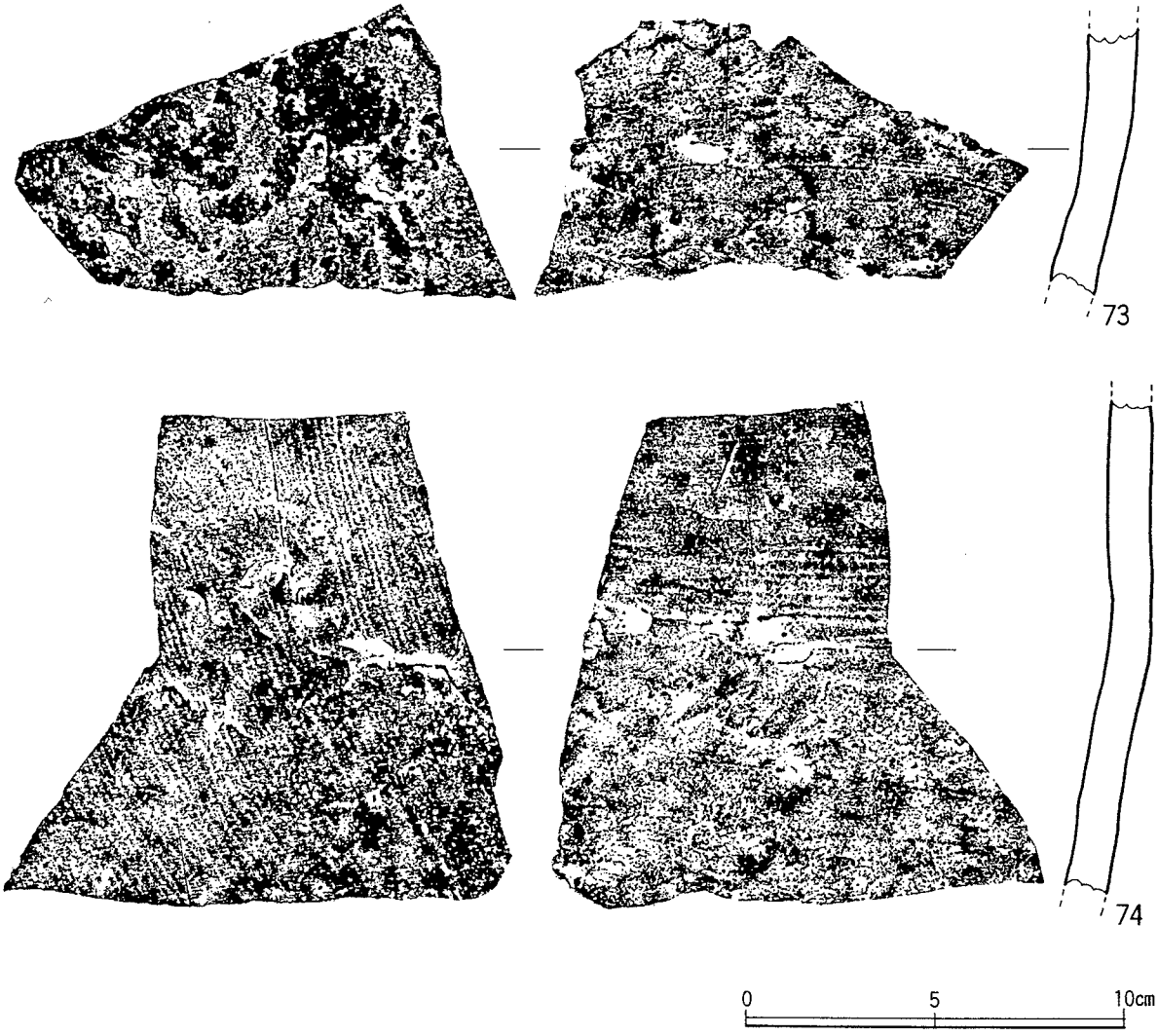
第20表　遺物観察表⑤

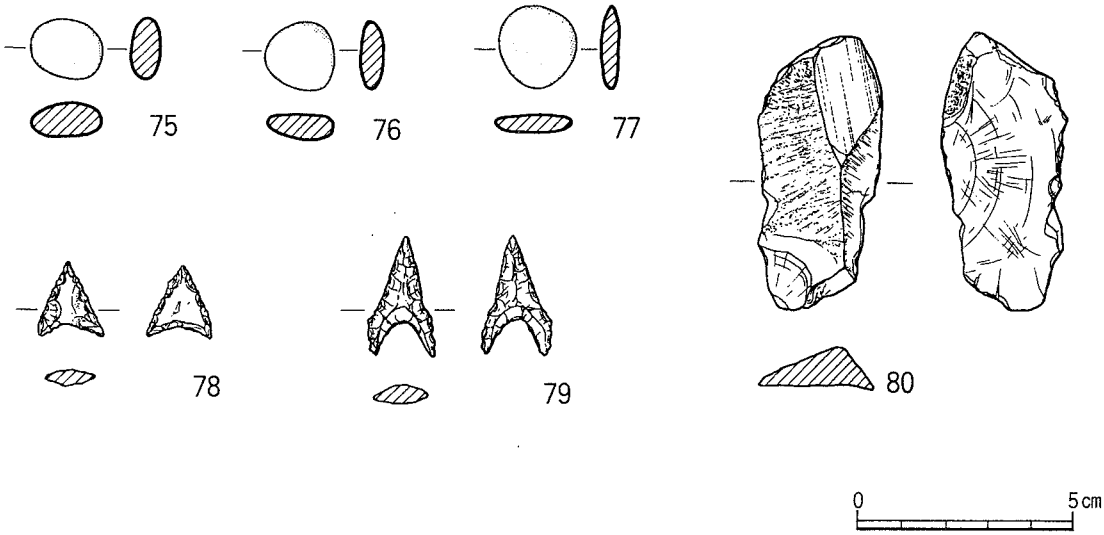
No.	器　種	形態の特徴	文様・手法・調整	備　　考	出土地点
57	陶　器 擂鉢 肥前 18C～19C	口縁部は漸次肥厚し、端部で丸味を帯びて外弯する。 口縁部厚 上位 9mm 中位 7mm 下位 6mm	〔口唇部〕丁寧なナデ。	〔色調〕灰小豆色。	Ⅰ　郭
58	陶　器	体部厚 上位 4mm 下位 5mm	――――	〔釉色〕灰オリーブ色。	堀　切
59	陶　器 急須の蓋 関西 19C	復元口径 7.0cm 体部厚 上位 3mm 中位 3mm 下位 3mm	〔外器面〕丁寧なナデ。	〔色調〕茶灰色。	堀　切
60	陶　器	体部に比べ、均一の厚さの口縁部は著しく肥厚。 体部厚 3.5mm 口縁部 7mm	〔外器面〕 上位：強い横ナデ。 下位：ナデ。 〔内器面〕 上位：丁寧なナデ。 下位：横ナデ。	〔色調〕 上位：灰橙色。 中位：茶灰色。光沢。 下位：灰茶色。	Ⅲ　郭
61	陶　器	口唇部は大きく肥厚し凹む。 口縁部厚 上位 13mm 中位 6mm 下位 4.5mm	〔外器面〕横ナデ。	〔色調〕灰茶色。 〔焼成〕堅緻。	堀　切
62	須恵器 擂鉢	体部厚 上位 11mm 下位 11mm	〔内器面〕 きめ細かい薄い横位のハケ目。 条線5本。	〔器面〕灰色。 〔焼成〕普通。 〔胎土〕精良。	Ⅰ　郭
63	須恵器	体部は肥厚し、やや内弯する。 体部厚 上位 12mm 中位 13mm 下位 13mm	〔外器面〕波状文様の叩き。 〔内器面〕丁寧なナデ。	〔色調〕灰色。 〔焼成〕非常に堅緻。	b郭②
64	須恵器	体部厚 上位 13mm 下位 13mm	〔外器面〕波状文様の叩き。 〔内器面〕丁寧なナデ。	〔色調〕灰色。 〔焼成〕堅緻。 63と同一個体の可能性が有る。	b郭②
65	須恵器	体部厚 9mm	〔外器面〕波状文様。 〔内器面〕横方向の沈線。	〔色調〕灰色。	Ⅰ　郭
66	須恵器	体部厚 上位 8mm 中位 8mm 下位 8mm	〔外器面〕ナデ。 〔内器面〕横ナデ。	〔色調〕 外器面：桃褐色。 内器面：鈍い橙色。 〔焼成〕 不良。器面はボロボロ。 〔胎土〕精良。	Ⅰ　郭
67	土師器	復元底径 7.8cm 底部厚 中央 5mm 外底端 7mm 体部厚 5mm	ローリングが激しい。	〔色調〕鈍い橙色。 〔焼成〕甘い。	Ⅲ　郭
68	土師器 杯	外底端は丸味を帯びる。 復元底径 8.9cm 底部厚 中央 7mm 外底端 8mm 体部厚 6mm	ローリングが激しい。	〔色調〕鈍い橙色。 〔焼成〕やや甘い。	Ⅰ　郭

第21表　遺物観察表⑥



第24図　遺物実測図④





第25図　遺物実測図⑤

No.	器　種	形態の特徴	文様・手法・調整	備　　考	出土地点
69	土師器 皿	器形は船型。やや歪。 復元口径 8.0cm 器高 1.7mm 復元底径 6.8cm	〔外器面〕横ナデ。 〔内器面〕ナデ。 〔外底面〕 ローリングが激しい。	〔色調〕鈍い橙色。 〔焼成〕やや甘い。	b郭②
70	土師器	外底端は丸味を帯びる。 体部の立上がりは窪む。 底部厚 中央 6mm 外底端 11mm 体部厚 5mm	ローリングが激しい。	〔色調〕鈍い橙色。 〔焼成〕やや甘い。	I　郭
71	雑　器	体部は直線的に伸びる。 体部厚 上位 11mm 中位 11mm 下位 11mm	耐火性の強い雑器。 〔内器面〕 施釉あり。生産関係か人為的なものかは不明。	〔色調〕 外器面：肌色。 内器面：灰白色釉。 〔胎土〕白色粒を混入。	b郭③
72	常　滑 壷 12C～14C	体部は外弯し、底部よりも肥厚する。 外底端は丸味を帯びる。 体部厚 上位 18mm 中位 17mm 下位 20mm 底部厚 13mm	〔外器面〕 不揃いではあるが、丁寧なナデ。指頭圧痕も加わる。 〔内器面〕横ナデ。 〔外底面〕非常に粗い整形。	〔色調〕 外器面：小豆色。 内器面：黄灰小豆色。 〔焼成〕非常に堅緻。 外底面に焼成時の砂目が付着。	b郭②
73	常　滑 壷 12C～14C	肩部。体部は中途で内器面が窪む。 体部厚 上位 13mm 中位 11mm 下位 12mm	〔内器面〕 横ナデに指頭圧痕が加わる。	〔外器面〕 黄褐色釉の施釉。剥落が目立つ。素地は灰白黄色。 〔内器面〕灰小豆色。 〔胎土〕精良。	b郭②
74	常　滑 壷 12C～14C	胴部。体部は中途で腰折れ状態となる。 体部厚 上位 11mm 中位 11mm 下位 12mm	〔外器面〕 ハケ目に指頭圧痕が加わる。 〔内器面〕 上位：横ナデ。 中位～下位：ヘラナデに指頭圧痕が加わる。	〔色調〕小豆色と茶色。	b郭②

No.	器　種	形態の特徴
75	おはじき	17mm×14mm 厚さ 7mm 重さ 2.99g
76	おはじき	16mm×15mm 厚さ 6mm 重さ 2.19g
77	おはじき	18mm×18mm 厚さ 4mm 重さ 2.16g

No.	器　種	形態の特徴
78	石　鏃	長さ 1.7cm 幅 1.65cm 厚さ 0.35cm 重さ 0.55g
79	石　鏃	長さ 2.8cm 幅 1.6cm 厚さ 0.45cm 重さ 0.75g
80	スクレーパー	長さ 6.3cm 幅 2.8cm 厚さ 0.9cm 重さ19.11g

第22表　遺物観察表⑦

第V章　まとめ

〔1〕　中世遺物の出土は非常に少なかった。これは城山の中心部が一昔前、造成されてミカン畑に開墾されている事と関連があるのかも知れないが、江戸時代の遺物は結構、出土している所から、原因を開墾だけに求めるのは不適当であろう。やはり下内野城が、遺物の少ない中世城という見方は動かし難い。

この事に関し、熊本県内でこれまで発掘調査された中世城館跡に、同様な事例がいくつかあった。最も典型的なものは、館の主要部分を完掘した『龍田陣内城館跡』(熊本市龍田町)である。同報告書の中から関連事項を2点抜粋すると、①城館がごく短期間の使用であった場合、当然の事ながら、遺物量は少ない。②陣跡のような場合は、総引き上げの際に徹底した清掃が行なわれた可能性がある。

以上の事柄は最も基本的な考えであるが、この他に、当然の事ながら敵勢による略奪も想定される。この場合、破片は残ると思われるので、やや説得に乏しい面もある。いずれにせよ遺物の少ない中世城の在り方は興味が持てるが、最も妥当な考え方は①であろう。

ちなみに第23表は、参考までに中世城跡の発掘調査において出土遺物の「多い」・「少ない」を判断したものである(『龍田陣内城館跡』の調査報告書に掲載したものを一部修正し、新しい資料を追加した)。

〔2〕　中世遺物の中では斜面部b郭②の残壕(T17)から出土した常滑片が注目される。遺構に伴う遺物である。12世紀から14世紀頃のもので、こういう日用雑器はいわば消耗品で、輸入青磁や白磁のように伝世品の類にはなり得ないと考える。したがって、この遺構は、極論すれば、常滑の年代に則して、鎌倉期まで遡る事になる。となれば下内野城は鎌倉時代の城との見方が出て来る(他に、12世紀から13世紀の青磁や白磁が出土している。青磁は堀切からの出土である)。

しかし、今日では、総じて鎌倉時代に城はなかったというのが定説である。根拠として鎌倉幕府を開いた源 頼朝でさえ城を築いていないし、県内外を問わず、これまで発掘調査によって鎌倉期の城と断定された城がないからである。それ故に下内野城の場合、3片の常滑だけでもって残壕の年代を即、鎌倉期に引き上げるのは無理があろう。これについては、常滑の年代を最下限に持ってきて、城の年代を14世紀代の南北朝期に求めれば、さほど無理のない推論となる。ちなみに県内でも、発掘調査で南北朝期まで確実に遡る城が存在する。

(代表例は、球磨郡山江村の『山田城Ⅰ』で、九州縦貫自動車道の建設に伴い大規模な発掘調査が実施されている。城の実年代が南北朝期のみに限定される極めて特異な山城である。ちなみに、その他にも南北朝まで遡る可能性を持つ城館址は、先述の陣内館や第23表に掲げた稲佐城など数例を数える。この2城は出土遺物量が少ないので推論の域を出ない。)

城館名	所在地	出土遺物		備考	種類
		多い	少ない		
大園山館	荒尾市一部	○		糸切り土師器の出土が目立つ 全掘に近い。	館
田中城	玉名郡三加和町		○	県内最大級の丘城。 主要部分はほとんど全掘。	丘城
蠡嶽	玉名郡南関町	○		輸入染付の出土が目立つ。 山頂を全掘。	山城
稲佐城	玉名郡玉東町		○	全掘に近い。	丘城
隈部館	鹿本郡菊鹿町		○	山腹に残る県内屈指の館。庭園と礎石建物が残る。青磁が数片のみ出土。	館
若宮城	鹿本郡菊鹿町	○		糸切り土師器と12世紀代の白磁の出土が目立つ。	丘城
城村城の付城	山鹿市城		○	主要部分を全掘。 付城という性格にもよろう。	丘城
亀ケ城	菊池郡旭志村		○	(古代遺構が検出)	丘城
南郷の館	阿蘇郡久木野村	○		主要部分は全掘に近い。	館
宇土古城	宇土市神馬町	○		主郭の周濠から多量の遺物が出土。	丘城
堅志田城	下益城郡中央町		○	大規模山城。本丸と二の丸は完掘に近い。	山城
濱の館	上益城郡矢部町	○		土坑から阿蘇氏の宝物が出土。	館
山田城Ⅰ	球磨郡山江村	○		輸入磁器と中世雑器が多量に出土。 染付の出土なし。	山城
山田城Ⅱ	球磨郡山江村		○	城域の3分の2を以上を調査。	山城
高城	球磨郡山江村	○		全掘。中世雑器や輸入磁器の出土が目立った。染付の出土なし。	丘城
蔵城	球磨郡錦町	○		主郭を全掘。	丘城
高山城	球磨郡深田村		○	山頂を全掘。	山城
奥野城	球磨郡多良木町	○		全掘に近い。中世雑器の出土が目立つ。	丘城
志岐城	天草郡苓北町	○		輸入陶磁器と日用雑器の出土が目立つ。	山城
河内浦城	天草郡河浦町	○		ゴミ捨て穴を検出。多量の糸切り土師器が出土。	山城
下田城	天草郡河浦町	○		輸入染付の細片が目立つ	山城

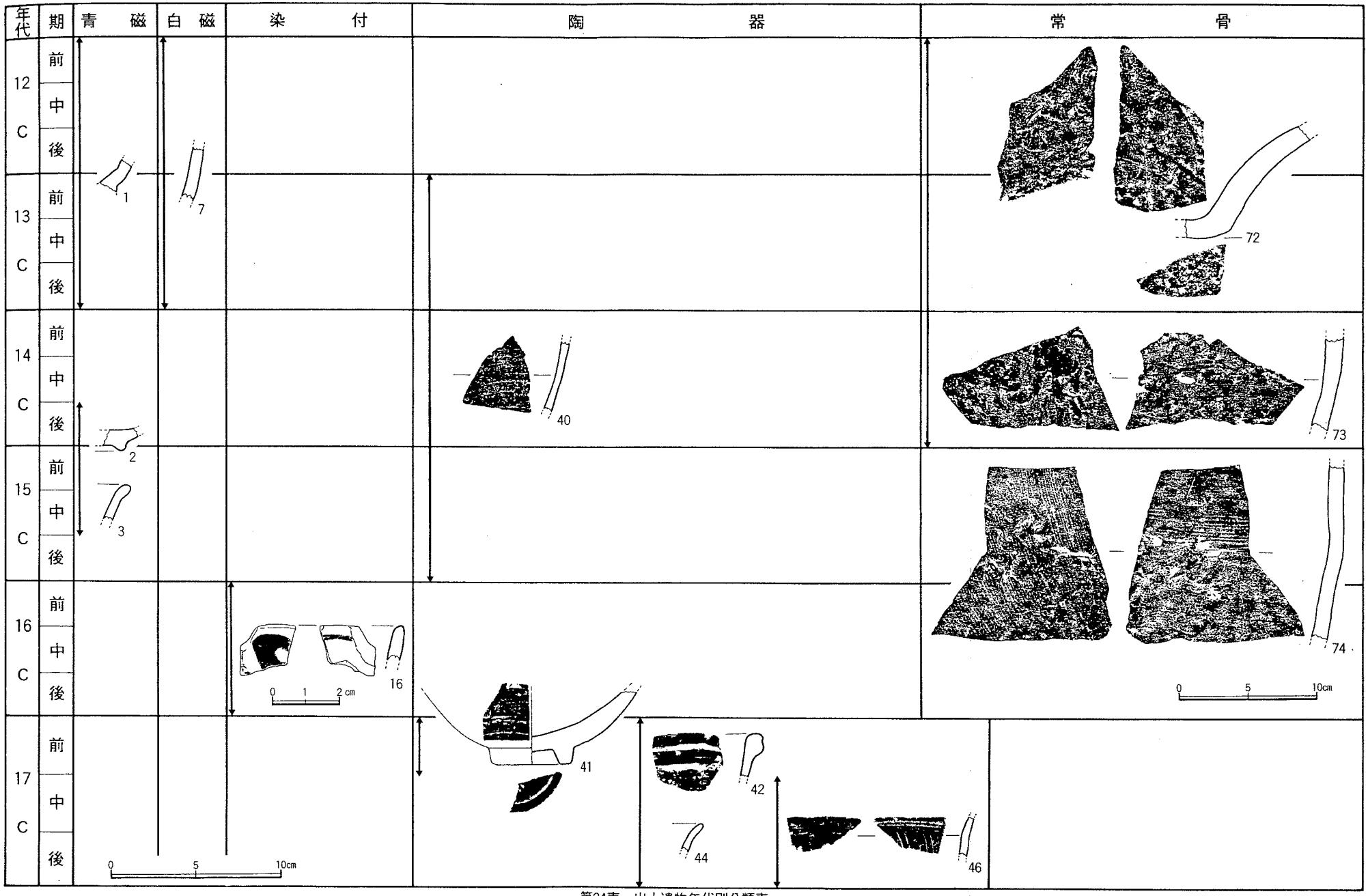
第23表　調査面積に対する遺物出土量

裏を返せば、今のところ、中世城の上限はせいぜい南北朝期という事になる。その意味で、下内野城は南北朝期にまで遡り得る中世城という事で貴重な存在になる。

〔3〕 一方で、16世紀代の染付や17世紀前半の陶器も出土しているところから、下内野城が戦国時代末期にも使用された事が確実である。したがって、下内野城は南北朝と戦国末期の動乱期に使用された城という事になる。ただし、出土遺物が少ない事から、使用期間はいずれも、短いものであった事が予測される。

〔4〕 遺構は、一棟分の掘立柱建物を完掘したが、柱穴の埋土には多量の焼土が混入しており、火災で消失している事が明らかである。

建物そのものは他の中世城に見るように小型で、簡易的な造りであった。この事は、城内では多くの場合、必要に応じて小屋かけ程度の建物が造られたとする一般的な見方を裏付けており、さらに戦さによって完全に焼き払われている事も明らかである。調査者は、この状況から、建物の焼失時期を戦国末期の天草合戦時と見る（隣接のSD01から14世紀後半から15世紀中葉



第24表　出土遺物年代別分類表

の青磁片が出土しているが、1世紀程のずれは伝世品となる)。

〔5〕 城の縄張りの中で特色ある点は、Ⅰ郭の造りである。あれ程の掻き上げ土塁を有しているにもかかわらず、地形そのものは余り手の加わっていない北から南への緩傾斜地で、確たる建物も検出されなかった事は大きな疑問である。下内野城では本丸部分に該当するところだけに不可解な気がした。

さらにⅡ郭とⅢ郭の堀切もさ程、深く掘り込まれておらず、意外であった。もちろんⅡ郭の縁には、当時、土塁が積まれていたわけで、その分堀底からの比高差は増すが、それにしても、浅い掘り込みという感じである。

〔6〕 大橋康二氏(佐賀県立九州陶磁文化館学芸課長)の示唆によれば、近世遺物の出土状況から、江戸時代にも引き続いて城山で生活が営まれていた可能性は極めて高いという。

今回の調査で、これを裏付ける遺構は検出できなかったが、同じ事は天草郡河浦町の下田城(山城)にも見られた。丘城や山城の場合、廃城後、多くは人が住まない状態にあったものと思われる(出土遺物がそのまま江戸時代につながっていく例は少ない)。下内野城や下田城の場合は、数少ない例である。

〔 結 語 〕

下内野城は南北朝期を上限とし戦国末期を下限とする中世城である。しかし連続的ではなく、必要に応じて、それも、それぞれ短い期間の使用であったものと考えられる。

《考察１》五和町に所在する中世城跡

１．御領城（ごりょうじょう）

〔所在地〕 御領馬場（ごりょうばば）の芳証寺（ほうしょうじ）を中心とした周辺一帯

〔定　義〕 文献未記載で、言い伝えと地名により城跡である事がわかる。本文中の城名は、大字名による。

〔地理的環境〕

五和町の東側・中央部の町中にある城で、周囲に家が建て込んでいる。南400mのところに五和町役場、東に御領漁港があり、現在の海岸線までは200m足らずである。すぐ北に馬場川が流れ、川道は西から東へ直線的に延びている。

〔城跡地の様子〕

①芳証寺は標高11.9mの丘陵にある（東側裾部との比高差は９m）。丘陵は舌状形を呈する地形で、上面に広い平坦地がある。東西・南北とも140mの大きさで、鞍部は北側にある。寺の建物は南西の一角を占め、他は墓地や畑地となっている。

②広い意味では、馬場川の左岸区域を形成する丘陵地帯の南端にあたる。しかし、北側の鞍部に大きな谷が食い込んでいるため、見た目には完全に独立丘陵である。ちなみに馬場川は、この鞍部の谷を遮断する事になる。

③丘陵の崖線は東側と北側に顕著である。一方で南側と西側はさ程そうでなく、石段を上れば、即、境内という感じである。

④城跡として地表面観察ができる遺構は残っていない。

〔地　名〕

字名に馬場・堀がある。馬場は城跡全体にかかる地名で、堀はその北西側一帯をいう。しかし、実際のところ、地元で伝える真の場所は、特定された区域である。

①堀

城跡丘陵地の西下を南北に走る道沿いを言う。南限は芳証寺の北西下にある三叉路あたりから、北は東禅寺付近までの長さ100mの範囲である。

東西幅は道を中心に、その両脇沿いに限られる。これらの事により、現在の道筋は、かつて御領城の堀道であったと考える。この場合、堀の呼称範囲はもっと南へ下がってよいような気もする。いかにも中途半端的な終わり方で、この事に関し、堀道は御領城の北側における堀切に関連したものとの見方もできる。そうすれば堀切の南西端は、呼称の南限近くの三叉路付近となり、説明は付く。ちなみに、城跡地の北側鞍部では、馬場川が堀切の役目を兼ねていたと思われ、この川から城跡の南西側を仕切る堀切（水濠）が三叉路方面へ延びていた可能性は充分にある。

②馬場

城跡の北東下を言う。城跡の崖と、東は道、北は馬場川に挟まれた一角である。東西90m、南北の最大幅は40mである。北西側に、この区域の括れ部があり、特にこの箇所を木戸口と言っている。

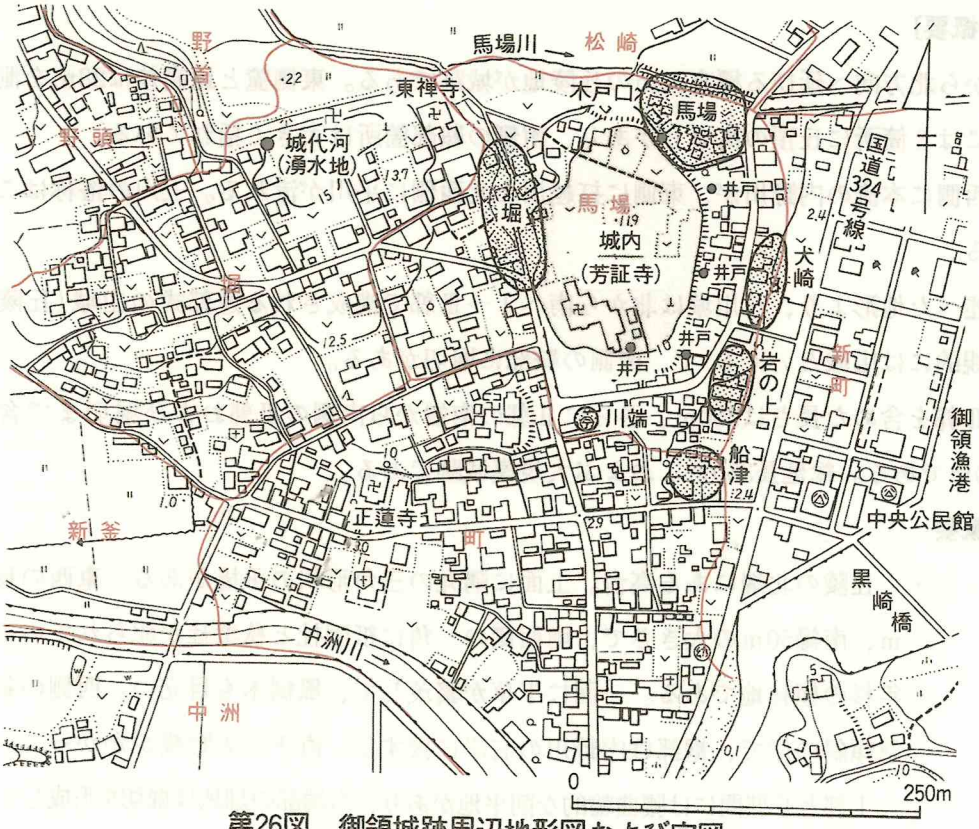
③字名としては残っていないが、芳証寺を含む丘陵地の上面域全体を城内(じょううち)という。さらに寺から北西方向250mのところに城代河(じょうでごう)と呼ばれる湧水池がある。これについては城時代の井戸と伝えられる。その他、芳証寺の境内に1箇所、地跡・丘陵地の直下に5箇所の古井戸がある。

その他、城跡の東下に北から南へ、犬崎・岩の上・船津さらに南下に川端の地名が残っている。これらは城跡関連地名ではないが、参考までに図中に記した。

〔小　結〕

①御領城は町中の城であるため、地表面観察ができる遺構は何も残っていない。しかし、城跡中心地の低丘陵や地名などから、館を中心とした総構えの城であった事が伺える。さらに当時は、海岸線が城のすぐ近くまで迫っていたと思われ、港との繋がりが深い城であった事もわかる。

②城跡地に芳証寺が建立されている点も興味深い。天草では、栖本氏の本城跡にも館跡と思われるところに専称軒の寺がある。他でもこの事例は数多く、近世初頭における城跡地の利用方法として注目される。



第26図　御領城跡周辺地形図および字図

＊芳証寺

〔寺歴〕 曹洞宗の寺。釈迦如来を本尊とする。天草・島原の乱後、代官の鈴木重成が政策の一環として、仏教再興のため、城跡地に建立した。正保３年(1646)に、出羽国(秋田)から益峯快学が入寺して開山された。境内に薬師三尊を安置する薬師堂がある。

〔文献〕 「寺屋敷東西弐拾四間、南北三拾壱間、此外薬師堂屋敷東西拾弐間、同所廻り畑弐反六畝支配之事」（『芳証寺文書』）

〔伝承〕 元和元年(1615)の大阪夏の陣で、豊臣方に加わって敗れた細川興秋(忠興の次男)が、御領村で余生を送っている。その時、興秋の手元にあったのが当寺の薬師三尊と伝えられる。ちなみに御領組の大庄屋を勤めた長岡家の祖は興秋の子・興季という。

〔その他〕 禅僧の修業場であった衆寮堂は、明治８年(1875)から６年間、御領小学校として使用された。この建物は今も境内に残っており、町史跡として一般公開されている。

２．三川城

〔所在地〕 上野原地区の下野原と中野原に連なる丘陵地。

〔定　義〕 文献未記載。城名は地元の呼称による。

〔地理的環境〕

五和町の南側域にあたる上野原地区は、内野川の上流域で丘陵地の中にある。北北西２㎞に下内野城跡、南南西1.4㎞に城木場城跡がある。いずれも内野川流域に所在する中世城である。

〔城跡地の概要〕

①南方向から北方向へ延びる標高50ｍの丘陵地が城跡である。東側麓と比高差は28ｍを測る。

②尾根線には３箇所に丘頂の高まりがあり、南側の鞍部箇所は大きく括れている。

③丘陵の西側に本流の内野川が、東側に打越川と北西側に平川が流れる。三川の俗称はここからきている。

④②項で述べた地形より、三川城は北から南へⅠ～Ⅲ郭で構成される連郭式の山城(丘陵地であるが景観的には山城といえる)で、南側の鞍部に堀切がある。

⑤Ⅰ郭とⅡ郭を含めた長さは350ｍ、さらにⅡ郭の南端から南側のⅢ郭および堀切まで含めた長さは150ｍである。総延長350ｍにおよぶ大規模城跡である。

⑥各郭の概要

＊Ⅰ郭・・・・ 丘陵の北端にある高台。上面に隅丸の三角形状の平場がある。東西の長さ60ｍ、南縁50ｍの大きさで、南西側の一角に祇園社と秋葉社が祀られている。若年杉の植林地である。一面に下草が繁茂して、風倒木も目立つ。西側の斜面は急傾斜の崖で、裾部は内野川の右岸に接する。直下に大野橋がかかっている。

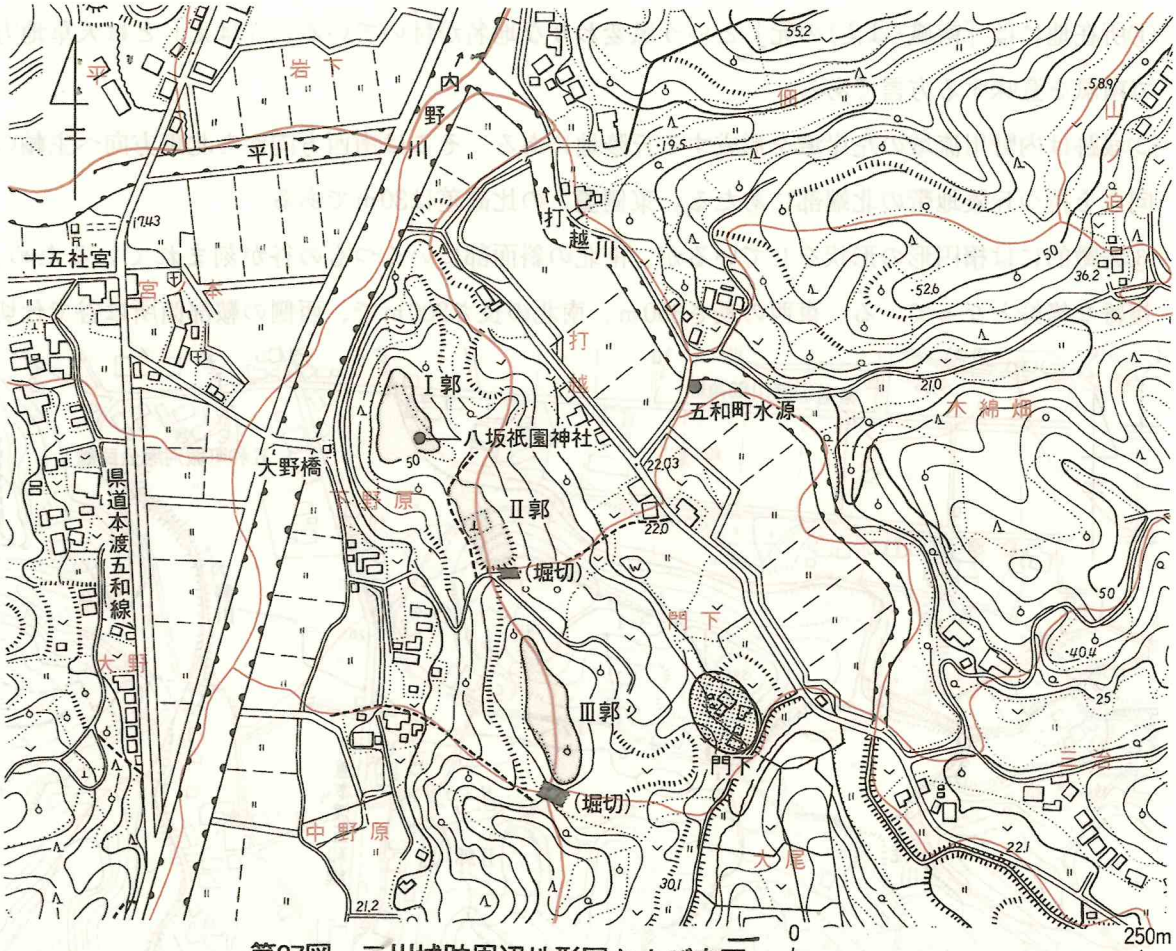
Ⅰ郭とⅡ郭間には腰曲輪的な削平地があり、南端部の畑地は堀切を形成している。

＊Ⅱ郭・・・・　Ⅰ郭とⅢ郭間の尾根筋で両郭より一段低いところにある。帯状形の平坦地で長軸70m、短軸30mを測る。墓地と荒地からなっている。南側裾部に堀切の残存部がある(道路工事により西側大半が削り取られている)。

＊Ⅲ郭・・・・　Ⅰ郭の東下に五和町の水源があるため、この郭に水源施設が造られている。一帯は雑草の繁げる荒れ地で、著しく城跡地としての景観を損ねている。長軸110m、短軸30mで、南側直下に堀切がある。

〔伝　承〕

三川城跡の北東側裾部に居を構える岩崎政高氏宅に言い伝えが残っている。それによれば、以前は松下姓を名乗っていたという。この姓は三川城主と伝えられる松平姓につながるものという。(岩崎氏談)



第27図　三川城跡周辺地形図および字図

3．城木場城

〔所在地〕　城木場の南風ノ元にある丘陵地。城の尾という小名が残る。

〔定　義〕

①本渡市の円覚寺の由緒書に「城木場城」関連記事があり、城主として、硴久大膳太夫(志岐氏の一族)の名が挙げられている。ちなみに、この由緒書の成立は江戸時代と伝えられる。

②「慶安四年の差出」に下内野城と伴に城木場城の記載がある。本文中の城名はこれによる。

〔地理的環境〕

①五和町の最南域にある城木場地区は、内野川の最上流域にあり、周囲は丘陵地帯である。城跡の東側に内野川流域の低地が開けている。川はこの低地の東端を流れており、城跡とは100ｍの距離がある。

②城跡の北側は小丘陵(標高50ｍクラス)一つを挟んで、荒川(城木場地区で内野川に合流する)が流れている。城跡と川の距離は200ｍ程である。この川の流域には南北幅200ｍに及ぶ低地の広がりがある。

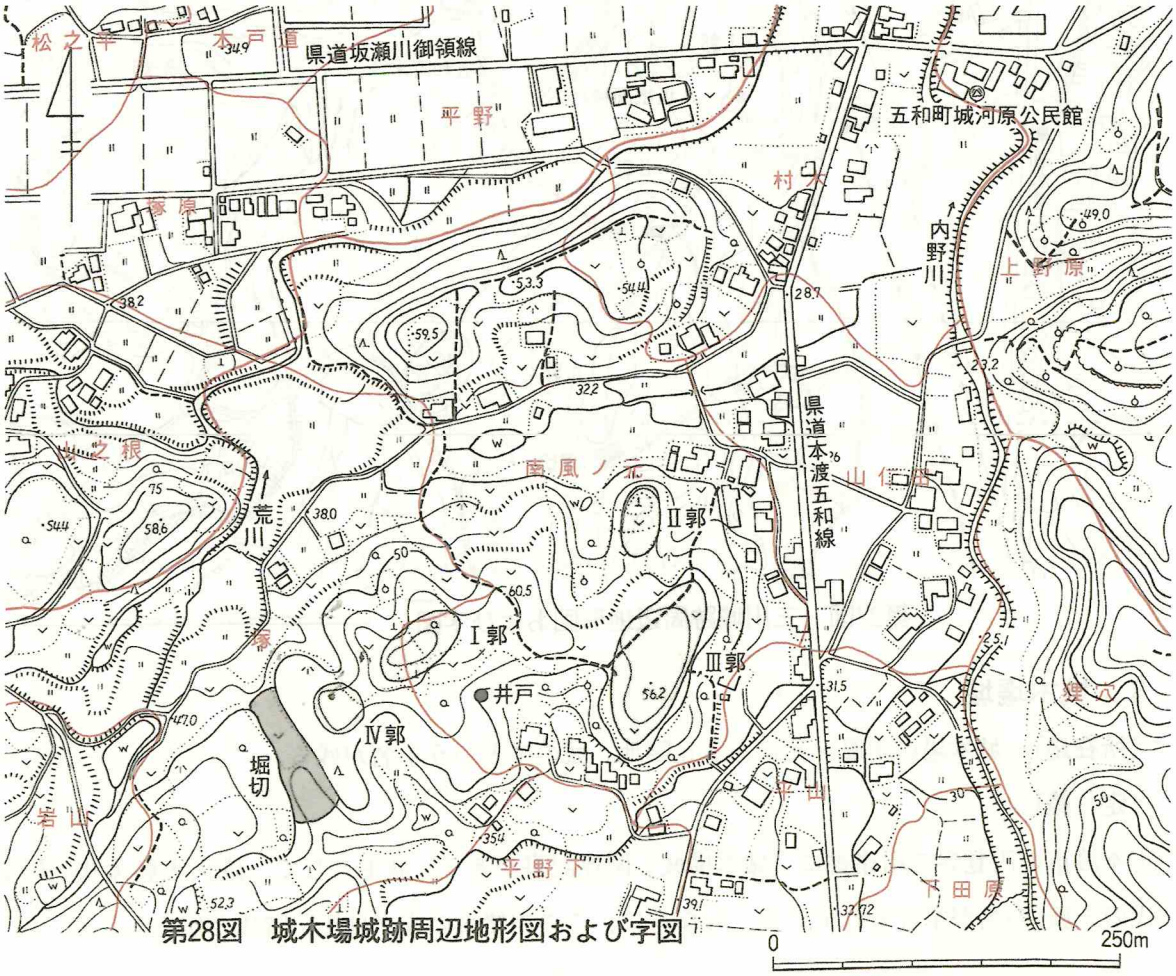
③城跡の北北東1.4kmに三川城がある。

〔城跡地の様子〕

①所在地には「南風(はえ)の元」という風変わりな地名が付いている。「はえ」とは天草地方で南風を意味する方言である。

②城跡は内野川流域の左岸域を形成する丘陵地にある。そこは南西方向から北東方向へ主軸の向きを持つ丘陵地帯の北端部にあたる。東側麓との比高差は30ｍである。

③俯瞰的には楕円形の形状をしているが、南北の斜面部にいくつもの谷が刻まれているため、複雑な格好となっている。東西の長さ350ｍ、南北の長さ200ｍで、西側の鞍部箇所は谷で仕切



第28図　城木場城跡周辺地形図および字図

られている。

④丘頂の地形も複雑で、城跡の地割りを考える上で大きな障害となっている。実際のところ「ここが城跡である」との認識がなければ、ほとんど城跡地と受け取れないような状況下にある。

⑤地形的には、丘頂の主軸ラインに４つの地割りがある。

＊Ⅰ郭・・・・　丘頂の西側にあり、標高60ｍクラスの畑地である。

＊Ⅱ郭・・・・　丘頂の北東端にあり、標高50ｍクラスの墓地である。江戸時代にこの地区を治めた歴代役座の石塔が並んでいる。城跡地としての面影は無い。

＊Ⅲ郭・・・・　丘頂の南東端にあり、最高所は標高56.2ｍを測る。荒れ地で、この郭に限り地表面は自然地形である。丸味を帯びており、平場という感じはしない。

＊Ⅳ郭・・・・　Ⅰ郭と堀切間の丘頂主軸ラインにある。削平地で、Ⅰ郭の腰曲輪的な平場であろう。

＊堀切・・・・　丘陵地の西側・鞍部箇所を仕切る谷部にあり、谷部の主軸線を断ち切っている。自然地形を利用した堀切である。

⑥城跡地の南側斜面は、中央部が方形状に大きく抉れた窪地になっている。ここは現在、民家の敷地で、東西の長さ70ｍ、南北幅50ｍを測る。開口部は南側に限られており、北西隅に湧水地がある。現況からしても、この一角が城時代の居住区であった事は容易に察しが付く。

⑦城跡周辺の集落は、北東側と南東側にある。

⑧かつて城跡から遺物が出土したという話しが伝えられる。

４．鬼池城

〔所在地〕鬼池・城一帯

〔定　義〕文献未記載。字名と伝承により城跡である事がわかる。本文では地名を城名とした。

〔地理的環境〕

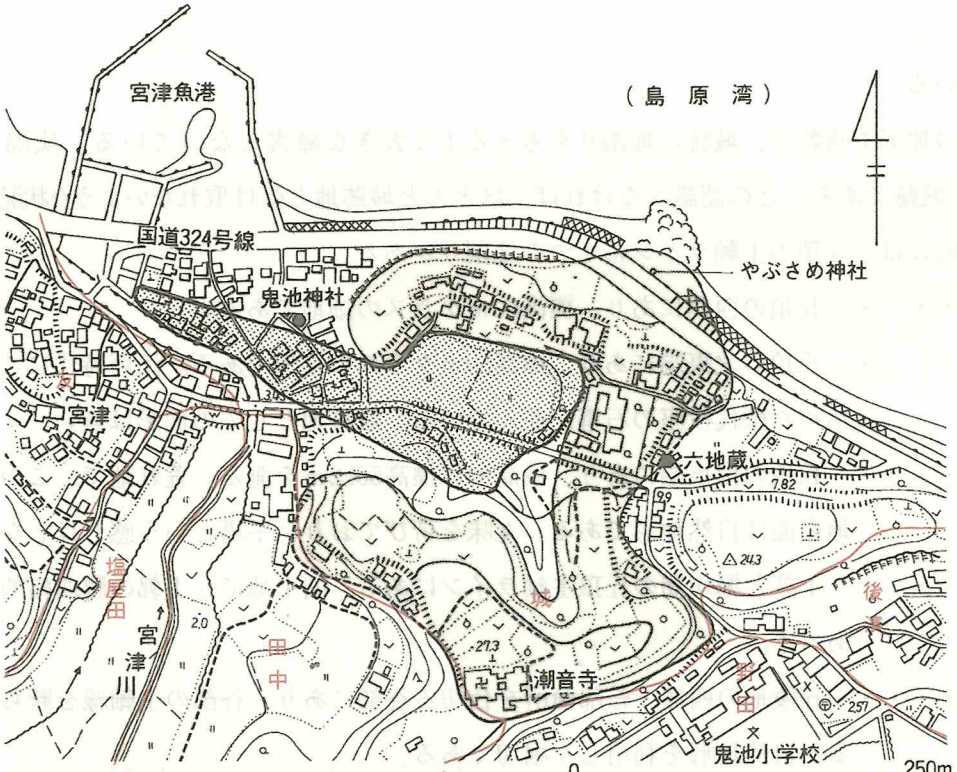
①鬼池地区の北西域に「城」という字名を残す広い一帯がある。俯瞰的な形状は菱形で、東西の長さ680ｍ、南北幅360ｍを測る。ちなみに西端部は宮津地区に食い込んでいる。北縁には海岸沿いに国道324号線が走る。

②五和町の北端にあたり、南東側に鬼池港がある。

〔城跡地の様子〕

①地元で言う真の「城」とは国道と旧道に挟まれた区域である。比高差15ｍ前後の丘陵地で、宮津地区寄りにある。俯瞰的な形状は長方形で、東西の長さ250ｍ、南北の最大幅は170ｍを測る。但し、家が建ち並んでいることもあって、この区域内で、地表面の観察のできる城跡遺構は残っていない。

②周辺地形を見ると、中央箇所はかつて入り江であったと思える様な低地で、これを三方から



第29図　鬼池城跡周辺地形図および字図

馬蹄形の丘陵が大きく取り囲む格好となっている。西側が開口部である。

③低地の俯瞰的な形状は長方形で、西端部ですぼまる。東西の長さ140m、南北の最大幅は60mで、ここだけが水田地となっている。

④馬蹄形の丘陵のうち、旧道から北側区域が「城」の高台である。東側部分で東西幅90mを測る。この高台は、南側へ末端部が延びているので、この箇所につき旧道が堀切の役目を果たすことになる。旧道に面した一角には、さらに小さな馬蹄形状の地形箇所が複合しており、興味深い。ここには、旧道沿いに石垣が残っている。但し、これが城時代のものか否かの判断はできない。

⑤高台の北側は幅70mで、北側裾部を国道が東西に貫いている。北端には、城との関連が伺える「やぶさめ神社」がある。一方、西側部分については、東西幅50mを測り、30m先に鬼池神社がある。

⑥広い意味で、この地域は東に鬼池川、西に宮津川に挟まれた所にある。これらの川が形成する低地間に丘陵地が北へ広がっている。

⑦丘陵地帯は、南域で70～130m前後、北域では50m前後の標高を示す。そして海岸線より500m手前あたりで、急速に高さを減じて標高30～20mの低丘陵地に変化している。これが、そのままの状態で海岸線に至り、その最北端に城跡地がある。

⑧城跡の東には鬼池、西には宮津の町が開けている。城の性格は、詰めの城の色彩が濃く、これらの町が麓集落であったと考える。

5．小浦（城館参考地）

①町立御領小学校大島分校の南側に「小浦」という字名を残す丘陵地があり、下記の理由から今回、踏査を行なった。

②小浦の字名が残る丘陵地は標高25ｍで、北東方向600ｍに大島漁港がある。俯瞰的な形状は帯状形で、南西側の鞍部側から北東方向に尾根筋が延びている。

③尾根筋は風化した岩盤の露呈した馬の背の様な地形をしており、鞍部に括れ部はない。北東端から450ｍで町道小浦２号線と交わっている。斜面部についても自然地形である。

④およそ城跡地とは思えない状況にあるが、鶴田八洲成著『天草建設史』に「この丘陵一帯は、小浦荘の推定地に合致する」との説がある（山本 繁 町史編纂委員の示唆）。ちなみに前述の御領小学校大島分校一帯が、地元で言う真の「小浦」である。

⑤地形的に見て、城跡は無いと見る。館跡については一考の余地があろう。

6．梅城地区

①一の谷地区に「梅城」という字名を残す、標高70ｍクラスの丘陵地がある。東側に鞍部を持ち、西北西側へ下る地形をしているが、地元に城跡としての認識は全く無い。山も自然地形で、城跡らしい遺構は残っていない。

②「梅城」箇所から西へ約１kmのところに下内野城跡がある。

③このように字名に「城」を有する所でも地表面観察では城跡と認定し難い例は他にある。何ら手を加える事なく自然地形をそのまま城（砦などに）として利用しただけのものなのであろうか。興味深い事例である（同例として熊本市北部町万楽寺に荒平城跡（比定地）がある）。

④町内には他に「鬼ノ城」という字名を残す丘陵地帯（鬼の城公園）がある。県道坂瀬川・御領線と県道五和中央線が交差する所から北側の広い範囲をいう。梅城とは、明らかに性格が異なっている。ここは中世城と無関係とみる。

《考察２》　慶安四年の「差出」について

第Ⅰ章第３節で取り上げた『肥後国 江戸江差上候御帳之扣』（通称：差出）は、注目すべき資料である。

江戸幕府は各藩の実態調査の一法として、４回（慶安・正保・元禄・天保年間）ほど、郷帳と城絵図、国絵図の作成・提出を命じている。この中で慶安四年分の差出で、古城の実態を知ることができる。正保図の説明書には61の中世城が収載されている。山城・平山城・平城の分類があり、城より主要集落までの距離も記している。

正保年間は17世紀半ばの事で、中世城に関する近世最初の文献である。藩の記録であるから一級資料といってよい。

前述のように、県内の中世城数はおよそ600城と推定されているので、その１割が慶安四年（1651）の差出に記載されていることになる。しかし、実に９割もの城が未掲載で、この数の少なさは特異である。この事については、近世初頭の直前まで存在した城が主な対象となっている可能性もあるし、元和元年（1615）の一国一城令で廃却された城の一部とも考えられる。しかし、それにしても余りに数が少なく疑問である。

藩は何を基準に61城を選出したのか不明である。さらにまた、これ程、限定された城の中に下内野城が含まれる事に興味がわく。ちなみに天草郡は当時、細川在番時代で15城の記載があり、この下内野城と城木場城の城名を見る。前にも触れたが、下内野城に関連する記録は、この差出のみで、文献的にはまったく取りに足らぬ城である。これらの不可解な事柄の解明は、今後の大きな研究課題である。

地区	城名	種別	規模（間）	備考
玉名	関古城	山城	960	該当する城跡が確定できない。 玉名郡南関町の蟲嶽城の可能性がある。
	関古城	平山城	700	該当する城跡が確定できない。 玉名郡南関町の鷹ノ原城の可能性もある。
山鹿	城村古城	平山城	1020	城村城（山鹿市城）。大規模な丘城。 天正15年（1587）の肥後国衆一揆では、この城が主な舞台となり、 城主一族と地域住民が立て篭もった。
山本	下内田古城	平山城	688	日渡城（鹿本郡菊鹿町下内田・日渡）。大規模な丘城。 焼き米が出土する。
	上永野古城	山城	60	該当する城跡が確定できない。両城は規模が小さい事から、山頂
	上永野古城	山城	48	のみに遺構が残る。
	上内田古城	山城	66	該当する城跡が確定できない。 鹿本郡菊鹿町上内田の鵠巣城の可能性もある。
	下野古城	山城	46	霜野城（鹿本郡鹿央町霜野）。山城。 『国郡一統志』は、築城を永正10年（1513）、落城を天正15年（1587）とする。
	岩野古城	平山城	45	岩野嶽道祖城（鹿本郡植木町岩野・城山）。 小規模な山城で、典型的な総構えの城である。

第25表　慶安四年「差出」に見える中世城跡一覧①

地区	城名	種別	規模(間)	備考
菊池	隅府古城	山城	276	菊池城(菊池市隅府・城山)。菊池氏の本城。 山城で現在は菊池神社。隅府町(麓集落)の地割りは、字図で見る限り近世城下町そのものである。
合志	上庄城	平城	220	竹迫城(菊池郡合志町上庄・城山)。大規模な丘城。 城を中心に上庄地区の全域を大環濠が取り囲むとの伝説がある。 江戸末期に、この事を描いた城絵図がある。公園化されている。
阿蘇	小国下城古城	平山城	1360	下城(阿蘇郡小国町下城)。大規模な丘城。
	小国小里古城	山城	1170	該当する城が確定できない。
飽託	上代古城	山城	486	上代城(熊本市上代町城山)。山城。水道施設がある。
宇土	宇土古城	平山城	698	宇土古城(西岡台)(宇土市神馬町)。大規模な丘城。国指定史跡。
	矢崎古城	平山城	350	矢崎城(宇土郡三角町郡浦・矢崎)。大規模な海城。
	網田古城	平山城	336	田平城(宇土市網田町城)。大規模な丘城。
益城	豊内古城	山城	500	陣内館(上益城郡甲佐町豊内・陣ノ内)。 阿蘇氏の前線基地の一つ。丘陵に築かれた県内で最大級の館跡。
	下陳古城	山城	430	津森城(上益城郡益城町下陳)。小規模な山城。 一の天守・二の天守の地名が残る。
	木山古城	平山城	248	木山城(上益城郡益城町寺迫・城の本)。 木山氏の居城(丘城)。公園化されている。
	田代古城	山城	350	戸上城(上益城郡御船町田代・戸上)か南田代城(上益城郡御船町田代・尾園)のいずれかであろう。両城とも丘城。
	御船古城	平山城	254	御船城(上益城郡御船町御船・下囲)。 甲斐宗運の居城(山城)。麓に上囲の地名が残る。
	愛藤寺古城	山城	2000	愛藤寺跡(上益城郡矢部町白藤)。岩尾城と伴に阿蘇大宮司の居城。 大規模な丘城。「差出」の中では最大規模を誇る。 本丸・二の丸・三の丸・城門の地名が残る。
	岩尾古城	平山城	760	岩尾城(上益城郡矢部町城原・本丸)。山城。 本丸・二の丸・三の丸の地名が残る。
	峙原古城	山城	243	傍島馬入城(下益城郡砥用町涌井)。小規模な山城。
	堅志田古城	山城	650	堅志田城(下益城郡中央町中郡・城山)。 豊内城と伴に阿蘇氏の前線基地の一つ。大規模山城。 尾根に計15本の堀切を刻む。発掘調査により16世紀末の城と判明。 麓集落に栫の地名が残る。
	小熊町古城	山城	785	該当する城跡が確定できない。
	豊福古城	平山城	600	豊福城(下益城郡松橋町豊福下城)。大規模な丘城。 交通の要所にある。この城をめぐり、相良・阿蘇・名和の三氏が争奪を繰り返した。
	木原古城	山城	1144	木原城(下益城郡富合町木原・城山)。 鎮西八郎為朝伝説が残る。 名和氏の居城。木原山の山中に築かれた山城。
	隈庄古城	平山城	470	隈庄城(下益城郡城南町隈庄)。甲斐氏の居城。 大規模な丘城。本丸・二の丸・三の丸があったと伝わる。
八代	高塚古城	平山城	166	高塚城(八代郡竜北町高塚)。丘城。 周辺に東新城・西新城・高城など、関連の砦群が残る。
	南種山古城	山城	508	陣内城(八代郡東陽村南・陣内)。小規模な山城。 城段という高台がある。総構え的な城。
	岡古城	平城	136	岡城(八代市岡町古城)。先に名和氏、後に相良氏系の城となった。 平城。国道3号線によって断ち切られている。
	興善寺古城	山城	240	関城(八代市興善寺町関)。山城。岡城と関連がある。 前の城と後の城により構成される。
	古麓古城	山城	420	古麓城(八代市古麓町)。大規模な山城。 城歴は先の名和氏と後の相良氏に大別される。いずれも両氏の本城として利用された。 城域内の峰に飯盛城・丸山城・鞍掛城・勝尾城・八町嶽城が築かれた。 本体部分にも新城や鷹峰城の増設箇所がある。

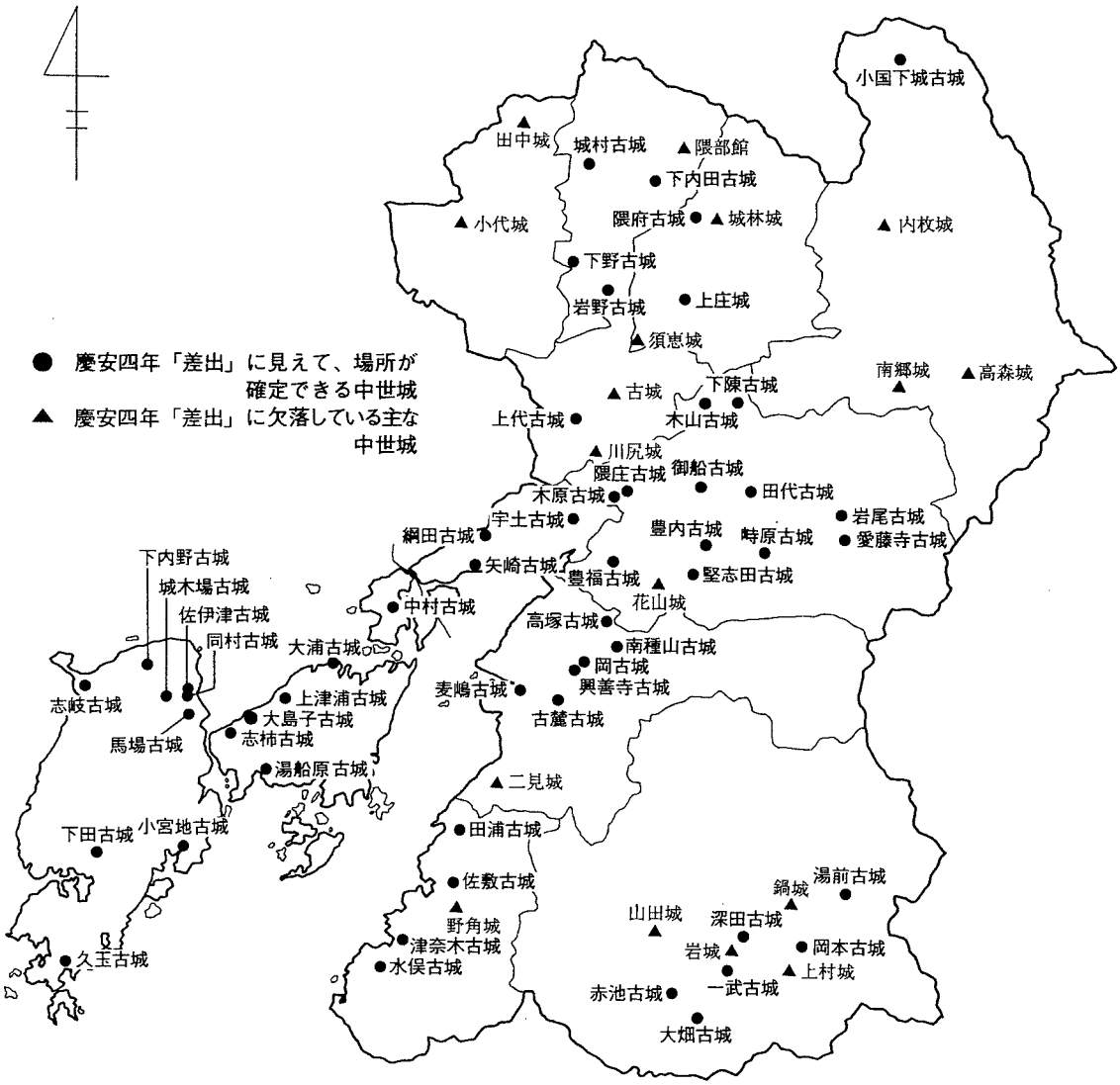
第26表　慶安四年「差出」に見える中世城跡一覧②

地区	城名	種別	規模(間)	備考
八代	麦嶋古城	平城	432	麦嶋城(八代市古城町古城)。 天正16年(1588)に小西行長が築城。 元和5年(1619)の大地震で崩壊し、廃城となる。 天守・内堀・外堀の地名が残る。石垣も築かれていた。 この城は近世城の部類に入る。
芦北	田浦古城	山城	450	田浦城(芦北郡田浦町田浦・古城)。山城。 鶴の城と亀の城から構成される。柑橘園となっている。
	佐敷古城	山城	155	佐敷城(芦北郡芦北町佐敷・下町)。山城。 慶長5年(1600)に島津勢に攻められている。
	津奈木古城	山城	600	津奈木城(芦北郡津奈木町岩城・大手)。山城。 連山に郭が築かれている。搦手と大手の地名が残る。
	水俣古城	平山城	108	水俣城(水俣市陣内・古城)。丘城。 古城と高城から構成されている。石垣が築かれていたという。 廃城期は慶長17年(1612)と伝えられる。
球磨	赤池古城	山城	本丸67 二之丸148	赤池古城(人吉市赤池原町城山)。丘城。 村全体が城域内で、総構えの城。
	大畑古城	山城	202	大畑城(人吉市大畑麓町城山)。丘城。 球磨から日向および薩摩に入る交通の要地に城がある。
	一武古城	山城	216	土屋城(球磨郡錦町一武・城)。丘城。 蔵番人の屋敷跡・蔵屋敷跡・寺跡が伝えられる。
	岡本古城	山城	53	岡本城(球磨郡岡原村岡本)。山城。 殿谷・陣内・下陣内・城崎・城下の地名が残る。
	湯前古城	山城	330	湯前城(球磨郡湯前町下城)。山城。大規模な堀切がある。 下城・水ノ手・古城・上城の地名が残る。
	深田古城	山城	120	深田城(球磨郡深田村西・城)。丘城。 古屋敷・仮屋敷・前屋敷の地名が残る。
天草	志岐古城	山城	900	志岐城(天草郡苓北町志岐)。志岐氏の居城。山城。 発掘調査により、16世紀末の城と判明。 本丸・中之城・空堀・出居丸・二之丸・馬責場で構成されていたという。
	下田古城	山城	270	谷を隔てて相対する下田城(天草郡河浦町河浦・城山)と河内浦城(天草郡河浦町河浦・湯立免)とから構成される。いずれも山城。 天草氏の居城。発掘調査により両城とも16世紀末の城と判明。
	久玉古城	山城	300	久玉城(牛深市久玉町吉辺川)。海城。県指定史跡。 久玉氏の居城。近世城に残るような石垣が残る。
	小宮地古城	山城	800	小宮地城(天草郡新和町小宮地・城ノ平)。山城。
	湯船原古城	山城	420	湯船原城(天草郡栖本町湯船原・本丸)。山城。栖本氏の居城。 本体は城之尾という。江戸の寺沢領時代には郡台所となった。
	中村古城	平山城	420	中村城(天草郡大矢野町中・城本)。丘城。 大矢野氏の居城で大矢野城ともいう。大手口の地名が残る。 町立大矢野中学校の敷地となっている。
	大浦古城	山城	270	大浦城(天草郡有明町大浦)。山城。野積みの石垣が残る。
	上津浦古城	山城	390	上津浦城(天草郡有明町上津浦・城が嶋)。上津浦氏の居城。 並列する二つの小山で構成される。堀の地名も残る。
	大島子古城	山城	350	大嶋子城(天草郡有明町大島子・古城)。城平・馬場の地名が残る。 山川兵藤太郎(志岐麟泉の城代)の居城と伝わる。
	志柿古城	平山城	250	志柿城(本渡市志柿町高江)。丘城。 『八代日記』の永禄8年(1565)7月9日の条に城の関連記事がある。「天草・大矢野・上津浦三人ニテ志柿ニ動」 江川舟江に城山という丘陵がある。
	馬場古城	山城	420	本渡城(本渡市本渡町本戸馬場)。天草で最大の山城。 天草氏の居城。連山に本丸・一の丸・二の丸・山丸の地名が残る。 構造的に八代の古麓城に似通る。 一帯は城山公園となっている。

第27表　慶安四年「差出」に見える中世城跡一覧③

地 区	城 名	種別	規模(間)	備　　考
天 草	佐伊津古城	山城	234	才津城(本渡市佐伊津町城廻)。丘城・殿様の井戸が残る。 大部分が市営住宅となっている。
	同村古城	平山城	300	風呂ノ迫城(本渡市佐伊津町風呂ノ迫)の可能性がある。 本体は高城。火立ノ尾の地名も残る。
	下内野古城	山城	360	下内野城(天草郡五和町下内野)。丘城。 土塁と堀切が残る。発掘調査により16世紀末の城と判明。
	城木場古城	山城	260	城木場城(天草郡五和町城木場)。城ノ尾という丘陵が城跡。

第28表　慶安四年「差出」に見える中世城跡一覧④



第30図　慶安四年の「差出」に見える中世城跡位置図

(注)「差出」に欠落している主要城跡

地区	城名	所在地	備考
玉名	田中城	玉名郡三加和町和仁	大規模な丘城。丘頂下を大空堀が巡る。県指定史跡。
	小代城	荒尾市府本	県下最大の山城。標高500mクラスの高山に城が築かれている。長さ500mの尾根筋に遺構が残る。本丸に石垣あり。
阿蘇	内牧城	阿蘇郡阿蘇町内牧	阿蘇カルデラの平野部に築かれた平城。本丸・二の丸・三の丸の地名が残る。中世末から近世初頭にまたがる城。石垣あり。
	南郷城	阿蘇郡久木野村久石	阿蘇氏(南郷上宮司)の拠点に築かれた山城。麓には館が築かれていた。
	高森城	阿蘇郡高森町高森・城山	城山自体に遺構はないが、囲と称される二つの谷間がある。島津勢から攻撃を受けた天正14年(1586)の高森城合戦の記録が残る。
菊池	城林城	菊池市木庭・古城	(伝)菊池十八城の中で最大の山城。古城・陣内・外園の地名が残る。
	須屋城	菊池郡西合志町須屋	低丘陵に築かれた平城。地元では道を境に陣の山・下屋敷と呼び分けている。町化されているが、下屋敷全体が城である。
鹿本	隈部館	鹿本郡菊鹿町上永野	山中に礎石建物・庭園・桝型の入口が残り、まさに、近世城そのものである。県内で頂点を極める中世城である。県指定史跡。
熊飽	古城	熊本市古城町	後に熊本城の二の丸に組み入れられた中世城である。
	川尻城	熊本市川尻町	平城で、城跡に外城の地名が残る。河尻氏の居城である。加勢川を利用した水濠があったという。
益城	花山城	下益城郡豊野村上郷	島津勢が阿蘇氏を攻めるときに築城した付城。県内で唯一、築城期と廃城期のわかる中世城である。
八代	二見城	八代市二見町園田城	馬場と園田城の地名が残る。八代地区で古麓城に次ぐ規模の大きな丘城である。
芦北	野角城	芦北郡芦北町宮崎	山城で、鞍部に県下最大級の大規模な二重の堀切が残る。総延長は160mにもおよぶ。
球磨	山田城	球磨郡山江村山田・城山	南北朝期の大規模山城。史実と発掘調査の結果が一致。
	上村城	球磨郡上村麓	山城。城を起点に北へ下る傾斜地に村がある。道を軸に整然とした階段状地形が残り、中世城下町を今に伝えている。
	岩城	球磨郡錦町木上・岩城	県内で文献的に押さえられる最古の中世城である。平安末期の高野山文書に城名がてでくる。
	鍋城	球磨郡多良木町黒肥地	上相良氏の本拠地。県下最大級の丘城。

第29表　「差出」に欠落の主要城跡一覧

《付論》　下内野城（小峰城）

鶴田倉造

1．呼　称

下内野城は小峰地区の西隣りにあるため、小峰城とも呼ばれている。下内野というのは城地の大字名(旧幕時代の村名)であり、小峰というのは城地の中の小字名である。いずれにせよ本城は中世の関係文献を欠く。

2．歴史的環境

本城域は、中世において志岐氏の領域であった。志岐氏は初期に藤原を称しており、建暦二年(1212)八月二十二日付、関東下文案(「志岐文書」)によれば、七年前の元久二年(1205)七月十九日付下文の通り、佐伊津澤張・鬼池・蒲牟田・大浦・須志浦・志木浦の六ケ浦の地頭に補されている。その内、澤張・蒲牟田の両地は現在どこに相当するのか不明であるが、佐伊津は本渡市佐伊津町であり、大浦・須志浦は天草郡有明町の大浦および須子に比定されようし、鬼池は五和町鬼池、志木浦は苓北町袋浦の事であろう。

してみると、志岐氏は、有明海・早崎海峡に面した天草上下両島の北部一帯を領していたことになる。その内、大浦・須子浦は、のちに上津浦氏の領地になったと考えられるが、他の浦々は十六世紀にいたるまで、志岐氏の領地であり続けたのである。

『1596年度イエズス会年報』によれば「志岐氏の領内には十四ケ村があり、そこに十四の教会があった云々」とあるが、その中に二江村の記事もあり、また、他の史料に佐伊津村も志岐領であった事を表明する史料がある。これらの事から、志岐領の十四ケ村というのは、御領組・井手組・志岐組の村々であろうと考えられる。

してみると、下内野城・三川城・城木場城・鬼池城・御領城・佐伊津金浜城・佐伊津在郷城などはすべて志岐氏の支城であった可能性が高い。その内、志岐城・下内野城・三川城・城木場城・佐伊津在郷城は島の内陸部にあるのに対し、鬼池城・御領城・佐伊津金浜城は海岸沿いの城である。

3．周辺の地名と遺物

城関連の地名としては、城地の丘陵を「城山」と言い、東麓の登城口に比定される付近を「木戸畑」と呼んでいる。富岡往還をこえて、東側には神社の台地がある。付近一帯には多数の屋敷神の石祠があり、「屋敷」と呼ばれているところもある。さらに城地から600m程北の円教寺には五輪塔の残欠(凝灰岩製の水輪)がある。また、城地の南約500m先には同じく凝灰岩切石を積み重ねた「殿の墓」と呼ばれるものがある。さらにそれから300m程南に「的場」と呼ばれるところもある。

【参考文献】

＊天正十七年(1589)『天草合戦資料』(小西行長と加藤清正が天草を攻めた時の合戦)

急度奉レ致二言上一候、去廿三日之合戰、得二大利一申候、先日御註進申上候、其以後敵少々罷出候ヲ、主計頭申談討果申候、首數多討取申候事、

一先書如二申上候一、志岐居城二丸迄引崩、城内之者一人モ抜不レ申樣ニ、柵ヲ結取巻有レ之ニ因テ、城内致二迷惑一、種々樣々懇望仕、爲二加勢一天草甥ニ人數三萬餘相添、本丸ニ相篭候ヲ、爲二志岐討果一、忠節ニ仕余之儀懇望仕候間、扶申儀者京都へ申上可レ得二上意一之由申候テ、先天草ノ者モ今日八日巳刻不レ殘二一人一討果申候、當城之儀者不レ及二申上一、葉城二三ケ所御座候ヲモ急度請取可レ申候、度々ノ合戰ニ、天草役ニ立申程ノ者ヲハ、大形打果申候間、當島之儀者無二殘所一申付、頓テ越年ニ罷上リ可二申上一候事、

一主計頭自身被二罷渡一候事、御國ヲ明申、兩人ナカヲ罷立候儀不レ得二御諚一、如何可レ被二思召一候哉ト、種々相留候得共、去廿八日到二此表一被二罷渡一候間、不レ及二是非一諸事申談、九州置目御座候間、越度無二御座一候樣ニ申付候事、

一五島・平戸之唐人八幡仕候由、被レ成二下御朱印一候、昨日致二頂戴一候、即平戸・五島是ニ在陣仕候間、上意之旨申聞、當春大唐へ商賣ニ罷出候唐人其外何モ相留改申候、不レ殘召連可二罷上一候事、

一從二高麗一對馬守飛客差越申候、高麗人出船仕儀シカト御請申之由申越候、雖レ然遠國ニテ御座候故、年内彼國往来モ難レ成候間、正月中ニ召連可二罷渡一由申し候テ、對馬守・高麗ニソレマテニ逗留仕候、對馬守ニ相添高麗へ遣申候、拙者使島井宗室、今明日中ニ可二罷歸一候間、是又召連罷登、往國之樣體可二申上一候、兎角日本江罷渡候樣ニ申之由慥申候間、先御註進申上事候、右之趣宜御披露奉レ願候、恐惶謹言

(天正十七年) 十一月八日　　小西摂津守行長

逆上　淺野彈正少弼殿

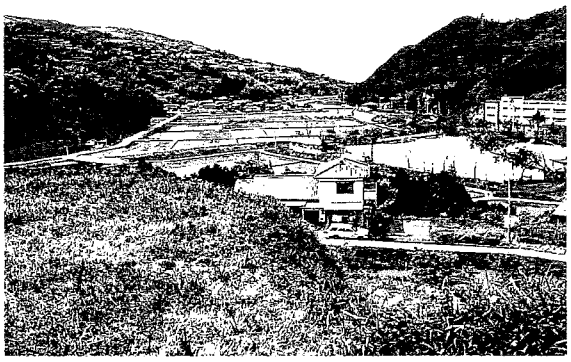
①葉城は「端城」の意味を示す。志岐城を攻めた時、周辺の城も攻め落としたという内容の記事である。

②下内野城は文献未記載の城であり、これまで、内容等について全く不明であったが、今回の調査で天草合戦時における志岐城周辺の端城の可能性が高まった。

写　真　図　版

図版１　下内野城跡遠景（北東方向より）

図版２　下内野城跡遠景（西方向より）
手前は内野川



図版３　下内野城跡より北方向（海岸）を望む

図版４　航空写真
（手前よりⅢ郭→Ⅰ郭）

図版5　Ⅰ郭　土塁①

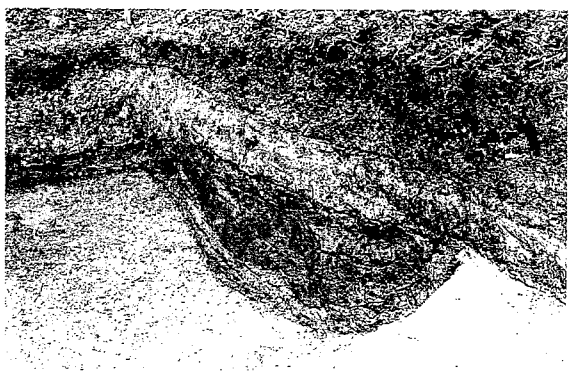
図版6　Ⅰ郭　1区画の金比羅神社

図版7　Ⅰ郭　2区画

図版8　斜面部　b郭③　調査風景

図版9　北方向よりⅣ郭を望む

図版10　b郭①　残壕（左：T16、右：T15）



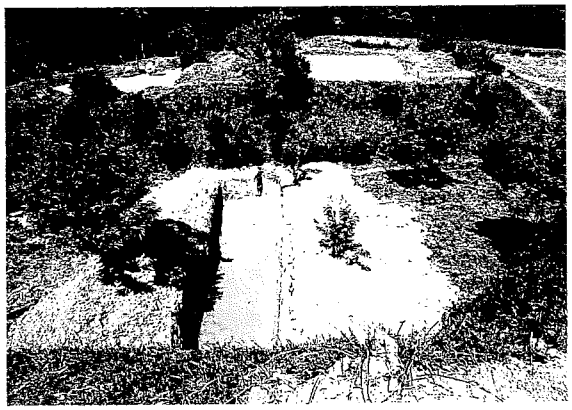
図版11　b郭②　残壕（T17）

図版12　Ⅲ郭　建物跡・柱列跡

図版13　建物跡（南東方向より）

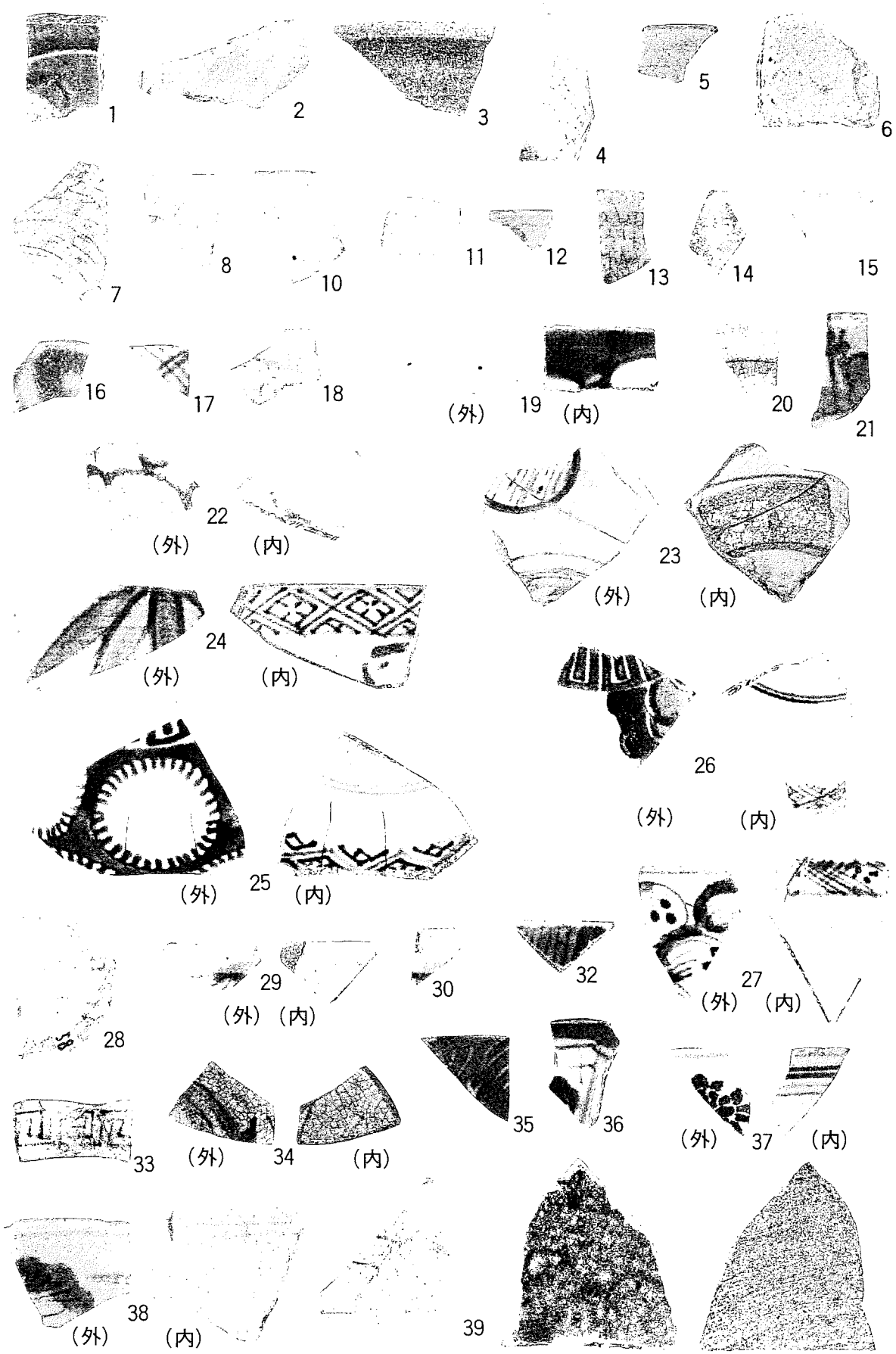
図版14　Ⅱ郭　柱穴・土坑

図版15　航空写真（左よりⅢ郭→堀切→Ⅱ郭）

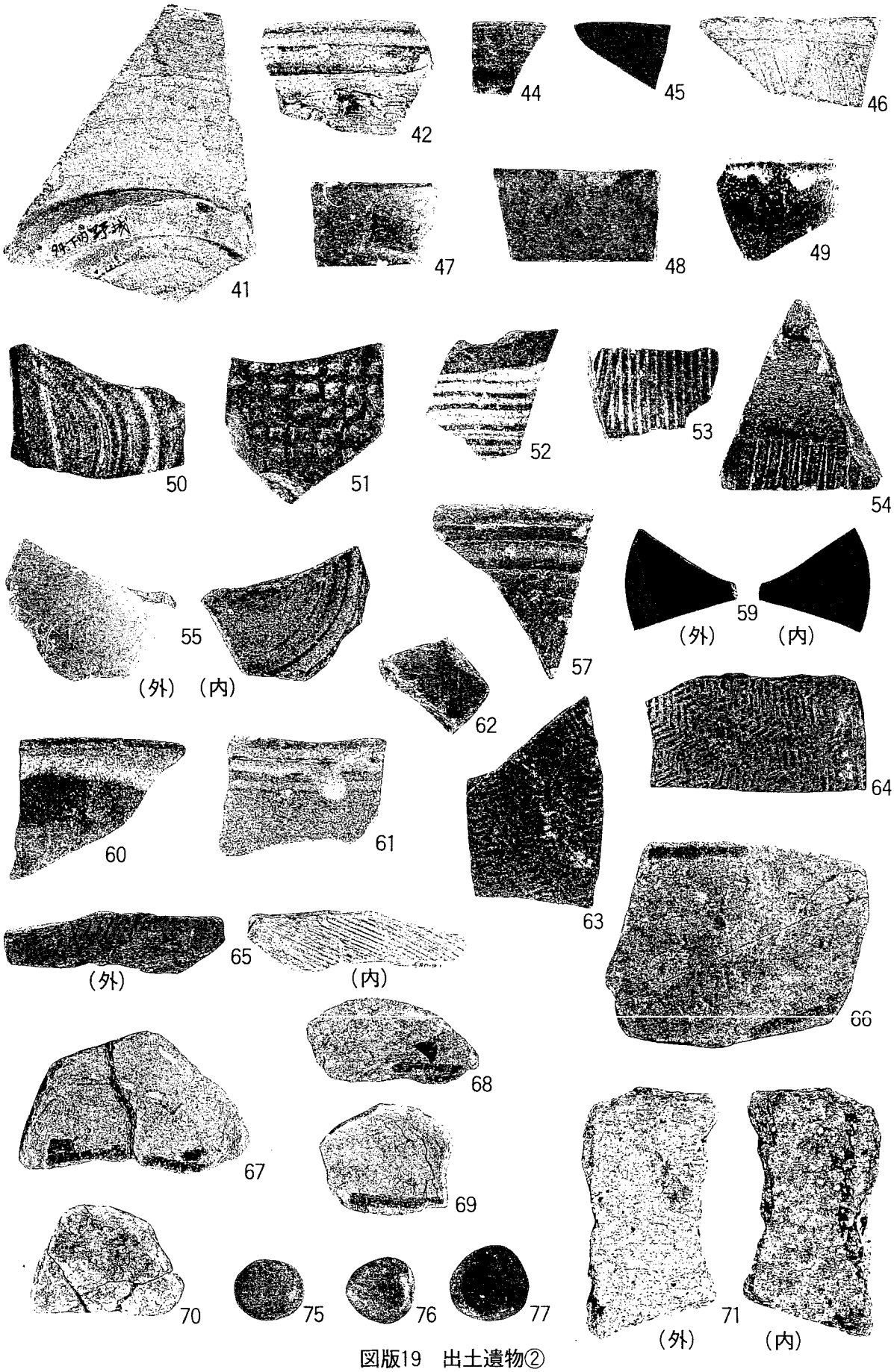


図版16　堀切（東側より）

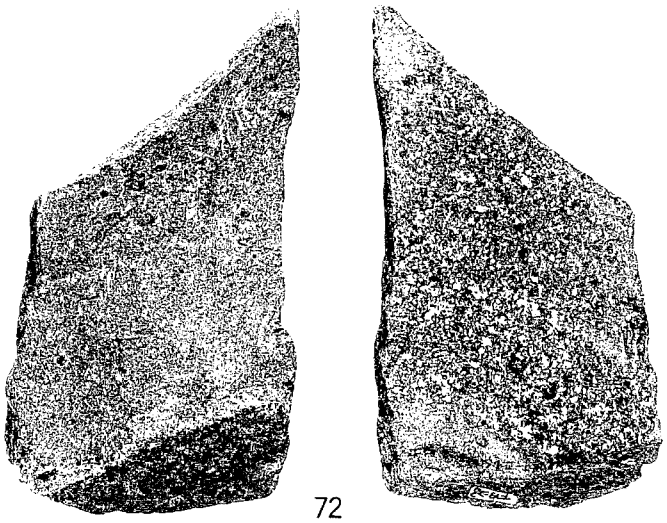
図版17　堀切土層断面


1
2
3
4
5
6
7
8
10
11
12
13
14
15
16
17
18
(外)
19
(内)
20
21
22
(外)
(内)
23
(外)
(内)
24
(外)
(内)
26
(外)
(内)
(外)
25
(内)
29
(外)
(内)
30
32
27
(外)
(内)
28
33
(外)
34
(内)
35
36
(外)
37
(内)
38
(外)
(内)
39
(外)
40
(内)

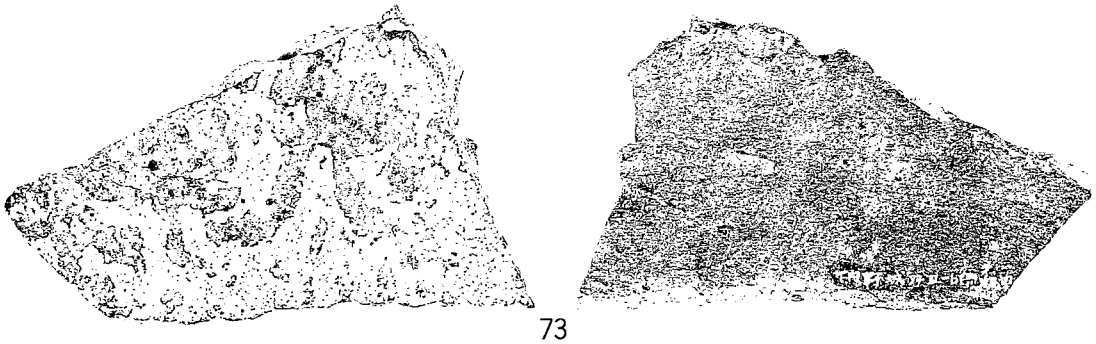
図版18　出土遺物①


41
42
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
(外)
(内)
57
59
(外)
(内)
60
61
62
63
64
65
(外)
(内)
66
67
68
69
70
75
76
77
71
(外)
(内)

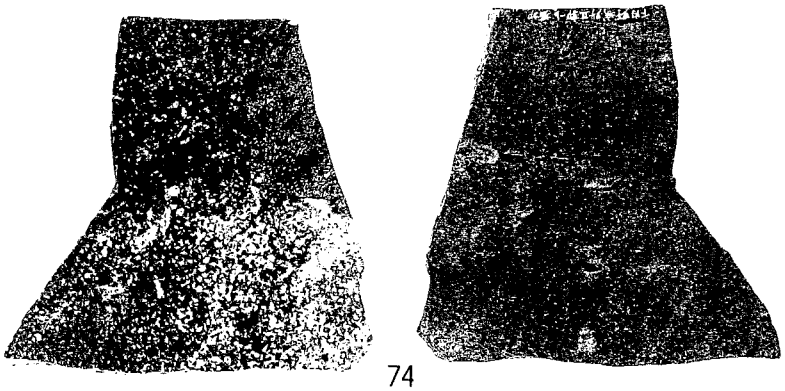
図版19　出土遺物②



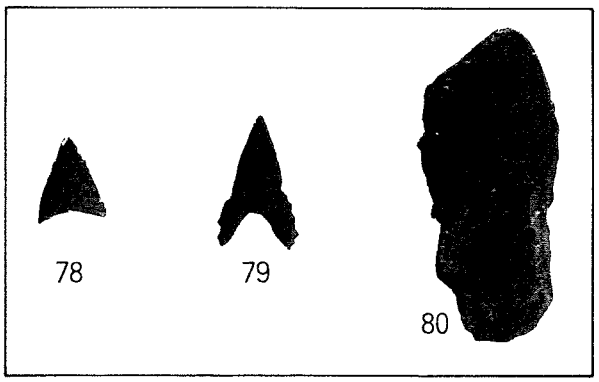
72



73



74



図版20　出土遺物③

図版21　御領城遠景（写真中央右は東禅寺）

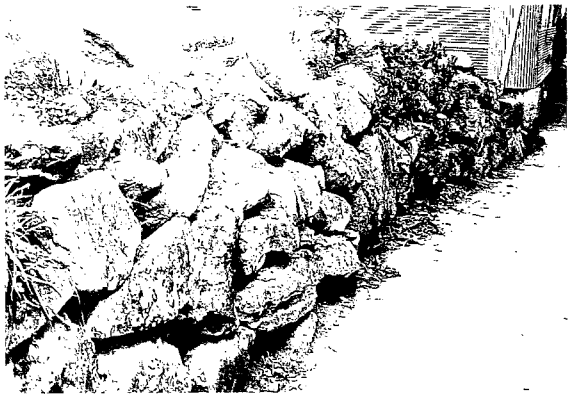
図版22　城木場城遠景（写真中央の丘陵）

図版23　三川城遠景（写真中央左の丘陵）

図版24　三川城遠景（写真中央）

図版25　鬼池城遠景（写真中央の丘陵）

図版26　鬼池城　迫地部分



図版27　鬼池城　旧道沿いの石垣

図版28　鬼池城　馬蹄形の丘陵

あ と が き

中世城跡調査は、五和町史編纂事業の一つの大きな柱である。各種事情によって失われてしまった中世文献の欠を補う方法は、これしかないと思われるからである。

その第一歩として「下内野城」を選んだのは、城の形が整っていて、当時の様相を良く残していそうに思われたのと、現地がほとんど畑地で、調査が比較的容易であろうと思われたからであった。しかし結果は予想に反して、果樹植栽の為の重機使用等によって、遺構の残存は必ずしも良くない事が判明した。

けれども、本文で述べたとおり、短期間の調査にもかかわらず、成果は決して少なくなく、ことに、

① 現地は単なる中世城跡であるばかりでなく、すでに縄文期からの遺跡であること。

② 中世城としても、一般に考えられるように単なる戦国期の城ではなく、上限は南北朝期まで遡ること。

③ 出土遺物の中には、中国からの輸入陶磁器もあった。天草の城の中では内陸部の城に属するにもかかわらず、中国との交渉が推定され、天草文化の海洋指向性を色濃く反映していること。

④ 城の建築様式についても、掘立柱建物が採用されていた形跡があったこと。

などである。

さらに、本報告書は、単に「下内野城跡」の調査報告書であるばかりでなく、町内の他の城跡についての考察や、県内の中世城跡についての考察にもふれ、九州及び天草における当城の位置付けにも配慮したつもりである。これもひとえに大田先生をはじめ、大勢の方々の御指導、御援助の賜物であるが、ことに本調査においては、町教育委員会に組織を上げての調査体制を作って頂いた意義は大きかった。その点、調査の成果もさることながら、調査の過程について理想的な体制が取られた所に特色があり、それが、ひいては町史編纂事業についても大きな自信につながったものとなった。

〔鶴田倉造〕

五和町史資料編（その２）

下　内　野　城　跡

平成７年３月３１日

〔発行〕
五和町教育委員会
〒863-22　熊本県天草郡五和町大字御領2943
TEL　0969－32－1111（代表）

〔印刷〕
株式会社　大和印刷所
〒862　熊本県熊本市戸島町920-11
TEL　096－380－0303

本渡市立歴史民俗資料館